上長浜貝塚

1996年3月

出雲市教育委員会

上長浜貝塚

1996年3月

出雲市教育委員会

発掘調査区近景（西から）

中央セクションベルト貝層断面

中央セクションベルト貝層断面（部分）

発掘調査区東側貝層断面

序

上長浜貝塚は、出雲砂丘の下から発見された珍らしい遺跡です。

このたび、斐伊川放水路関連周辺整備事業の一環の市道新設工事により、上長浜貝塚の一部を調査した結果、全国的にも類例の少ない、歴史時代の貝塚であることがわかりました。また、貝層は、厚いところでは 1.5m以上にも及ぶ歴史時代としては、全国でも最大級の貝塚で、貝のほかにも、魚や獣の骨、魚をとるための網のおもりなどが数多く出土しています。

『出雲国風土記』には、周囲が18kmもある「神門水海」があったことや、そこに生息する貝や魚の名前なども記載され、そうした潟湖に面した専業的な漁村の実態の一端が、少しでも解明されたことは、貴重な成果といえます。

今後も、地元の皆様の熱意により、後世にこの貝塚を伝え、また、この成果が広く活用されることを期待するとともに、発掘調査にあたり、ご指導、ご協力を賜わりました関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

平成８年３月

出雲市教育委員会

教育長　鐘　築　芳　信

例　言

1．本書は、出雲市道路河川課の委託を受けて、出雲市教育委員会が、平成４年度（1992年度）に実施した、市道長浜309号線新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2．本書で扱う遺跡は、上長浜（かみながはま）貝塚（出雲市遺跡地図Ｉ01）である。

3．発掘調査は、平成４年９月７日から、平成５年１月６日までの４ヵ月間にわたり実施した。

4．調査組織は、次の通りである。

調査主体	出雲市教育委員会	
事務局	平成４～６年度	下垣　晴司（文化・スポーツ課長）
	平成７年度	野津　建一（　　同　上　　）
調査担当者	川上　稔	（文化・スポーツ課係長）
	湯村　功	（　　同　　主事）
		（平成６年度から鳥取県教育委員会職員）

5．本書の執筆、編集には、主として川上稔、湯村功があたったほか、松井章（奈良国立文化財研究所主任研究官）氏には動物遺存体を、高安克己（島根大学教授）氏には貝類を、中村唯史（島根大学大学院）氏には古環境について、玉稿を賜わった。

また、調査全般について、松井章（奈文研主任研究官）、田中義昭（島根大学教授）の両先生からは、終始、温かいご指導を賜わったほか、山崎純男（福岡市教育委員会）、真鍋篤行（瀬戸内海歴史民俗資料館）の両氏からは、直接、有益なご助言を賜わった。記して謝意を表します。

さらに、報告書作成にあたって、ご教示いただいた方々は、次の通りである。（敬称略）

内田律夫、広江耕史、西尾克己、松本岩男、赤澤秀則、柳浦俊一、足立克己、井上智博、定森秀夫、穴澤義功、原　裕司、榊原博英、宍道年弘、岩橋孝典

6．貝塚範囲確認トレンチ調査にあたっては、地元の長浜地区の隣接する土地所有者の方々に、協力を賜わった。

7．遺構の略称記号は次の通りである。

ＳＫ（土坑）　　ＳＩ（竪穴住居）

8．本書に使用した方位は磁北を示す。

9．発掘調査、遺物整理、トレース等については、次の方々の協力を得た。

発掘調査	鐘築蔵吉、岡　省吉、佐藤保信、片山　修、陶山　潤、川上　茂、有田松生、曽田良吉、前島正喜、須谷昭次、岸富美子、石飛昭子、竹田美代子、石飛すみえ、藤江絹代、春日摩那子、藤江悦子、柳楽英子、吾郷要子、浜村富江
遺物整理等	河井栄子、矢田愛子、石川桂子、永田節子、小村睦子、太田和子、遠藤恭子、鵜口令子、飯國陽子、川谷真弓、岡野和栄

目　次

序

例　言

目　次

挿図目次

1．位置と環境……1

2．調査の概要……4

3．遺構と遺物

(1)　貝塚以前……7

(2)　貝塚……21

(3)　貝塚以後……52

4．上長浜貝塚と周辺の古環境……53

5．出雲市上長浜貝塚出土の貝類……58

6．上長浜貝塚出土の脊椎動物遺存体……68

7．ま　と　め……80

図　版

挿図目次

1．位置と環境
第１図　上長浜貝塚と周辺の遺跡…… 2
第２図　上長浜貝塚と周辺の歴史…… 3
2．調査の概要
第３図　上長浜貝塚周辺地形測量図…… 5
第４図　上長浜貝塚遺構配置図…… 6
3．遺構と遺物
【貝塚以前】
①　縄文早期末～前期
第５図　上長浜貝塚縄文土器パターン分類図
（不明及び底部片のぞく）…… 7
第６図　縄文土器実測図　(1)…… 8
第７図　縄文土器実測図　(2)…… 9
第８図　上長浜貝塚西側壁面土層図……10
第９図　上長浜貝塚出土石器実測図　(1)……13
第10図　上長浜貝塚出土石器実測図　(2)……14
②　弥生時代・古墳時代
第11図　ＳＩ01実測図……15
第12図　ＳＩ01出土遺物実測図……16
第13図　ＳＫ01出土遺物実測図……17
第14図　ＳＫ01実測図……17
第15図　その他出土遺物実測図　(1)……19
第16図　その他出土遺物実測図　(2)……20
第17図　陶質土器実測図
（原図は松本岩雄氏）……20
【貝　塚】
第18図　出雲平野の貝塚遺跡位置図……21
第19図　出雲平野の貝塚遺跡一覧表……22～23
第20図　上長浜貝塚クロスナ層略測図……24
第21図　上長浜貝塚範囲図……25
第22図　貝塚断面図
（Ｆ、Ｉ、Ｋライン・Ｇ－Ｍライン）…26
第23図　貝塚平面図及び断面図
（Ａ３－Ｍ３）……27～28
第24図　ＳＫ02実測図……29
第25図　ＳＫ02出土土器実測図……29
第26図　ＳＫ03実測図……29
第27図　ＳＫ04実測図……29
第28図　貝塚前期出土須恵器、土師器実測図30
第29図　貝塚後期出土土師器実測図……31
第30図　製塩土器実測図……32
第31図　貝塚出土土製品実測図……33
第32図　土錘実測図　(1)……35
第33図　土錘実測図　(2)……36
第34図　土錘実測図　(3)……37
第35図　土錘実測図　(4)……38
第36図　土錘実測図　(5)……39
第37図　形態別土錘一覧表……40
第38図　層別土錘一覧表……41
第39図　土錘法量統計(1)（ＰとＬとの関係）42
第40図　土錘法量統計(2)
（口径と重量との相関）……43
第41図　島根県における棒状土錘出土遺跡…43
第42図　土錘計測一覧表　(1)……44
第43図　土錘計測一覧表　(2)……45
第44図　土錘計測一覧表　(3)……46
第45図　土錘計測一覧表　(4)……47
第46図　石製品実測図……48
第47図　骨角器実測図……49
第48図　鉄製品実測図　(1)……50
第49図　鉄製品実測図　(2)……51
【貝塚以後】
第50図　貝塚以後出土土製品実測図……52
第51図　貝塚以後出土土器実測図……52
4．上長浜貝塚と周辺の古環境
図１．上長浜貝塚の位置……53
図２．出雲平野西部の地質断面図……54
図３．出雲平野と宍道湖の地形発達模式図…55
5．出雲市上長浜貝塚出土の貝類
表１－ａ　出雲市上長浜貝塚出土の貝類と
その生息分布及び生息環境……62
表１－ｂ　出雲市上長浜貝塚出土の貝類と
その生息分布及び生息環境……63
表２－ａ　出雲市上長浜貝塚における層別の
貝類出土状況……64
表２－ｂ　出雲市上長浜貝塚における層別の貝
類出土状況……65
6．上長浜貝塚出土の脊椎動物遺存体
図１　クロダイ歯骨高分布……70
図２　スズキ歯骨高分布……70

1．位置と環境

上長浜貝塚は、島根県東部に位置し、斐伊川と神戸川によって生成された出雲平野の西方の海岸砂丘地に立地している。出雲砂丘の東側には、神戸川が砂丘の内側を這うようにして南から北に流下し湊原で日本海に注いでいる。さらに、海岸沿いの砂丘地を北へ進むと、やがて島根半島部の北山山塊に接し、その麓には、大国主命を祀る出雲大社が鎮座している。

出雲平野西部では、出雲大社の東方の菱根遺跡と、上長浜貝塚が最も古く、縄文時代早期末の繊維土器が出土している。いづれも遺跡の全容ははっきりしないが、平野縁辺部という遺跡立地に特色がある。縄文時代後～晩期には遺跡数も次第に増え、やがて沖積平野の微高地にも遺跡がみられるようになってくる。

弥生時代前半期の遺跡は、極めて限られているが、中期中葉以降、遺跡は爆発的に増え、平野のすみずみにまで、生活が営まれるようになってくるとともに、矢野遺跡、天神遺跡、古志本郷遺跡などの拠点的な大規模集落が出現する。

また、矢野遺跡、多聞院遺跡など、遺跡の中には、貝塚を伴う例もかなりあり、貴重な蛋白源として、貝類が捕採されていたことが窺える。上長浜貝塚にもみられるように、出雲地方では、比較的遅い時期まで貝塚が形成されており、地域的な特色となっている。

古墳時代前、中期の遺跡や古墳は少ないが、後期後半になると、今市大念寺古墳、上塩冶築山古墳などの大規模墳が相次いで築造され、弥生時代中期後半～後期以来のピークが再び訪れ、横穴式石室が盛行する。

奈良時代は、上長浜貝塚で、貝塚が形成されはじめる時期にあたり、733年に編纂された『出雲国風土記』には、上長浜貝塚が立地する砂丘の内側に、周囲が18kmもあるような潟湖である「神門水海（かむどのみづうみ）」が存在していたことが記載されている。

また、上長浜貝塚が立地する砂丘地について、『出雲国風土記』では、「即ち水海と大海との間に山あり。長さ22里234歩、広さ３里あり。此は意美豆努命（おみづぬのみこと）の国引き坐しし時の綱なり。今俗人、号けて薗松山（そののまつやま）と云ふ。地の形体（さま）、壤（つち）も石も並びになし。白き沙（いさご）のみ積み上がれり。即ち松の林茂繁るも、四風吹く時は、沙飛び流れて松の林を掩ひ埋む。今、年に埋もりて半ば遺（のこ）れり。恐らくは遂に埋もれ已てなむか。」と記しており、当時、砂丘の活動が活発で、成長している様子が窺える。上長浜貝塚付近は、砂丘の風下側にあたり、砂丘もそれほど発達しておらず、前面に潟湖をのぞむ、生活や生業を営むうえでは適地であったことが推測される。

これまで、出雲大社付近の砂丘上では、弥生時代以前からの遺物を出土する原山遺跡のほか、古墳時代後期の遺物とともに、ヤマトシジミを主とする貝類やシカを含む貝塚が認められた鹿蔵山遺跡、古墳時代の貝塚を含む南原遺跡、奈良時代から平安時代初期の貝塚で、鉄製刺突漁具（ヤス）が出土した中分（なかぶん）貝塚が知られているが、神戸川河口から南の出雲砂丘地には、上長浜貝塚以外は全く遺跡は認められない。しかし、10ｍ以上も砂丘下深く埋もれていた上長浜貝塚が、採砂により偶然に発見されたように、同じ状態で砂丘下に遺跡が埋もれている可能性は、十分に考えられる。

1．上長浜貝塚　2．出雲大社境内遺跡　3．原山遺跡　4．菱根遺跡　5．馬見烽跡
6．大寺古墳　7．矢野遺跡　8．白枝荒神遺跡　9．天神遺跡　10．今市大念寺古墳
11．西谷墳墓群　12．上塩治築山古墳　13．地蔵山古墳　14．神門寺境内廃寺　15．古志本郷遺跡
16．小坂古墳　17．宇賀池堤跡　18．放れ山古墳　19．妙蓮寺山古墳　20．宝塚古墳
21．多聞院遺跡　22．北光寺古墳　23．山地古墳（消滅）

第１図　上長浜貝塚と周辺の遺跡

B.P.(年前)	時代区分	出雲市とその周辺	上長浜貝塚
	鎌倉		貝塚がつくられなくなり、集落が廃絶する
	平安		
1,000			
	奈良	『出雲国風土記』ができる	漁業活動がさかんになる 貝塚が形成されはじめる(大陸系遺物)
	古墳	横穴墓が普及する 横穴式石室が普及する (大念寺古墳、築山古墳など) 大寺古墳が築造される 山地古墳が築造される	
	弥生	四隅突出型墳丘墓が築かれる(西谷墳墓群) 荒神谷に銅剣などが埋められる(荒神谷遺跡) 大きな拠点集落が営まれるようになる	ふたたび集落が営まれる(竪穴住居跡)
2,000	縄文 晩期		
	縄文 後期	出雲平野に少しづつ集落がふえてくる	
	縄文 中期		
5,000	縄文 前期		
6,000	縄文 早期	出雲平野に人が住みはじめる(菱根遺跡)	上長浜に、はじめて生活が営まれる (縄文土器、石器)
10,000	旧石器		

第2図　上長浜貝塚と周辺の歴史

2．調査の概要

上長浜貝塚は、島根県内随一の沃野である出雲平野の西端に位置している。西に日本海、東を神戸川に挟まれた出雲砂丘の東斜面の一角にあり、沖積低地の西側を、砂丘に沿って南から北へ流れる神戸川の左岸堤防から西方400ｍに所在する。付近一帯は、かなり厚く砂が堆積した砂丘地であったが採砂によってかなり大きく抉られ、平坦な畑地に変貌している。

この貝塚は、昭和58年、砂利採取に伴い、現地を踏査した際に、その一角に積み上げられた廃砂の中から、ヤマトシジミなどの貝類とともに、弥生土器、土錘などが発見され、貝塚であることが確認されている。(注1) 遺物が含まれる層は、「クロスナ層」と呼ばれる暗褐色の砂質土であるが、西側の砂丘断面の観察では、南東から北西方向に砂丘の斜面を上っており、また東側の畑地では、地表下0.5ｍに、ほぼ水平に認められている。クロスナ層の厚さは0.3ｍで、斜面を除くクロスナ層に遺物が含まれており、当時、貝塚は、砂丘の風下側の斜面下にあったことが考えられた。貝塚は、現在の砂丘下10ｍ以上に深く埋もれていた。採砂がクロスナ層より上の良質の砂しか対象にしないため、クロスナ層を損わないように指導するとともに、その後クロスナ層が露出したときには現地を踏査して確認していたが、貝塚の実態は全く不明であった。

その後、平成４年に、斐伊川放水路関連事業として、市道が敷設されることになり、そのルートを試掘調査した結果、保存良好な貝塚を確認したが、土地改良区との関係もあり、ルートの変更はできなかったため、発掘調査を実施した。

貝塚は、畑地の下約１ｍに広がっており、重機で、遺物包含層の上層までの埋土を排出したのち、グリッド（２×２ｍ）を設定した。調査面積は、南北に細長い約200㎡で、そのうち貝塚が検出されたのは、南側の150㎡である。貝塚の表面は、かなり固く締まっており、一部攪乱はあるものの、比較的保存状態は良好であった。平面的には、貝層の分層が困難であったため、幅0.3ｍの狭いサブトレンチで各層の堆積状況を確認しながら、調査を進める方法で実施した。

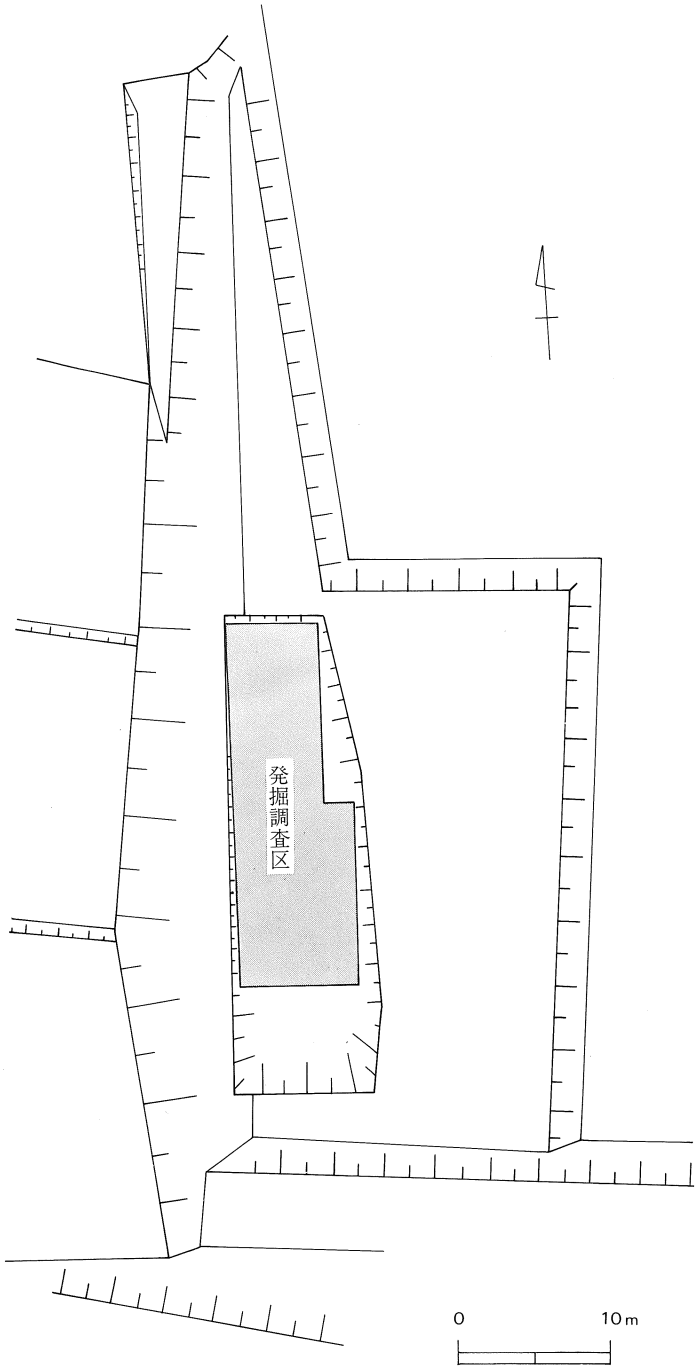
上長浜貝塚は、縄文時代早期末から中世初期までの複合遺跡である。最も古い遺物包含層は、縄文時代早期末から前期初頭で、その上層に、弥生後期から古墳時代の遺物を包含する層があり、さらに奈良時代後半から平安時代末期までの貝塚、貝塚以後の４時期に大きく区分できる。

最も古い時期（Ⅰ期）は、51～52層で、唯一、クロスナ堆積前の砂質土に遺物を包含している。遺構は全く検出できなかったが、縄文時代早期末から縄文時代前期初頭の土器のほか、黒曜石や安山岩製の石鏃等の石製品などが数多く出土している。縄文土器は、その多くが、縄文時代早期末の繊維土器で、完形品はないものの、底部が平底のものが数点出土しているほか、成形時の輪積み痕を明瞭に残すものも含まれるなど、貴重な知見が得られている。

Ⅱ期は、46～49層で、クロスナ層中に遺構、遺物を包含している。なお、50層は、軟かい明褐色砂質土で、縄文の包含層が確認されるまでは、この遺跡での地山と考えていた無遺物層である。遺構としては、51層に掘り込んだ弥生時代後期の竪穴住居のほかに、土坑がある。竪穴住居は、貝塚よりも下層から発見され、調査区外にかかるため全容は明らかではないが、平面プランは、５×５ｍ以上の隅丸方形と推定される。また、特異な遺物としては、古墳時代前期末と推定される陶質土器がある。

Ⅲ期は、貝塚形成期で、この遺跡の中心をなす時期である。層としては、10～44層が当該期であるが、二時期に大別することができる。貝塚前期（33～44層）は、奈良時代後半から平安時代初期（８Ｃ後半～９Ｃ）、貝塚後期（10～30層）は平安時代末期（12Ｃ）である。

貝塚形成前の地形は、調査区中央付近（Ｉライン）では、西から東に向かって尾根状に突出しながら下っており、また調査区の南側は、かなり急な傾斜地になっている。貝塚は、その地形に左右され調査区最西端を基点にして、東に向かって扇状に広がっている。南側は、谷状地形に向かってかなり深く落ち込んでおり、確認不能な部分があるが、調査区外での範囲確認調査によれば、東に35ｍ近く広がり、貝塚の総面積は700㎡以上の、歴史時代の貝塚としては全国でも最大級の貝塚であることがわかった。貝塚は、一部に攪乱はあるものの、表面がかなり固くなっていたため、保存状態は良好であった。貝塚は、西端の上面レベルが約９ｍ、35ｍ東の先端部分では約４ｍで、かなり傾斜が大きい。また南側は、東から西に向かって谷状に入り込んでいることが、採砂の際に確かめられており、当時の潟湖の汀線は、かなり貝塚の近くにあったことが考えられる。また、貝層は、純貝層、混土貝層、混貝土層の互層で、厚いところでは1.5ｍにも及ぶ。さらに、純貝層の中には、単層で50㎝もの厚いところもある。



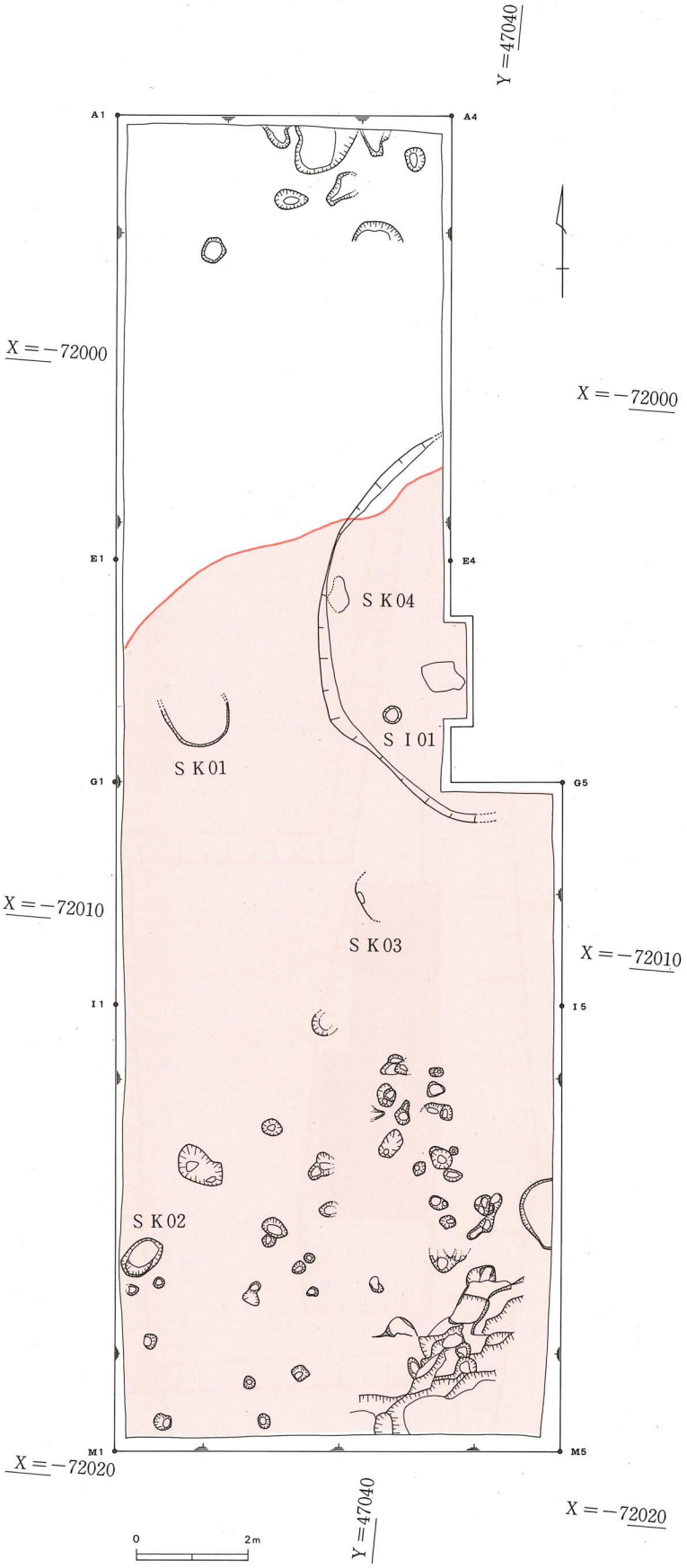
第３図　上長浜貝塚周辺地形測量図

貝塚からの出土遺物としては、土師器、須恵器のほかに、製塩土器もある。貝塚前期の遺物で、量的には多くはないが、製塩土器として完形に復元できたものが１個体ある。漁具としては、管状土錘、棒状土錘などの漁網錘が600点以上出土しており、中には大型の有溝石錘も数点ある。また、釣針、鎌、刀子、ヤス、紡錘車などの鉄製品もかなり含まれるほか、骨角器も数点出土している。貝塚の主な構成要素である貝類は、ヤマトシジミがほとんどで、その他の貝としては、カキ、オキアサリなどがあり、岩礁性の貝はほ

とんど見当らない。また、微小な陸貝がかなり含まれ、上長浜貝塚出土貝類は、潟湖である「神門水海」でのヤマトシジミやマガキの採取と、微小な陸貝類（落ち葉や腐植土中に生息）に特徴づけられる。(注2) そのほか、動物遺存体もかなり多く、マダイ、クロダイ、サメなどの魚骨が、総点数にして、約65,000点（5㎏）、シカ、イノシシなどの獣骨が、約100点（1㎏）出土している。

最も新しい時期（Ⅳ期）は、貝塚廃絶後（平安時代末期）に堆積したクロスナ中に土師器などを包含しており、貝塚の北側に広がっている。層厚は0.5m以内で薄く、遺跡全体からみれば、極めて局地的で限られた範囲に遺物が散布している。

このように、上長浜貝塚は、縄文時代早期末から中世初期に及ぶ複合遺跡であるが、特に、古代から中世初期の貝塚は、全国的にみても最大級のもので、網漁を中心とした漁撈、貝の採取、製塩など漁村のすべての労働が集約された専業的な漁撈集落として貴重な知見が得られている。



第4図　上長浜貝塚遺構配置図

3．遺構と遺物

（1）貝塚以前

①縄文時代早期末～前期初頭

上長浜貝塚で最も遡る時期は、縄文早期末である。当時の環境は、海進により、現在の出雲平野に海域が広がり、古宍道湾の湾口部に南から突き出した半島部に、遺跡は位置している。その半島部の風下側の斜面下は、冬の季節風を避け、山の幸、海の幸を求めるのに適した環境であったと考えられる。

遺構は全く検出できなかったが、遺物としては、約1000点の縄文土器と、石鏃などの石器のほか、剥片、砕片を含めると、4000点近く出土している。遺物は、調査地のうち、北側のＡ～Ｆグリッドで発見されている。土層的には、軟かい明褐色砂質土（51層）と、かなり固く締まった茶褐色砂質土（52層）から出土し、特に52層に多い。出土土器でみると、縄文時代早期末の、いわゆる菱根式と呼ばれる繊維土器と、縄文時代前期初頭の轟Ｂ式土器があるが、51層と52層との、時期の区別は明確ではなかった。なお、その下の53層は、この遺跡での地山となる、やや固く締まった褐色砂質土で、無遺物層である。

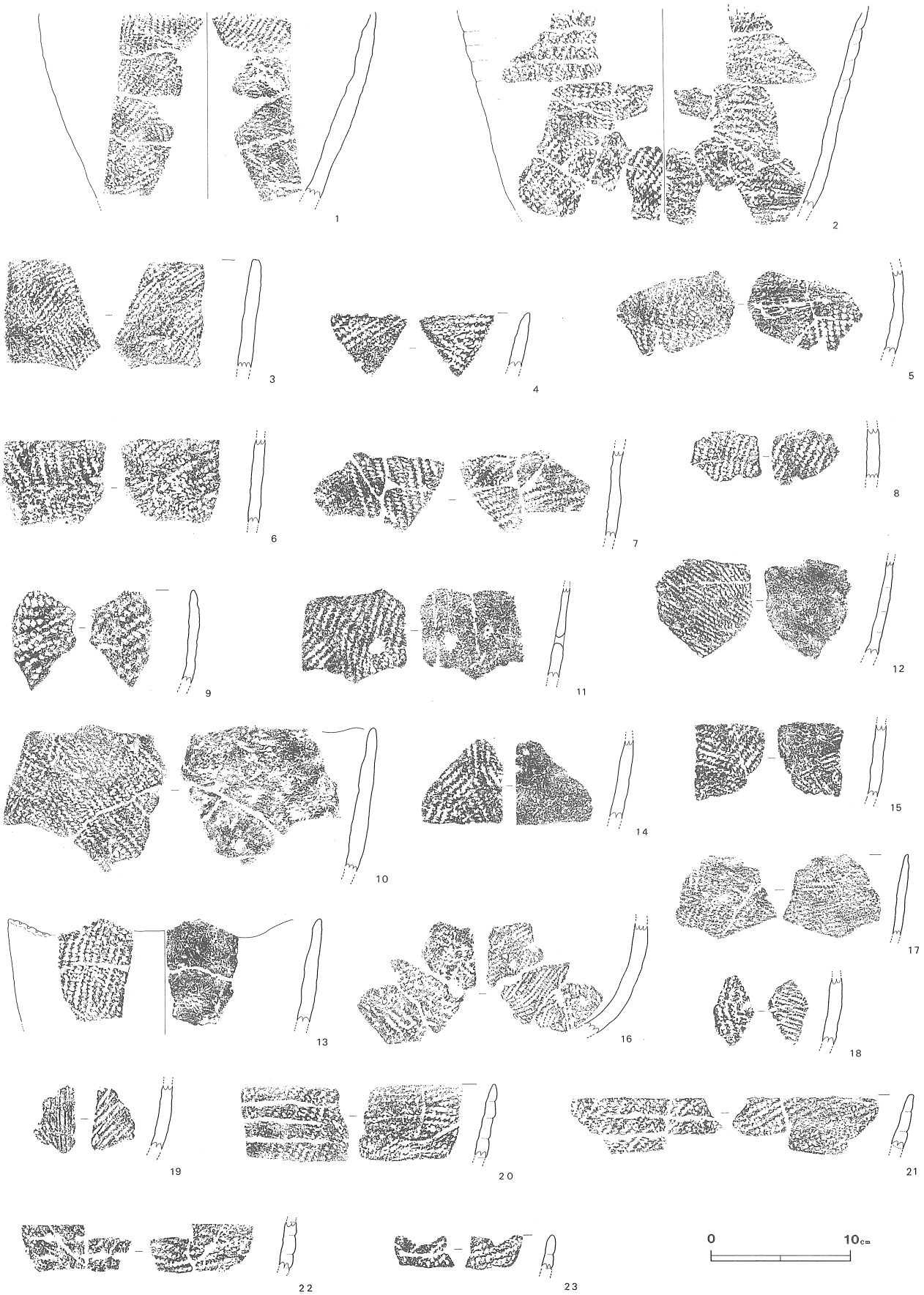
縄文土器

縄文土器は、調査地のうち、北側のやや平坦地から、局地的に、かなり多く出土している。全部で960片が出土しており、層位的にみると、51層から85片、その下の52層から845片、攪乱等その他30片となっている。平面的には、北寄りのＡ～Ｆの各グリッドから出土しており、特に多いのが、52層のＡ１（113片）、Ｂ３（90片）、Ｃ３（86片）、Ｄ１（107片）、Ｅ３（83片）である。最も南側のＦグリッドでは、Ｆ１（なし）、Ｆ２（３片）、Ｆ３（２片）のように、ほとんど出土していない。型式別で

分類	土器型式名	表（外面）			裏（内面）			土器片
		縄文	条痕	なし	縄文	条痕	なし	点数
上長浜　1類	繊維（菱根式）土器	○					○	292
上長浜　2類		○			○			156
上長浜　3類		○				○		26
上長浜　4類			○			○		19
上長浜　5類	轟Ｂ式土器		○			○		88

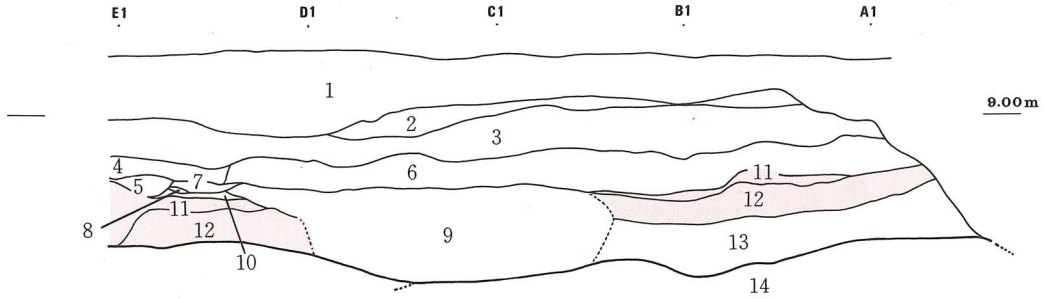
第５図　上長浜貝塚　縄文土器　地文パターン分類図

（不明及び底部片をのぞく）



第６図　縄文土器実測図(1)

第７図　縄文土器実測図(2)



1　攪乱
2　暗褐色砂質土
3　暗褐色砂質土
4　暗褐色砂質土
5　暗褐色砂質土
6　明褐色砂質土
7　黄灰色砂質土
8　暗褐色砂質土
9　黄灰色砂
10　明褐色砂質土
11　明褐色砂質土
12　茶褐色砂質土
13　褐色砂質土
14　黄灰色砂

縄文土器包含層

0　2m

第８図　上長浜貝塚西側壁面土層図

は、縄文時代早期末の繊維土器（菱根式）と、前期初頭の轟Ｂ式土器が出土している。内訳は繊維土器513片、轟Ｂ式土器88片、不明359片となっている。これらについて、地文パターンをみてみると、繊維土器で４類（上長浜１類～４類）、轟Ｂ式土器１類（上長浜５類）の、あわせて５類に分類できる。その中では、上長浜１類（表縄文、裏なし）が最も多く、292片を数える。次に多いのが、上長浜２類（表裏縄文）で、156片出土している。上長浜５類は轟Ｂ式土器で、粗い表裏条痕調整をしている。上長浜３類（表縄文、裏条痕）、上長浜４類（表裏条痕）は、量的にはかなり少ない。

繊維土器は、器形としては、深鉢、平底が基本形である。深鉢も、胴部から口縁部にむかってやや開くタイプと、円筒状を呈し、あまり開かないタイプがある。口縁端部は、基本的に刻目があり、直線的である。しかし、波状口縁と考えられるものも数点あり、地文パターンでみると、それらは、上長浜１類に属する。また、底部は、平底がほとんどである。そのうち、底径５～９㎝の器肉の厚手のものは、おそらく、口縁にむかってやや開くタイプの深鉢と考えられるが、器肉の薄いものは、形態的に、円筒状にやや直線的に立ち上がる可能性がある。なお、１点だけ、丸底になると考えられるものも出土している。そのほか、繊維土器での貴重な知見は、輪積み痕跡が残っている点である。明瞭に痕跡が残っているもので図示したものは、５点ある。１～1.5㎝幅の粘土紐を輪積みにしており、接合部の内外面には、指頭圧痕が残っている。なお、痕跡がみられるのは、すべて、上長浜２類に含まれる。なお、補修孔のある土器も数点認められる。

繊維土器のうち、深鉢（６－１～９）は、上長浜２類に含まれる表裏縄文の土器である。口縁部の残る１、２、３、４、９には、刻目が施されている。１は、口縁から胴部の中ほどまで器形がわかる土器であるが、口縁にむかってやや開く形態の深鉢で、器肉の薄い口縁端部には刻目を施している。外面は縄文であるが、内面は、口縁部付近の約４㎝幅が縄文で、その下は条痕（植物の茎を束にして施文）で調整している。完形品が出土していないのではっきりしたことはわからないが、同一面に両者を併用することも行なわれたと考えられる。２は、１よりもやや大きく、口径30㎝の深鉢である。表裏縄文で、外面の口縁部付近には、輪積み痕が明瞭に残っている。10～14は、上長浜１類に含まれ、13は、口縁の波状が明瞭で刻目も施している。また、11には、径１㎝の補修孔がある。15～18は上長浜３類で、19は上長浜４類に属するものである。20～23は、輪積み痕が明瞭に残る土器で、いづれも

表裏に縄文を施文している。24～31は底部のわかるものであるが、平底は７点で、26のみが丸底と考えられる。平底のうち、24は器肉の薄い焼きの良い土器で、他はすべてやや器肉の厚いものである。24は、外面に縄文を施すが、内面や底部は無文で、形態的には、ほぼ円筒形を呈すると考えられる。器肉の厚い底部は、底径５～９㎝で、胴部はやや開くタイプのものである。丸底については、形態的には不明である。

轟Ｂ式土器（７－32～49）は、上長浜５類で、地文としては、内外面に粗い条痕（二枚貝による施文）を施し、基本的には、深鉢、丸底と考えられる。口縁部や胴部に隆帯を貼り、その上に刻目を施すことが、この土器型式の大きな特徴で、32、34、38、39、40のように口縁の下１～２㎝に、刻目隆帯を施すほか、35、36、37のように、ヨコ方向に胴部の屈曲部とその３㎝上に、２条の刻目隆帯を並列させるものもある。また、33、40、43のように、ヨコ方向の刻目隆帯に直交するタテ方向の隆帯をもつものもあるが、隆帯に刻目があるかどうかは不明である。口縁は、まっすぐなものが基本だが、32、33は、やや波状を呈する。なお、底部はほとんど見当らないが、49が当該期の丸底と考えられる。また、34には補修孔がある。

これまで、縄文時代早期末の繊維土器は、島根県内では、菱根遺跡、(注３)西川津遺跡、(注４)タテチョウ遺跡、(注５)久根ケ曽根遺跡(注６)など数例があり、鳥取県では目久美遺跡か(注７)らも出土しているが、量的にも少なく、不明な点も多かった。上長浜貝塚から、はじめてまとまった量が出土し、底部は平底が基本で、丸底も少し含まれることが明らかとなった。また、深鉢も胴部がやや開いて立ち上がるものと、ほぼ円筒状にまっすぐに立ち上がるものの、少なくとも２種類が存在することがわかった。

轟Ｂ式土器は、県内からは、西川津遺跡、タテチョウ遺跡、後谷遺跡、(注８)竹ノ花遺跡(注９)などで出土しているが、上長浜貝塚では、繊維土器にくらべて、かなり出土量が少ない。なお、近年調査された島根大学構内遺跡(注10)では、アカホヤ火山灰を層準にして、下層に繊維土器、上層から轟Ｂ式土器が出土している。

縄文時代の石器

本遺跡の最下層からは縄文時代の土器・石器が多量に出土している。これらの所属時期は、土器が早期末～前期初頭に限定されることから、石器も同時期に残されたものと考えることができる。ここでは、これら石器群のあり方について述べてみたい。

１．出土状況

石器群は遺構に伴うものはなく、包含層中からの出土である。出土した層位は51～52層にかけてで、後者に集中している。遺物は上下に幅をもって検出されており、特定の面にはりついた形で出土したわけではない。

遺物の出土する範囲は、南側は調査区内で完結する。これは南側にむけていったん地形が高まるためである。北側と東側は調査区以外にも包含層が続き、遺物の分布も広がると思われるが、その範囲は特定できない。ただ東側は旧地形が谷へと推移するため、分布範囲はそう遠くまで続かないであろう。西側にも若干の広がりが考えられるが、トレンチで確認した限りでは調査区から近いところで包含層がなくなっていたため、それほど分布範囲が続くとは思われない。したがって、遺物の分布から

みると主要な範囲の調査を行ったといえるのではなかろうか。

遺物の平面的出土状況をみると、集中地点を形成するわけでもなく、全体的に散布していたといえる。

2．石材構成

使用石材は数量的にみると、黒曜石・サヌカイトが中心で、これにそのほかのものが加わる。黒曜石とサヌカイトの比較をすれば、数量的には前者が圧倒的に多いが、重量では後者が上回るのではなかろうか。

その他の石材は以下のとおりである。

凝灰岩質シルト岩	5母岩	砂岩	1母岩
流紋岩質凝灰岩	5母岩	溶結凝灰岩	1母岩
流紋岩	5母岩	流紋岩質軽石	1母岩
安山岩	4母岩	瑪瑙	1母岩
頁岩	1母岩	玉髄	1母岩
シルト岩	1母岩	長石	1母岩
凝灰岩質砂岩	1母岩	石英	1母岩

これらは具体的な産地は指摘し得ないが、大きくみて遺跡周辺部から持ち込まれたものであろう。石材の種類は多いが、用いられる頻度はかなり異なり、1母岩のみのものは主要な石材とは言いがたい。黒曜石・サヌカイトといった主要な石材以外にも雑多なものを用いる中で、ある程度の選択性を伴っていたことが指摘できよう。

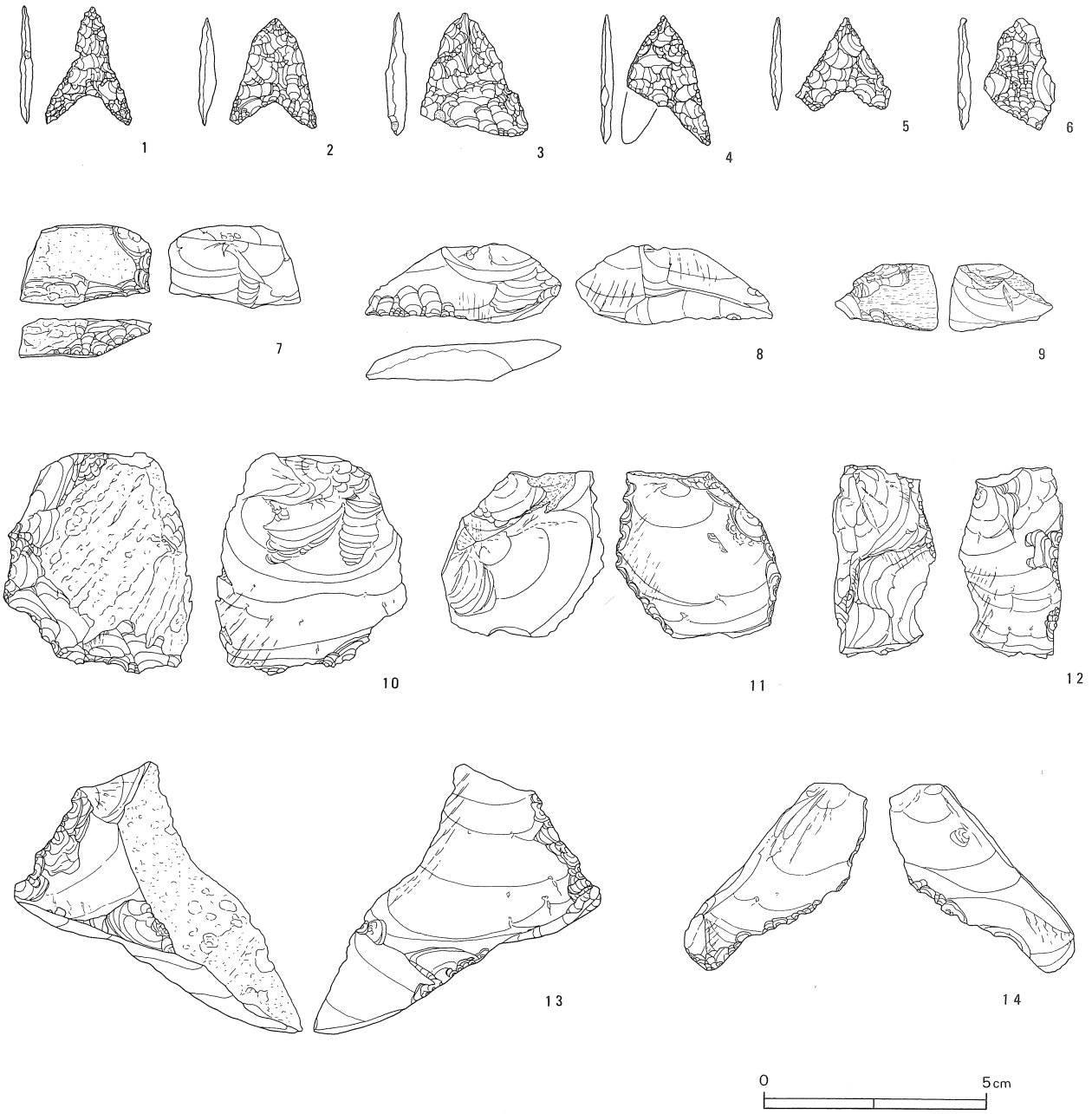
3．器種構成

認められる器種は石鏃・スクレーパー・楔形石器・石錘・石斧・二次加工のある剥片・微細剥離痕のある剥片・石核・剥片・砕片である。

第9図1～6は石鏃である。1は先端から基部にむけて直線的に延びず、くの字状に折れる形状のものである。2は五角形状を呈する。3は加工途中のものと考えられる。全体に調整が粗く、裏面は素材面を残しているうえ特に粗い。4は右側縁は入念な加工を施しているが、左側縁は粗い。器体中央上半に素材面を残しており、最後の仕上げの段階で脚部が欠損したものと思われる。先端の作り出しは入念である。5は縁辺のつぶれが顕著なものである。確証はないが、製作過程に両極剥離を用いたことの現れであろうか。6は製作途中に破損したものであろう。側面からの調整は大まかであるが、下方からの調整は細かい。尖端部に素材面を残す。

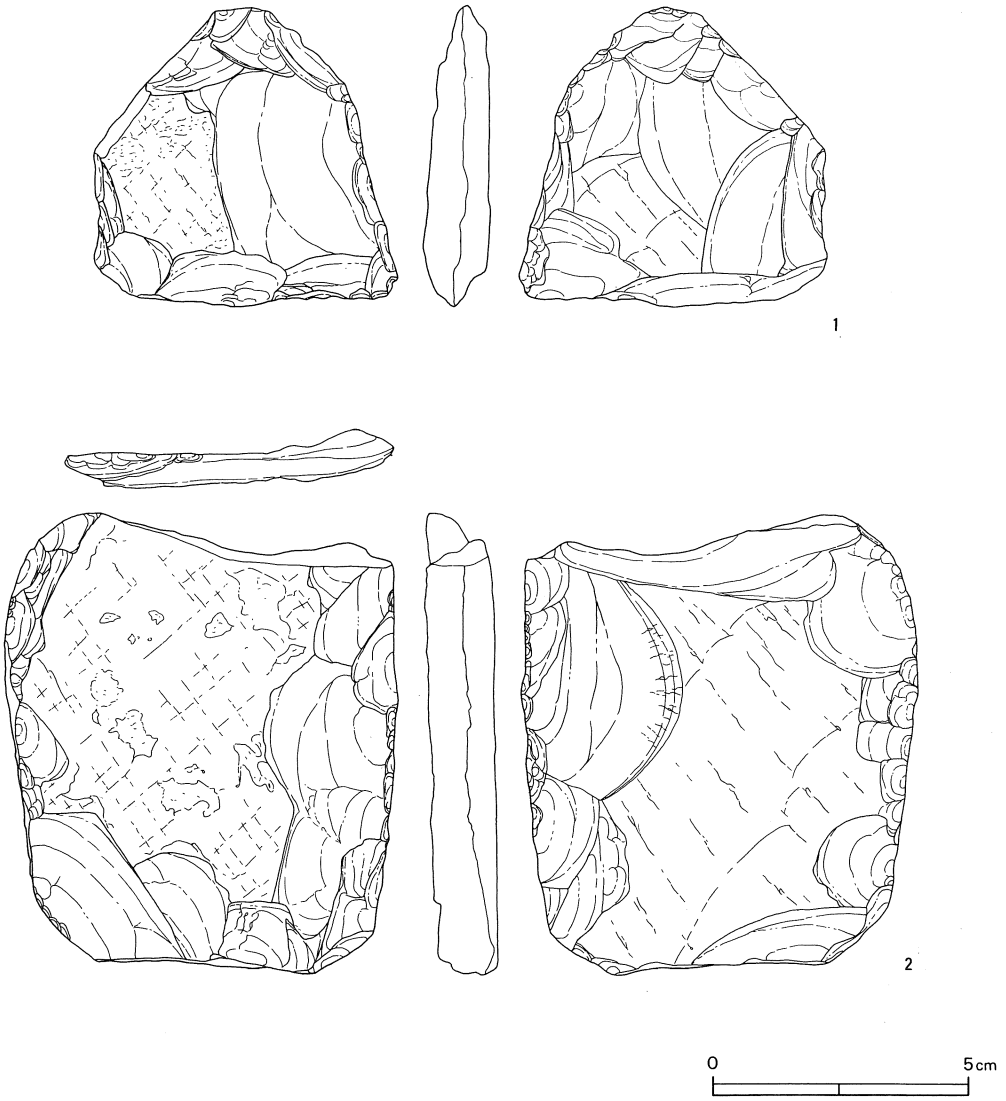
7、8はスクレーパーである。7は末端部にエンド・スクレーパーと呼んでいいほどの急角度の刃部を設定している。背面右側縁にも加工が施される。下端に自然面を残すことから、分厚い短小な剥片を素材としていることがわかる。8は剥片素材の石核をスクレーパーに転用したものか。器体の一部が尖形をなすように平坦剥離による加工を加え刃部としている。

9～14は二次加工のある剥片である。9は上下両端に加工が施される。下端のものは急角度で、ス



第９図　上長浜貝塚出土石器実測図(1)

クレーパーとしてもいいかもしれない。10は厚めの剥片に腹面側から急峻な二次加工が加えられたものである。加工はやや大ぶりで、鋸歯状の側縁を形成する。11は剥片素材の石核から剥離された剥片を用いている。背面にはポジティブな面とともに、石核素材剥片を剥離した際の打面を残す。器体の両側縁に背面側から粗い鋸歯状の加工を加えているが、一部を除いてつぶれたような剥離面が並ぶ。12は腹面右側縁に平坦な加工を加えたものである。素材は一応縦長剥片であるが、打点は腹面左側に大きく偏っている。背面右側縁には微細な剥離痕が連続して観察される。13は末端の尖る不整形な剥片を用いたものである。打面部は二次加工により飛ばしている。背面左側縁と腹面右側縁に連続した加工が施されるが、両者とも不規則なものである。腹面側下部にも剥離痕が認められるが、意図的なものであるか否か判然としない。14も不整形な剥片を素材としており、背面右側縁と腹面左側縁に二



第10図　上長浜貝塚出土石器実測図(2)

次加工が加えられている。

第９図に掲げた資料はすべて黒曜石製である。

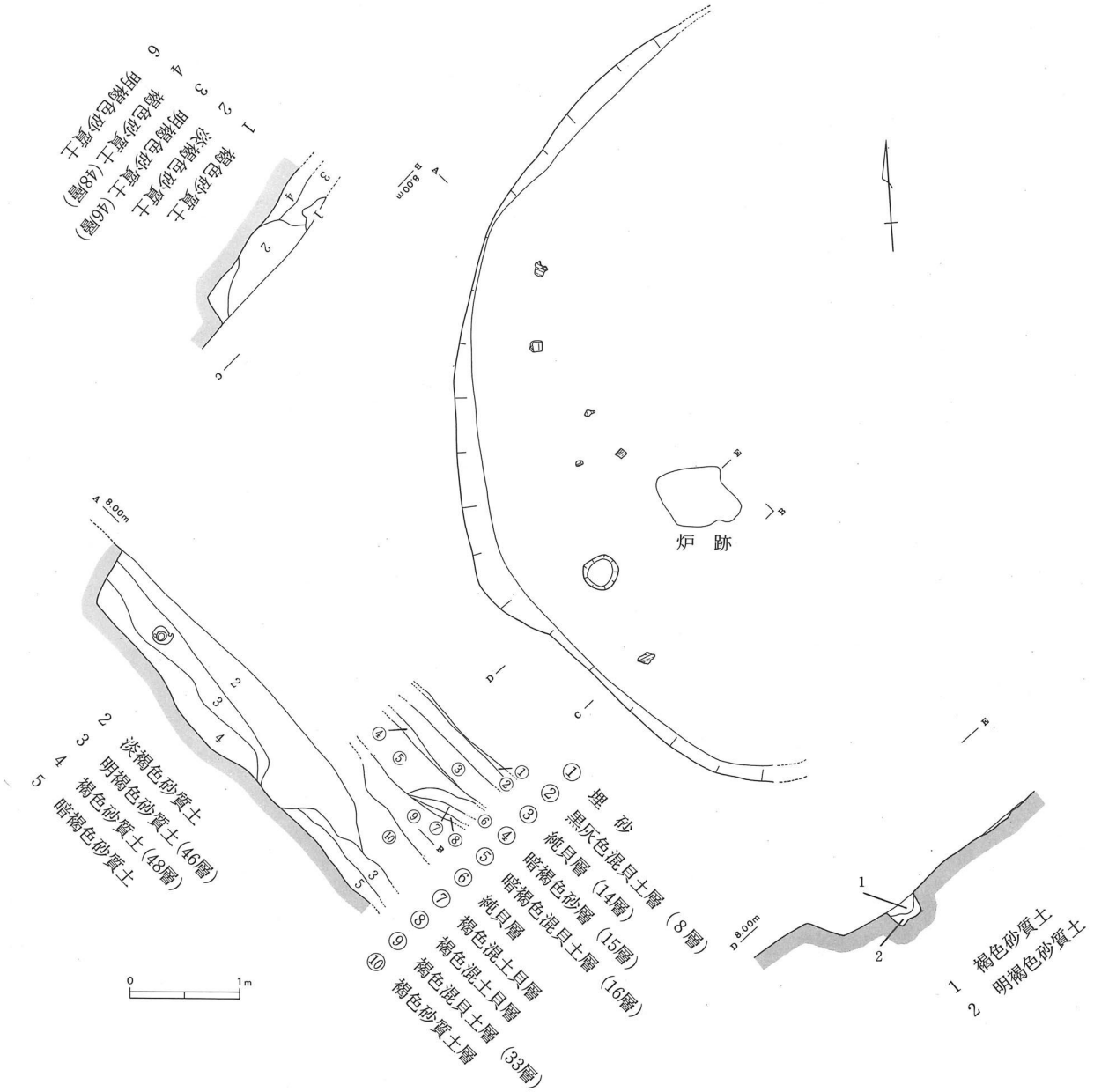
第10図１と２は接合しないが、同一個体と思われる。凝灰岩質シルト岩を用いた石斧製作関係の資料であり、折損した後１に二次加工が加えられ他の器種に転用されている。

４．遺跡の機能に関する問題

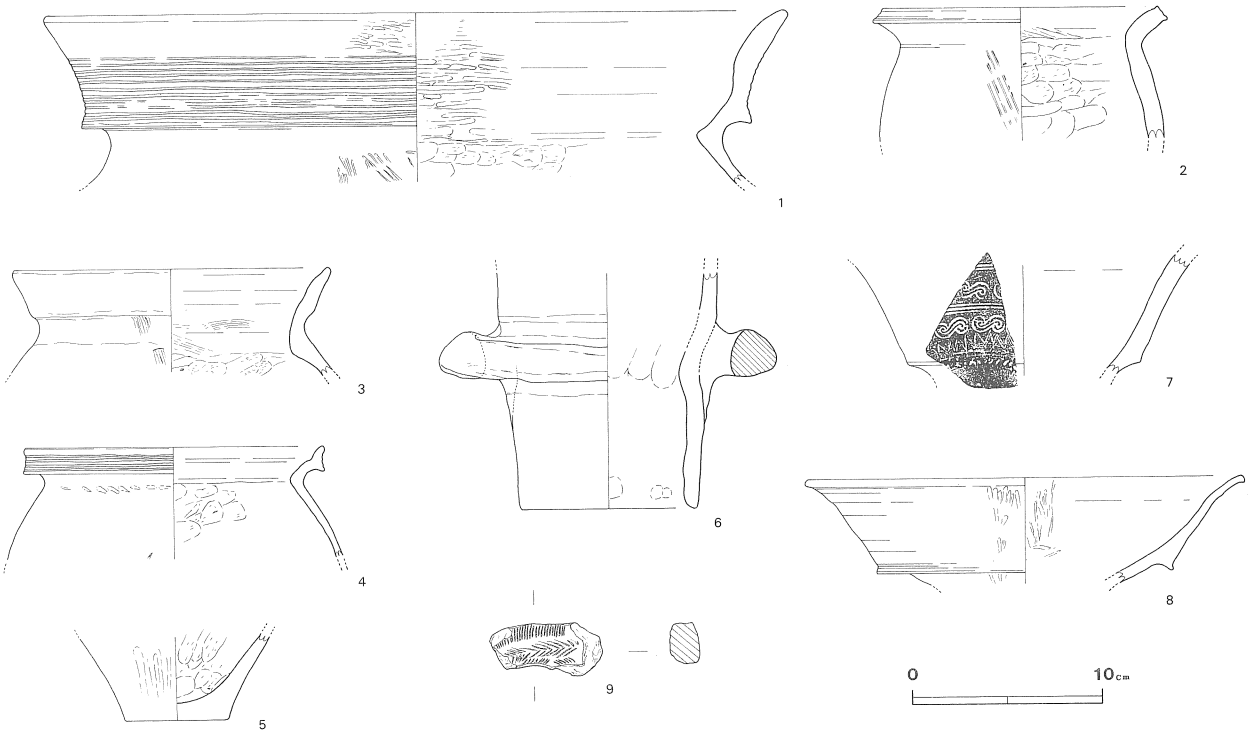
出土した遺物のうち主要なものの一部について上述したが、全体的にみれば剝片と砕片が大多数を占める。石核も一定量出土しており、本遺跡において石器製作が行われていたのは疑いようがない。これが石器製作専用空間を示すのか居住空間に伴う石器製作の跡なのかという問題については遺構を伴っていないことから前者の可能性を考えたい。石器の中に受熱の痕跡を残すものもある程度認められ、火処を伴うような場であったと推定され、遺物の出土量とあわせ石器製作作業に一定の時間幅が想定されよう。

②弥生時代・古墳時代

弥生時代や古墳時代の遺物は、クロスナとよばれる暗褐色有機質砂質土の互層である46～49層に含まれ、上長浜貝塚での時期区分に従えばⅡ期にあたる。縄文時代前期初頭以降、縄文時代を通じて、上長浜貝塚では、遺構、遺物は全く確認されていないが、弥生時代後期後葉になると、竪穴住居のほか、土坑も検出され、弥生土器をはじめ各種の遺物が出土している。遺物は、竪穴住居が検出されたD～Gグリッドを中心として出土しているが、Ｉラインよりも南側の傾斜の強い落ち込んだ部分からも、貝塚より下層で少量出土している。竪穴住居がみられることから、弥生時代には、この砂丘地も現在と環境が異り、定住できるほどの生活適地であったことが窺われる。遺物としても、スタンプ文を施した特殊な土器がみられるほか、大陸系遺物である陶質土器も発見されるなど、日本海から出雲平野への西の入口に位置する遺跡の特異性が窺える。



第11図　ＳＩ01実測図



第12図　ＳＩ01出土遺物実測図

ＳＩ01（第11図、第12図）

竪穴住居は、Ｄ～Ｇグリッドで検出された。調査区外にかかるため、部分調査であるが、５×５ｍ以上の隅丸方形と推定される。竪穴住居の上面の掘り込みレベルは標高約８ｍで、51層に掘り込んでおり、深いところでは、壁面は 0.6ｍ立ち上がっている。住居内には、南の壁面から約 1.5ｍ離れた位置に屋内炉があるほか、その中間には、径 0.3ｍ、深さ 0.2ｍのピットが検出されている。屋内炉は、住居内では位置的にやや偏ってはいるが、0.8×0.5ｍの範囲に赤く焼き固まった焼土が残っており、厚さは薄く２～４㎝である。

竪穴住居付近の層序は、標高９ｍから上に、採砂によって動かされた埋砂があり、その下に、黒灰色混貝土層、純貝層、暗褐色砂層、暗褐色混貝土層、純貝層、褐色混土貝層、褐色混土貝層、褐色混貝土層の貝塚を構成する８層が互層をなしている。貝塚最下層である褐色混貝土層は33層で、その下は貝を含まない褐色砂質土となっている。竪穴住居内の覆土は、さらにその下にあり、覆土内上層には淡褐色砂質土、中層には明褐色砂質土、下層には壁寄りに褐色砂質土、明褐色砂質土、中央寄りには、やや暗い色調の暗褐色砂質土が、床直で約10㎝の厚さに堆積している。床面の標高は、約7.3ｍで東に向かって僅かに傾斜している。

遺物は、屋内炉の西側付近のＥ３グリッドから比較的多く出土している。床面付近から出土しているものが多いが、甑形土器は床面から約15㎝浮いた状態で、覆土の中層（明褐色砂質土）から出土している。竪穴住居から出土している遺物の多くは、弥生土器である。甕が多いが、Ｓ字状入組渦文スタンプを施す器台のほか、甑形土器と考えられる特殊な土器も含まれている。

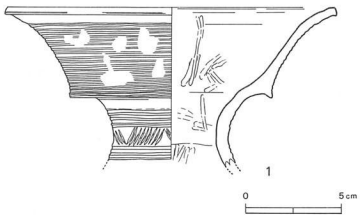
甕（12－1）は、口径40㎝の大形品であるが、体部を欠いている。外反する口縁部には、貝殻腹縁による粗い擬凹線文を施し、端部の下２㎝幅は、ヨコ方向の細かいミガキ調整を行っている。口縁内面

には、ヨコ方向の細かなミガキを施し、頸部以下に小さなケズリを行っている。２は、無文の口縁端部をやや拡張させ、下端の稜をやや丸く突出させるもので、内面頸部以下にはケズリを施している。胎土は赤褐色を呈し、在地の土器にはみられない器形で、山陽からの搬入系遺物と考えられる。３は複合部の突出した稜がなく、頸部を丸く凹ませて、僅かに稜をつくり出している甕で、内面頸部以下にケズリを施すが、類例の少ない形態の土器である。４は、口縁端部をやや拡張し、擬凹線文を施した甕で、他の遺物よりもやや時期的に古いものである。６は、甑形土器と考えられ、筒状の体部の端部から 7㎝離れた位置に、環状の突帯を繞らし、その突帯に径２㎝の孔を、左右対称的な位置に２ヵ所貫通させている。甑形土器には、半環状の把手を対称的な位置に付けるのが通例で、古い時期の甑形土器には突帯がなく、半環状の把手のみが付いている。上長浜貝塚出土例は、突帯に把手の機能もあわせ備えたもので、両者の間を埋める過渡期の遺物とみることもできる。７は、器台の上台部で、Ｓ字状入組渦文スタンプと３条の沈線を交互に配し、その下を鋸歯文で飾っている。さらに、その下の稜には、刻目も施している。精選された胎土は、在地の土器と異なり、搬入系遺物と考えられる。８も器台の上台部であるが、７と異なり、文様はみられない。９は、壺または甕の体部に付く把手で綾杉文を施している。

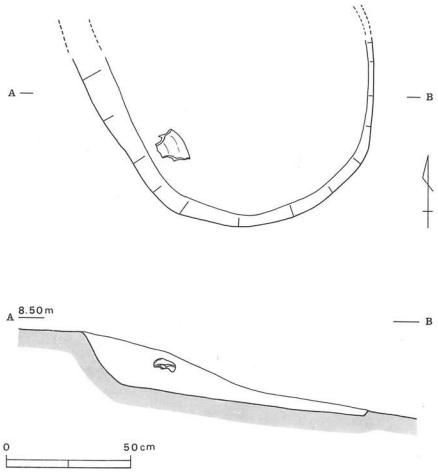
ＳＫ01（第13図、第14図）

ＳＫ01は、ＳＩ01のすぐ西側の、Ｆ１、Ｆ２グリッドにまたがる土坑である。短径1.2ｍ、長径１ｍ以上であるが、北側の半分以上が既に削られ、消失している。残存部分のうち、東側もかなり坑底付近まで削られているが、西側は残っており、0.2ｍの立ち上がりが確認できる。坑底は、やや東に向かって傾斜しており、標高は8.1ｍである。

遺構の性格は不明だが、遺物としては、坑内から弥生時代後期の器台が出土している。器台（13－１）は、下台部を欠いているが、推定器高は15㎝程度の中形品で、上台部外面には、貝殻腹縁による擬凹線文を施している。筒部には、山形になるように多条沈線を配し、それをヘラ状工具による４条の深い沈線で区画している。また、内面には、細いミガキを施している。



第13図　ＳＫ01出土遺物実測図



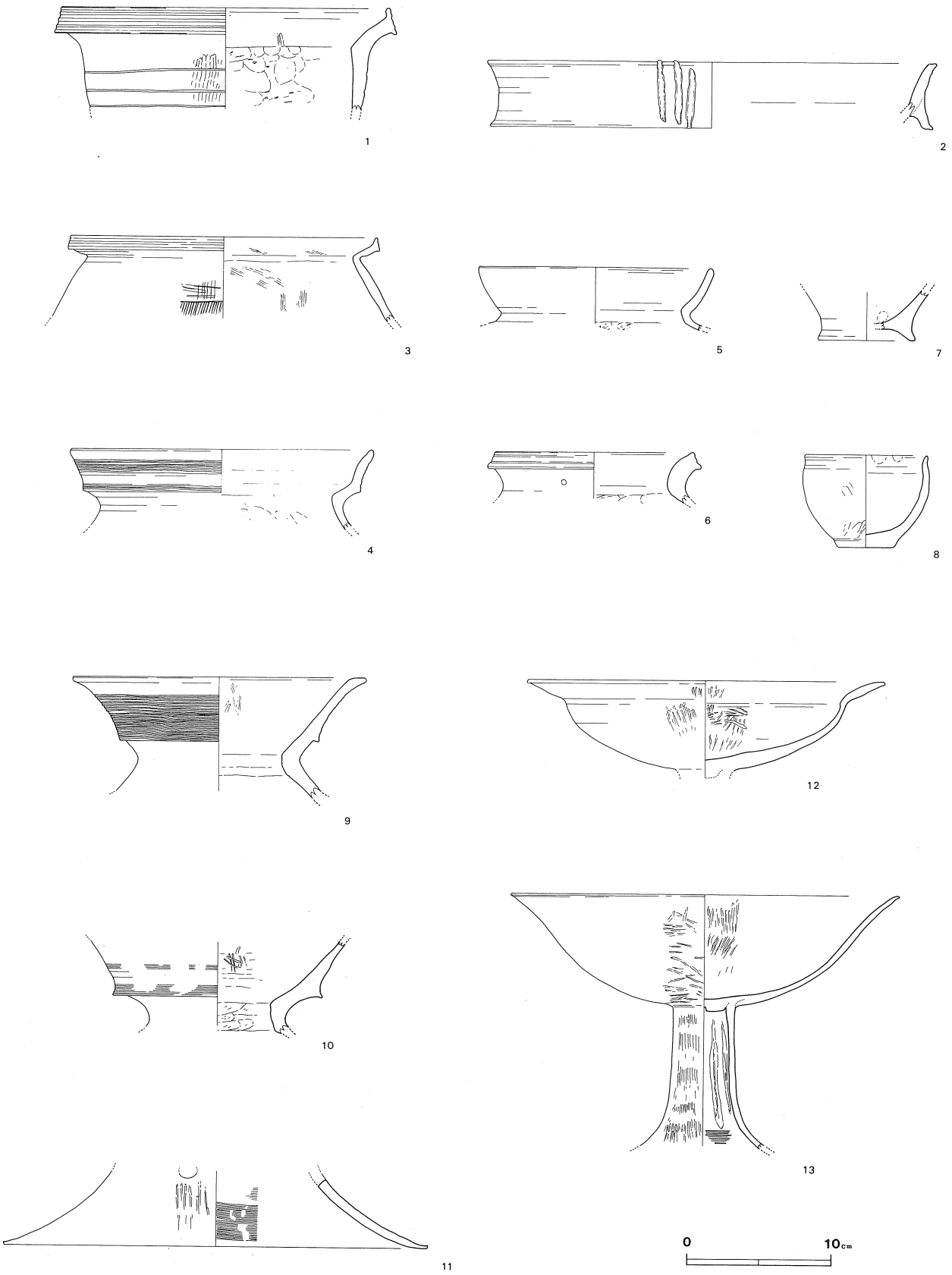
第14図　ＳＫ01実測図

遺構に伴わない出土遺物

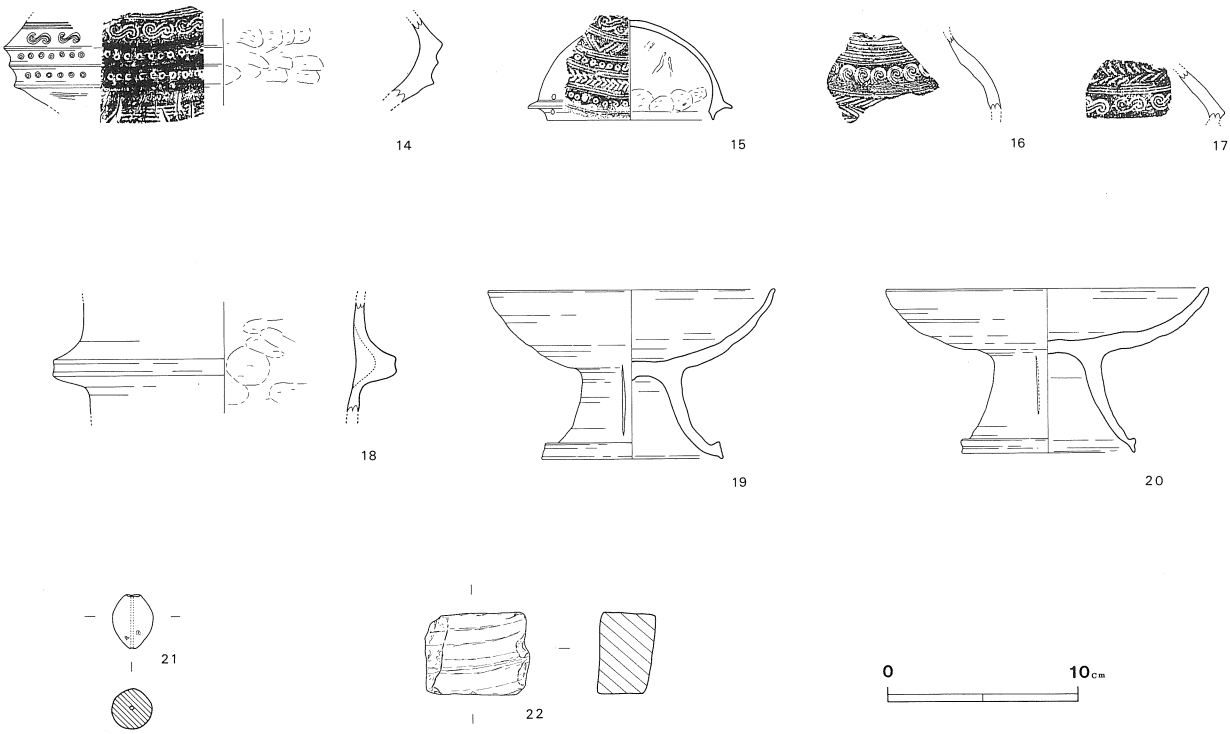
弥生時代、古墳時代の遺構に伴わない出土遺物は、そう多くはないが、弥生土器を中心として出土している。位置的には、ＳＩ01の周辺から多く認められているほか、層的には46、47層が多い。

広口壺（15－１）は、上長浜貝塚から出土した弥生土器の中では、最も古い時期の遺物である。頸部がやや内傾しながら長く立ち上がり、口縁端部をやや上下に拡張して平坦面を内傾させ、そこに４条の凹線文を施している。頸部外面には、タテ方向に２～３㎜幅の細かなミガキを施し、ヨコ方向に1.3㎝間隔に３条の沈線を配している。また、口縁内面は細かなミガキを施し、頸部内面には小さなケズリを行なっている。広口壺（15－２）は、口縁部のみの破片である。口縁は内傾するが、かなり外反気味に立ち上がり、端部はやや内傾した平坦面をつくっている。また、口縁の複合部は長く垂下し、端部は幅0.5㎝の平坦面をなしている。口縁部に、長さ５㎝、幅0.5㎝の棒状の粘土紐を、タテ方向に貼り付け、一部は端部まで折り返しており、知り得る限りでは３本認められる。また、径１㎝の円形浮文も張り付け、口縁外面を飾っている。これらの土器形態と文様構成は、在地の土器にみられず、搬入系遺物（東海系？）と考えられる。甕（15－３）は、口縁端部をやや拡張し、粗い２条の擬凹線文を施した、かなり焼きの良い土器である。外面は、タテ方向に細かなハケメを施し、内面頸部以下は、ケズリののち、ナデ、ハケメ調整を行なっている。甕（15－４）は、胎土にかなりの砂粒を含み、器表が磨耗した土器で、口縁部には、貝殻腹縁による擬凹線を施し、その上に、複合部寄りに、指頭によると考えられる幅１㎝の凹帯がある。内面頸部以下にはケズリを施し、内面口縁端部下には指頭圧痕らしい凹みもみられる。甕（15－６）は、１と同時期の土器で、形態的には、広口壺の可能性もある。口縁部は短いが、器肉の厚い土器で、端部はやや拡張して２条の凹線を施している。また、頸部には、径0.3㎝の小孔を１孔穿ち、内面頸部以下にはケズリがある。甕（15－７）は底部片で、底部外面は、上げ底状に内側に凹んでいる。鉢（15－８）は、類例の少ない器形で、口径8.5㎝、底径４㎝、器高6.5㎝の小形品である。体部は内弯気味に立ち上がり、口縁端部付近で屈曲し、やや外反する。外面は、ミガキののち赤色塗彩し、口縁部内面に指頭圧痕がある。胎土は精選された粘土で、搬入系遺物の可能性もある。器台（15－９、10）は、複合部が広く、上台と下台の間の筒部がやや縮まった鼓形器台である。高坏（15－11、12、13）のうち、11は、脚部がかなり開いてひろがるもので、赤色塗彩の痕跡が残り、中ほどに径１㎝の小孔が貫通している搬入系遺物と考えられる土器である。12、13は、細く長く立ち上がる脚部をもつ高坏で、坏部は12が口縁下に大きな屈曲部をもち、11は緩やかに外反し、内外面には細かなミガキ調整をしている。

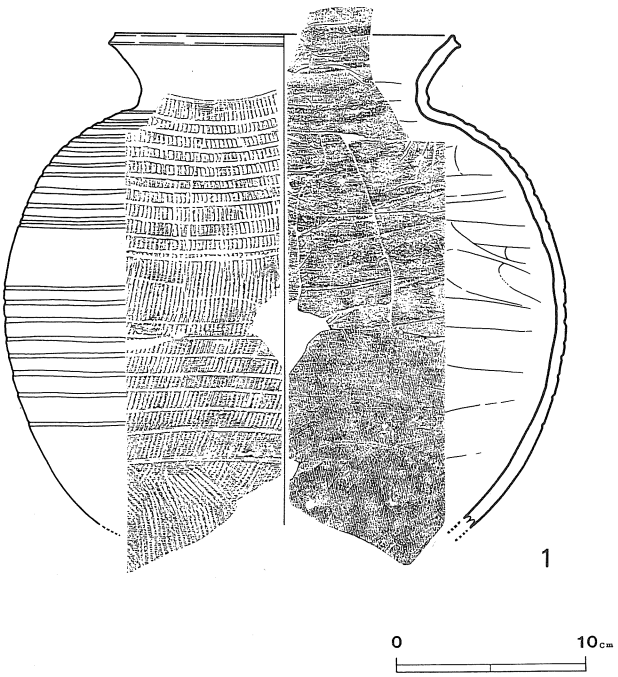
スタンプ文土器（16－14～17）は、ＳＩ01内出土土器をあわせると、５点出土している。ＳＩ01出土土器は器台であったが、14、17は壺、15は蓋、16は不明である。使われているスタンプは渦文で、Ｓ字状入組渦文が多く、16のみは単体の渦文である。14は、胴部に突帯状の３条の高まりがある特殊壺形土器で、突帯間は押圧した竹管文を配し、その上の肩部に、Ｓ字状入組渦文を横位に連続スタンプしている。17も、個体は違うが同形態の土器である。15は、竹管文、羽状文、鋸歯状刺突文、Ｓ字状入組渦文を組み合わせた蓋である。これらは、県内では類例の少ない土器で、鳥取県秋里遺跡[注11]からは、数多く出土しており、祭祀の土器とみられている。21は、紡錘状の土製品で、中央に細い孔が貫通し、垂飾品と考えられるものである。22は砥石である。



第15図　その他の出土遺物実測図(1)



第16図　その他の出土遺物実測図(2)



第17図　陶質土器実測図（原図は松本岩雄氏）

陶質土器（第17図）

朝鮮半島からもたらされた古式の陶質土器で、底部付近を欠いているが、ほぼ形態のわかる、口径18cm、推定器高30cmの壺形土器である。精選された粘土で硬く焼かれ、口縁部から肩部にかけては淡青灰色、体部は茶灰色を呈する。また、短い口縁部の内外面はヨコナデで調整し、体部外面は縄蓆文のタタキを施したのち、0.2～1cm間隔で、ヨコ方向にヘラ状工具により12本の沈線を描き、さらに3cmの間隔をおいて、その下にも連続する多条の沈線を施している。体部内面は、ケズリののちナデ調整を行ない、底部は欠けているものの、他例から丸底と考えられる。この舶載品は、4世紀後半の朝鮮半島南部の伽耶地域のものと考えられる。(注12)

（2）貝塚

出雲平野の貝塚遺跡

縄文時代には、特に東日本において、大規模貝塚が形成されているが、弥生時代になると、水稲農耕の普及により、安定した食生活が営まれ、貝塚は急激に減少、小規模化していく。しかし、筑後川下流域、東海地方など、ごく限られた地域においては、弥生時代以降の貝塚が分布している。島根県内においても、出雲平野以外では、、島根半島部の西川津遺跡(注13)（松江市）、隠岐島前の外浜貝塚(注14)が知られているに過ぎない。

ところが、出雲平野では、縄文時代の貝塚は全くないが、弥生時代以降の貝塚が、これまでに13遺跡で確認されている。(第19図参照)。それらの中で、現在の海岸線から最も遠い遺跡は、矢野遺跡や古志本郷遺跡で、約６km離れている。

貝塚の立地をみると、神戸川が形成した旧自然堤防や浜堤などの沖積平野上の微高地に立地するもの（１類)、砂丘地に立地するもの（２類)、丘陵上や丘陵の麓に立地するもの（３類）に区分するこ

第18図　出雲平野の貝塚遺跡位置図

番号	遺跡名	所在地	時期	自然遺物	文献
1	上長浜貝塚	出雲市西園町上長浜	奈良時代～中世初期	（貝類）ヤマトシジミ、カキ、ハマグリ、サザエ、アカニシ、サルボウほか （魚骨）マダイ、スズキ、クロダイ、サメ、ボラ、ナマズ、キギほか （獣骨）シカ、イノシシ、タヌキ、ウマほか	『出雲市埋蔵文化財調査報告書』第1集（出雲市教育委員会、1988）
2	鹿蔵山遺跡	簸川郡大社町杵築南	古墳時代後期	（貝類）ヤマトシジミ、マシジミ、カキ、ハマグリ、シオフキ （獣類）シカ	『鹿蔵山遺跡』（大社町教育委員会、1984）
3	南原遺跡	簸川郡大社町中荒木	古墳時代	（貝類）ヤマトシジミ、マシジミ、カキ、ハマグリ、シオフキ	
4	中分貝塚	簸川郡大社町修理免	奈良時代～平安時代初期	（貝類）マガキ、ヤマトシジミ、チョーセンハマグリ、コタマガイ （獣類）シカ	『島根県埋蔵文化財調査報告書』Ⅷ （島根県教育委員会、1981）
5	矢野遺跡	出雲市矢野町	弥生時代後期～古墳時代	（貝類）ヤマトシジミ、イシガイ、オオタニシ、カワニナ、サルボウ、サトウガイ、マガキ、キハマグリ、ヒナガイ、イタヤガイ、アダムスタマガイ、チリメボラ、テングニシ、サザエ、クロアワビ、イズモマイマイ （魚骨）フグ （獣骨）シカ、イノシシ	池田満雄「矢野貝塚出土品」（『出雲市の文化財』第1集出雲市教育委員会、1956） 東森市良・西尾克己「矢野貝塚」（『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』、建設省出雲工事事務所、島根県教育委員会、1980） 田中義昭「出雲市矢野遺跡第1地点の調査」『古代金属生産の地域的特性に関する研究』（島根大学山陰地域研究総合センター、1992）
6	古志本郷遺跡	出雲市古志町本郷	弥生時代～古墳時代前期	（貝類）ヤマトシジミ、ハマグリ、巻貝	『古志地区遺跡分布調査報告書』（出雲市教育委員会、1988）
7	多聞院遺跡	出雲市知井宮町本郷	弥生時代中期～古墳時代中期	（貝類）ヤマトシジミ、ニホンシジミ、カラスガイ、マツカサガイ、カタハガイ、オオタニシ、コダマガイ、アリソガイ、フジナミ、サルボウアカガイ、マガキ、テングニシ、アワビ、サザエ、ハマグリ、シオフキ、イガイ、マイマイ、アサリ、アカニシ （獣骨）シカ、イノシシ	池田満雄「知井宮多聞院貝塚」（『出雲市の文化財』第2集出雲市教育委員会、1960） 大塚初重「島根県出雲市知井宮遺跡の調査」（『考古学集刊』第2巻第1号、1963）
8	小浜貝塚	出雲市神西沖町小浜		（貝類）ヤマトシジミ、カキ	
9	田中谷貝塚	出雲市西神西町田中谷	古墳時代～	（貝類）ヤマトシジミ、カキ	
10	御領田遺跡	簸川郡湖陵町常楽寺	平安時代末～鎌倉時代	（貝類）ヤマトシジミ、ハマグリ （獣類）鹿角加工品	『県営圃場整備事業に伴う御領田遺跡発掘調査報告書』 （湖陵町教育委員会、1995）
11	常楽寺遺跡	簸川郡湖陵町常楽寺	奈良時代～	（貝類）ヤマトシジミ	『湖陵町誌研究3』 （湖陵町教育委員会、1994）
12	雲部Ⅰ遺跡	簸川郡湖陵町東三部	弥生時代後期～古墳時代後期	（貝類）ヤマトシジミ	『湖陵町誌』（湖陵町、1970）
13	竹崎遺跡	簸川郡湖陵町西三部	弥生時代後期～古墳時代		『湖陵町誌研究4』 （湖陵町教育委員会、1995）

（『島根県埋蔵文化財調査報告書』Ⅷを一部加筆訂正）

第19図　出雲平野の貝塚遺跡一覧表

とができる。１類は、矢野遺跡、古志本郷遺跡、知井宮多聞院遺跡など、弥生時代後期から古墳時代前期を中心とする拠点的な集落遺跡の一画に貝塚を形成するものである。２類は、沖積低地と日本海に挟まれた砂丘地に立地する、鹿蔵山遺跡、南原遺跡、中分貝塚、上長浜貝塚で、主として海岸線に近い北山沿いの砂丘地に立地している。３類は、平野南西部の神西湖付近の丘陵上や丘陵の麓に立地する、小浜貝塚、田中谷貝塚、常楽寺遺跡、雲部Ⅰ遺跡、竹崎遺跡などの小規模貝塚である。このように、弥生時代以降の貝塚が発達するのは、貝塚の主体であるヤマトシジミの棲息に適したラグーン（潟湖）が存在することに拠っている。奈良時代に編纂された『出雲国風土記』には、周囲が35里74歩（約18km）の「神門水海（かむどのみづうみ）」が記載されており、これらの貝塚は、その汀線付近に形成されている。貝塚の形成に大きな影響を与えた潟湖について、『出雲国風土記』には、「裏には則ち、鰡魚（なよし）・鎮仁（ちに）・須受枳（すずき）・鮒（ふな）、玄蠣（かき）あり。」として、「神門水海」で獲れる魚介類を記載しており、上長浜貝塚で出土した動物遺存体の分析結果は、それを裏付けている。

これらの中で、弥生時代の貝塚は、沖積低地の旧自然堤防上などの微高地に立地する。矢野遺跡は当時西流していた斐伊川が潟湖に流入する地点に位置し、1953年には、島根考古学会による調査(注15)によって、ヤマトシジミを主体とする弥生時代の小貝塚が確認され、第１トレンチでは、貝層は15～43cmに及んでいる。さらに、田中義昭らによる1991年の調査(注16)によれば、ヤマトシジミを主体とする弥生時代後期末から古墳時代前期の貝層のほかに、それより新しい時期の貝層も確認されている。また、知井宮多聞院遺跡(注17)は、矢野遺跡とほぼ同時期の貝塚で、ヤマトシジミを主体とし、淡水産、岩礁性の貝も含むほか、シカの出土が目立っている。古志本郷遺跡は、神戸川が潟湖に流入する河口部付近に位置している。1987年の遺跡範囲確認調査(注18)によって、弥生時代後期と考えられるヤマトシジミを主体とする大小６ヵ所の小ブロック状の地点貝塚が発見されている。これらに共通することは、大きな拠点的集落の一部に貝塚を形成していることである。それは、食生活の中心が水田農耕に移行しているものの、貝類が、貴重な蛋白源として、集落内においては、副次的な食料確保が行なわれていたことを意味している。

古墳時代になると、出雲大社付近の砂丘上に、鹿蔵山遺跡(注19)、南原遺跡(注20)、神西湖周辺に、雲部Ⅰ遺跡(注21)田中谷貝塚(注22)で、貝塚が形成され、これらは、弥生貝塚より小規模化していく。しかし、鹿蔵山遺跡、南原遺跡にみられるように、水稲農耕には必ずしも適さない砂丘上に貝塚が形成されることは、漁撈集落としての専業化への一歩を歩みつつあることを示していると考えられる。それは、奈良時代から平安時代初期の貝塚である中分貝塚(注23)で、刺突漁具の鉄製ヤスが出土していることからも窺えるように漁業に重点をおく小集落として分化がさらに進んでくる。

古代以降については、上長浜貝塚にみられるように、鉄製漁撈具も普及し、網漁、釣漁、突漁、製塩、貝の採取などの、漁業集落の行なうすべての労働が集約され、専業集落として定着している。

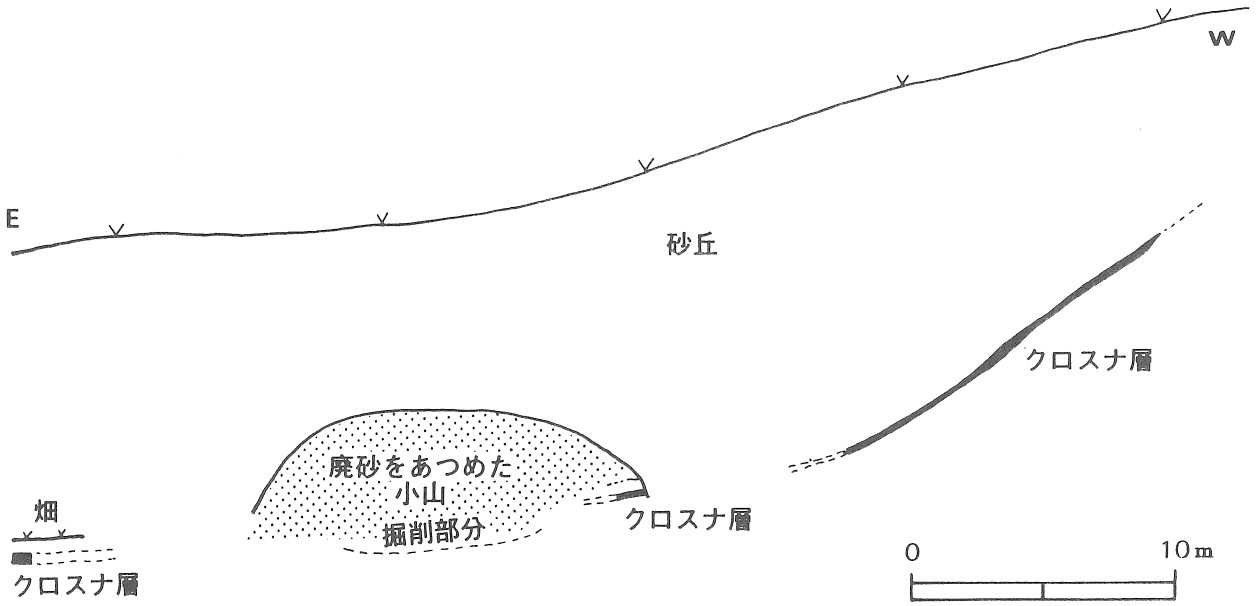
弥生貝塚を形成していた沖積平野の微高地上の拠点集落は、奈良時代以後は貝塚をつくらなくなり、貝塚を形成し、漁撈を行なうことは、砂丘地とそれに近接する海寄りの山麓でしか行なわれなくなってくる。

上長浜貝塚の概要

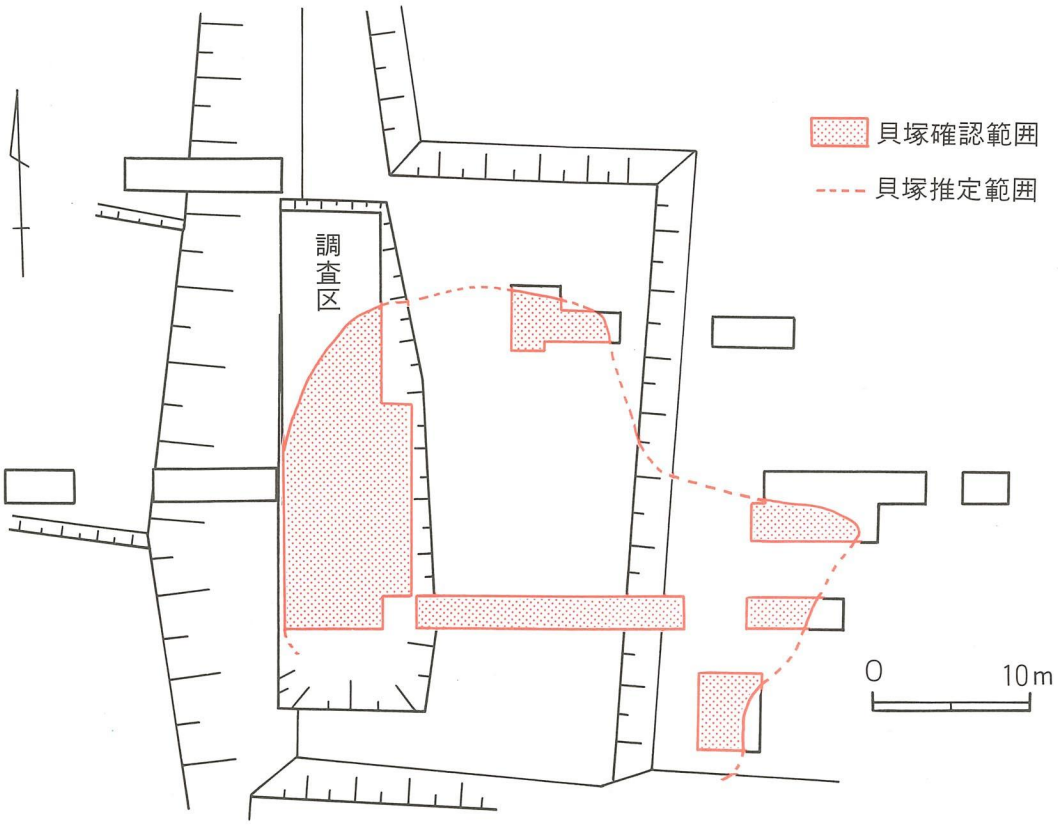
上長浜貝塚は、出雲砂丘地の一角に位置している。貝塚は、砂丘下10数ｍの深いところに埋もれていたが、採砂によって発見されたのち、今回市道建設に伴い発掘調査を実施した。調査区（200㎡）のうち、南側の150㎡に貝塚が確認されているが、調査区外での範囲確認調査によって、東に35ｍ伸び、全体で700㎡以上の、歴史時代としては最大級の貝塚であることが判明した。

貝塚は、ヤマトシジミを主体とし、厚いところでは1.5ｍにも及んでいる。貝塚を構成する層は、純貝層、混土貝層、混貝土層に大別することができる。このうち、純貝層は、18、24、27、30、35、40、42層で、主に、南側の傾斜地に多い。また、純貝層のなかでも、30層は厚さが40～50㎝もある。貝層を分析してみると、東に突出した尾根状部分のＩラインよりも北側のフラットな部分と、南側の傾斜地では堆積形態が異なっている。北側では、33層を除けば、薄い層が多く、単純な堆積を示している。10、13、16、17層のように、北下がりの傾向がみえるが、これは、Ｉライン付近の貝塚の上層が削られたためと考えられる。

層的にみると、10層から44層までが貝塚を構成する層で、貝塚前期と貝塚後期の二時期に大きく区分できる。貝塚前期（33～44層）は、奈良時代後半から平安時代初期にあたる。尾根上に伸びるＩラインより北側では、33層（褐色混貝土層）がほぼ水平に厚く堆積している。厚さは0.3～0.6ｍで、貝塚を構成する貝層の中では最も厚く、貝塚最北端のＤグリッドから最南端のＭグリッドまで広くみられる。また、その他にも、純貝層の38層や、39層（褐色混貝土層）、34層（混土貝層）がある。また、Ｉラインよりも南側では、傾斜地ということもあり、南北に細長い貝層が多く、厚さも33層よりも薄い。およそ貝層の下半分はこの時期の貝塚で、厚いところで約0.6ｍにも達する。貝塚後期は、平安時代末期に形成されている。Ｉラインよりも北側では貝層は薄く、16層（暗褐色混土貝層）は、東西に細長い堆積プランを示している。Ｉラインよりも南側では、上層ほど薄く、また、東に行くほど複



第20図　上長浜貝塚クロスナ層略測図



第21図　上長浜貝塚範囲図

雑な堆積状況を示している。貝層の詳しい堆積状況の観察（一例）は、次の通りである。

24層（Ｉ３～Ｍ３セクションベルト）

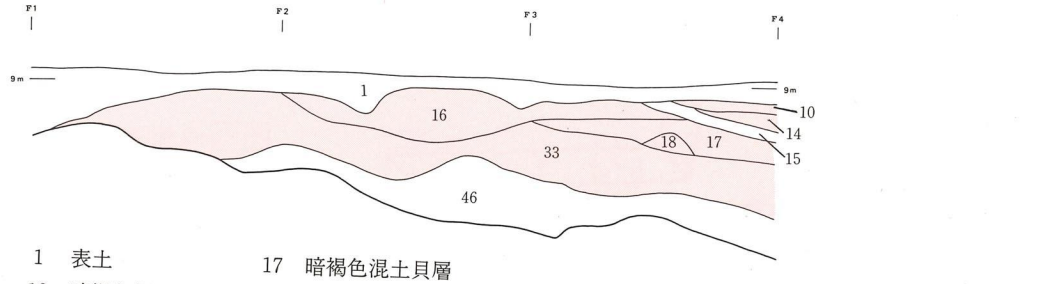
ヤマトシジミが圧倒的に多い純貝層。貝の風化は少ない。堆積方向はランダムに近いが、横ならびの傾向がある。Ｌ３付近で、焼けた貝（ヤマトシジミ）が破砕した状態で、層状に確認できるところがある。その上面に、カキが横に数枚並んでいる。

37層（Ｉ３～Ｍ３セクションベルト）

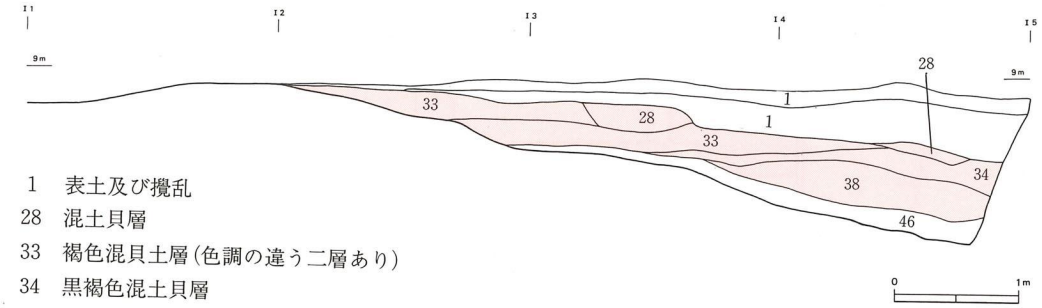
若干風化したヤマトシジミを主体とする貝が混じる褐色の砂質土。貝と土との割合は半々程度。破損した貝が多い。貝の堆積方向はランダムである。炭化物片を含む。

38層（Ｉ３～Ｉ５セクションベルト）

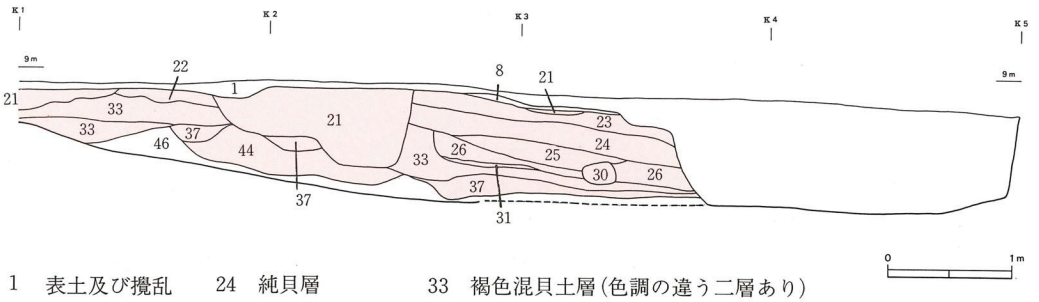
純貝層。貝は、圧倒的にヤマトシジミであるが、Ｉ４から１ｍのところからＩ５にかけて、カキが１枚づつ横に並んで堆積している。その上下でヤマトシジミの堆積方向が異なり、上では横、下ではランダムになっている。Ｉ４から東に30cmのところで、長さ25cm、厚さ15cmのブロック状に赤褐色の粗い砂質土が混じる部分がある。これらから、この層は、さらに４層に細分の可能性がある。



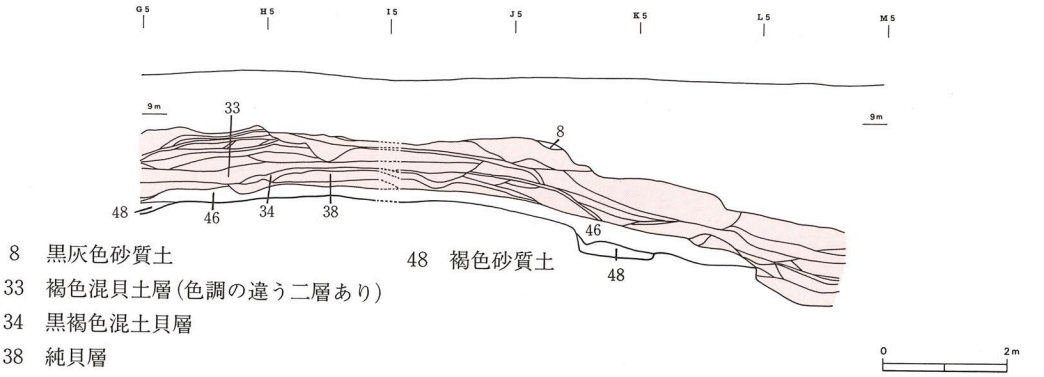
1　表土
10　暗褐色混貝土層
14　純貝層
15　明燈色砂
16　暗褐色混貝土層
17　暗褐色混土貝層
18　純貝層
33　褐色混貝土層
46　暗褐色砂質土



1　表土及び攪乱
28　混土貝層
33　褐色混貝土層(色調の違う二層あり)
34　黒褐色混土貝層
38　純貝層
46　明褐色砂質土

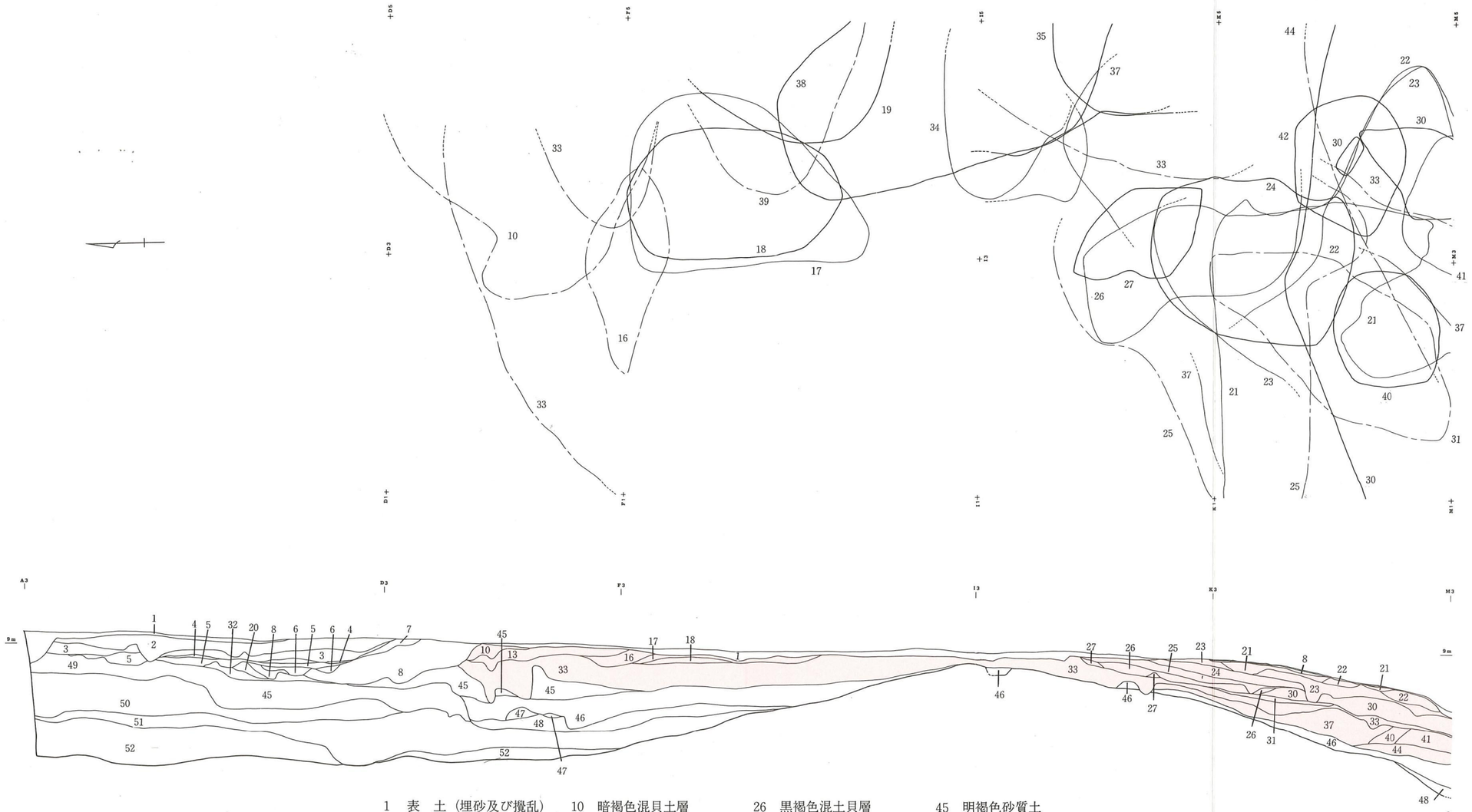


1　表土及び攪乱
8　黒灰色砂質土
21　灰褐色混土貝層
22　暗褐色混土貝層
23　黒褐色混土貝層
24　純貝層
25　黒褐色混貝土層
26　黒褐色混土貝層
30　純貝層
31　黒褐色混貝土層
33　褐色混貝土層(色調の違う二層あり)
37　褐色混土貝層
46　明褐色砂質土



8　黒灰色砂質土
33　褐色混貝土層(色調の違う二層あり)
34　黒褐色混土貝層
38　純貝層
46　明褐色砂質土
48　褐色砂質土

第22図　貝塚断面図（F．I．Kライン・G－Mライン）



1　表　土（埋砂及び攪乱）
2　明褐色砂質土
3　褐色砂質土
4　茶褐色砂質土
5　黒褐色砂質土
6　褐色砂質土
7　茶褐色砂質土
8　黒灰色砂質土
9　暗褐色砂質土
10　暗褐色混貝土層
13　暗褐色混土貝層
16　暗褐色混貝土層
17　暗褐色混土貝層
18　純貝層
20　暗褐色砂質土
21　灰褐色混土貝層
22　暗褐色混土貝層
23　黒褐色混土貝層
24　純貝層
25　黒褐色混貝土層
26　黒褐色混土貝層
27　純貝層
30　純貝層
31　黒褐色混貝土層
32　褐色砂質土
33　褐色混貝土層
37　褐色混土貝層
40　純貝層
41　褐色混土貝層
44　茶褐色混貝土層
45　明褐色砂質土
46　褐色砂質土
47　明褐色砂質土
48　褐色砂質土
49　明褐色砂質土
50　明褐色砂質土
51　明褐色砂質土
52　茶褐色砂質土

第23図　貝塚平面図及び断面図（Ａ３－Ｍ３）

遺構としては、ＳＫ02～ＳＫ04の土坑があり、小鍛冶に関連すると考えられる遺構も検出している。

遺物としては、須恵器、土師器のほかに、製塩土器が出土している。製塩土器は33層から多く出土し、口径10cm、器高15cmほどの焼塩用の小さな土器で、約50個体分出土している。網漁は、漁法の中で最も中心をなすもので、漁網錘が数多く出土している。土錘は、約600点近く出土し、なかでも、これまで山陰地方ではほとんど出土例のなかった棒状土錘が70点以上も出土したことは、注目に値する。また、石錘は、数は少ないが、資料の少ない大型有溝石錘が３点出土している。鉄製品では、鎌、釣針、ヤス、刀子、紡錘車、鉄鏃などがあり、稀な遺物としては火打金もある。

貝塚を構成する中心である貝類は、ヤマトシジミがほとんどで、その他の貝の中では、マガキが多い。主に潟湖に棲息するヤマトシジミや湾口部のマガキ、外海の浜でオキアサリを採取して食用に供していたほか、湿潤な環境を裏付ける微小な陸貝類を特徴とする。マガキは、集積している例が多く、灰混じりの焼いた貝層もあった。

さらに、魚骨、獣骨などの動物遺存体も数多く検出されている。マダイ、サメなどの海産魚類、ナマズ、ギギなどの淡水産魚類、カモなどの鳥類のほか、シカ、イノシシ、ヘビ、カエルなども確認されている。

ＳＫ02（第24図、第25図）

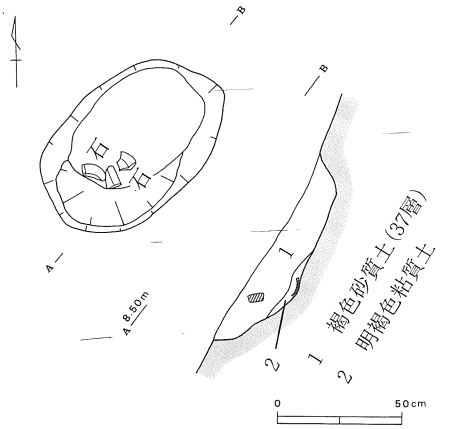
南側傾斜地のＫ１グリッドで検出された長径0.8m、短径0.5m、深さ0.2mの楕円形を呈する土坑である。坑底からは土師器坏、中ほどから浮いた状態で石が出土している。坏（24－１）は、口径12.8cm、器高2.6cmで、内外面を赤色塗彩している。

ＳＫ03（第26図）

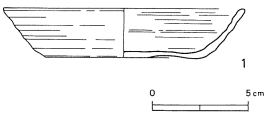
Ｇ３、Ｈ３で検出された遺構である。攪乱を受け、一部しか残っていないが、長径１m（推定）、深さ0.3mの土坑で、0.2×0.15mの範囲の壁面に、厚さ３cmの焼土が貼り付いていた。坑内からは炭化物も数点出土している。

ＳＫ04（第27図）

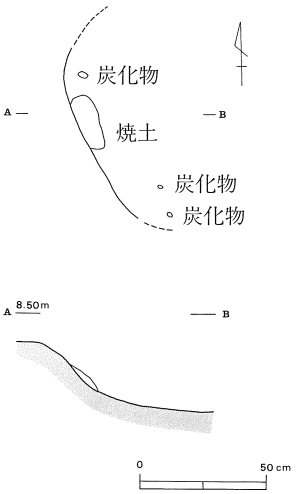
Ｅ２、Ｅ３で検出した土坑で、長径0.65m、短径0.4mの瓢箪形を呈する。深さは、0.15mで、中央部が一段深く、



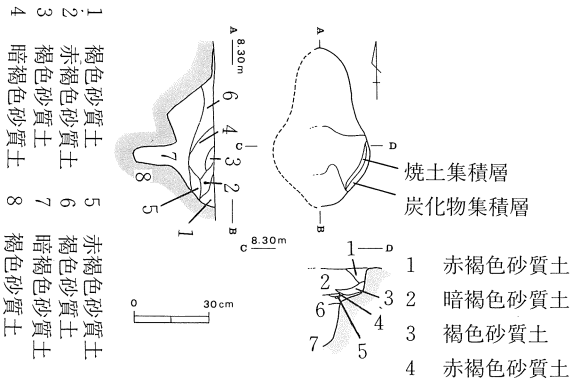
第24図　ＳＫ02実測図



第25図　ＳＫ02出土土器実測図



第26図　ＳＫ03実測図



第27図　ＳＫ04実測図

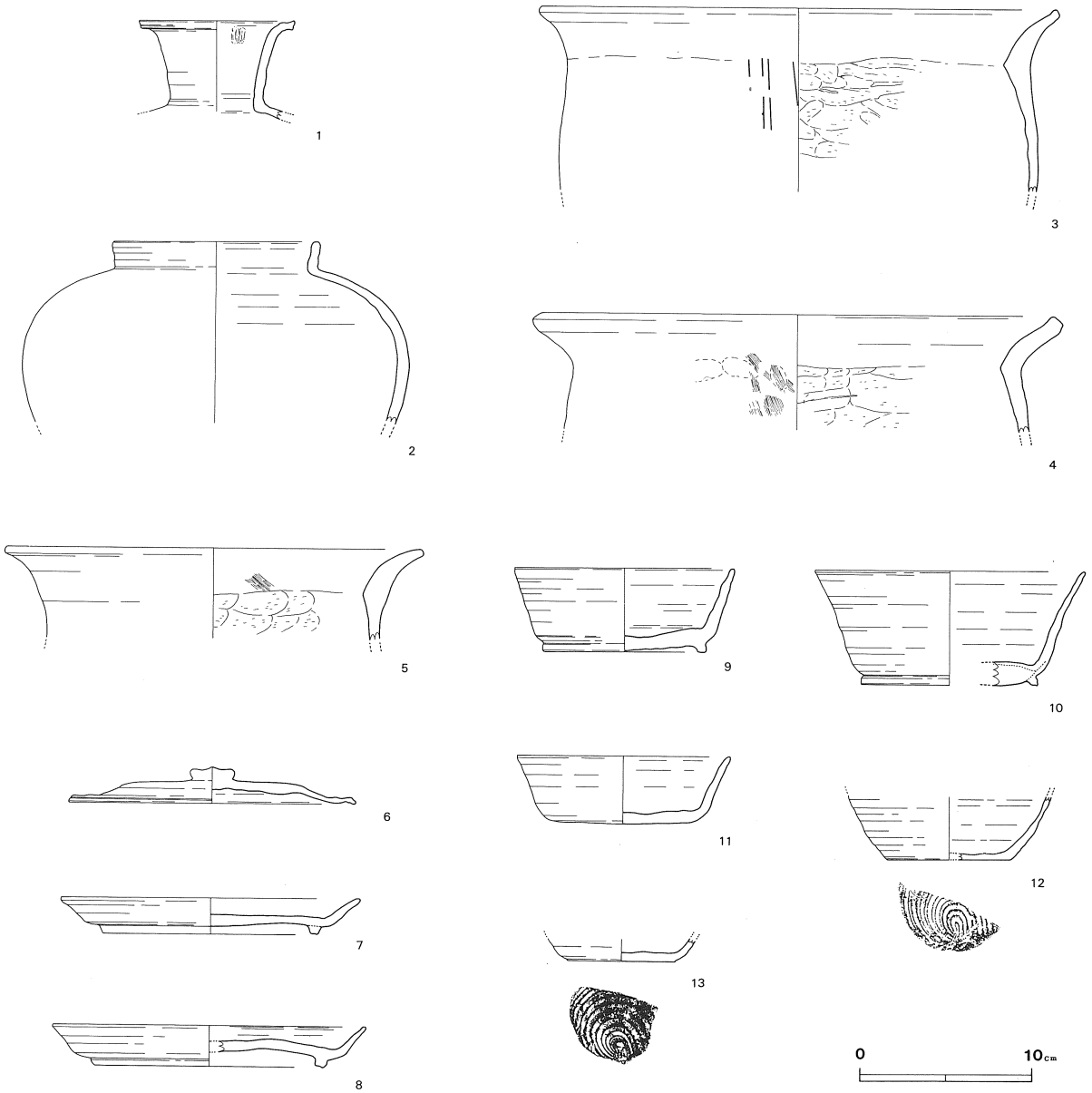
0.3mとなっている。西半分を消失しているが、壁面には、炭化物が集積した内側に、さらに焼土が貼り付いており、坑内にも、これらが多く含まれている。また、近くのＦ３－Ｆ４のサブトレンチでは、鞴の羽口が出土しており、小鍛冶そのものではなく、それに関連した付近の土坑の可能性がある。

出土遺物

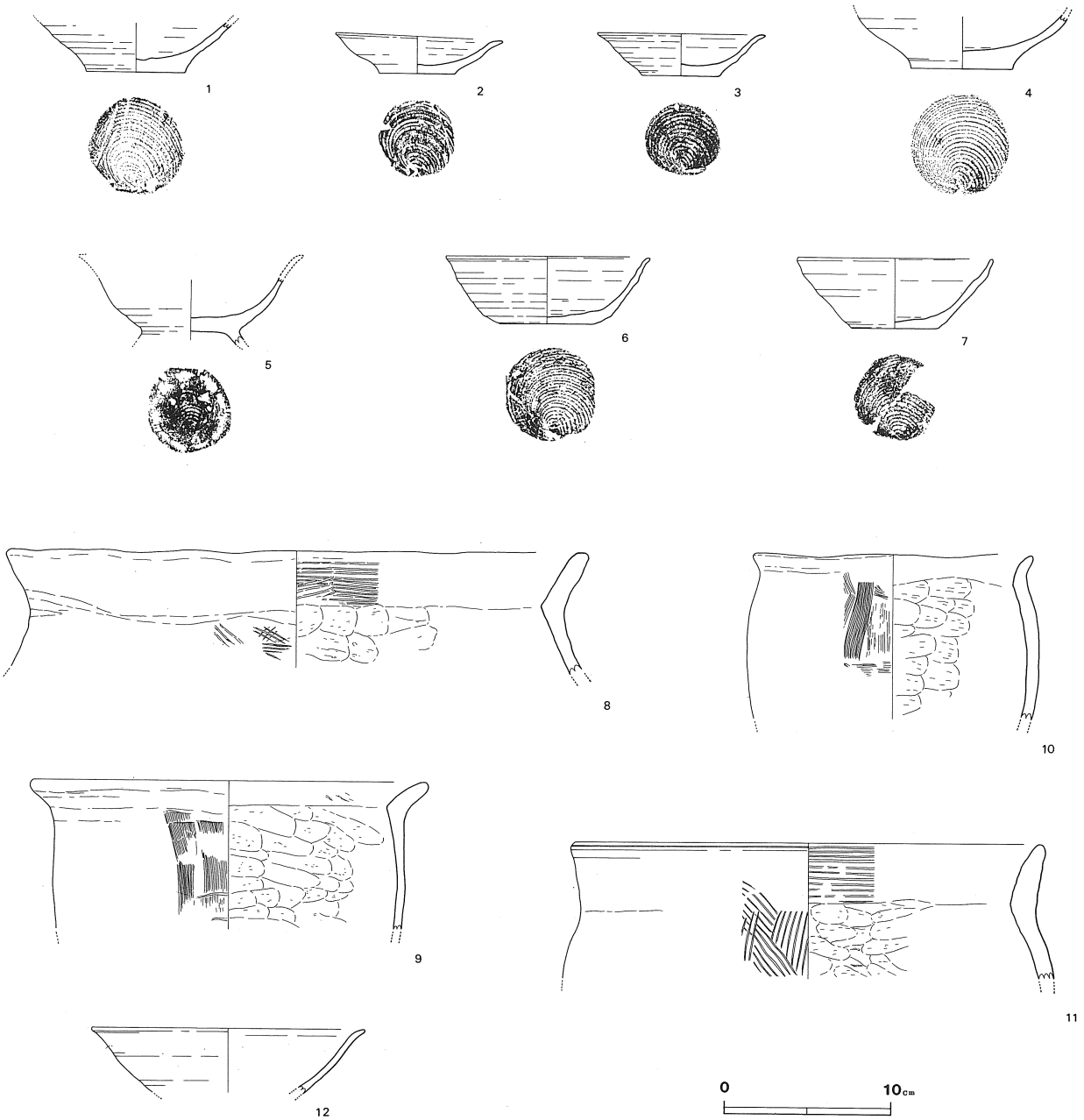
貝塚前期出土土器（第28図）

貝塚前期（33～44層）の出土土器としては、須恵器と土師器があり、それらはすべて、貝塚の各層に含まれていたものである。

須恵器には、長頸壺、短頸壺、蓋、盤、坏などがあり、土師器では甕が多い。須恵器長頸壺（28－1）は、体部を欠き、口縁端部を外方へ大きく屈曲させているものである。短頸壺（28－２）は、短く直立した頸部と、大きく膨らむ体部をもち、下半を欠いている。蓋（28－６）は、かなり扁平化し、



第28図　貝塚前期出土須恵器、土師器実測図



第29図　貝塚後期出土土師器実測図

つまみは宝珠状で、端部を下方に屈曲させたものである。盤（28－７、８）は、口径17.5～18.5cm、器高２～2.5cmで、大きな底部の外側に、断面方形の高台を付けた土器で、やや口縁は外反して、低く立ち上がっている。坏（28－９～13）は、高台をもつもの（９、10）と、無高台のもの（11、13）がある。いづれも坏部は、底部からほぼ直線的に立ち上がる形態をもち、高台は、底端部にハの字形に外側へ開くものである。土師器甕（28－３～５）は、口径24～30cmで、いづれもあまり胴の張らないタイプの甕で、内面頸部以下にケズリ調整を行なっている。

これらの遺物は、おおむね柳浦編年８期(注24)、高広編年ⅥＢ期(注25)の範疇に含まれるものと考えられる。

貝塚後期出土土器（第29図）

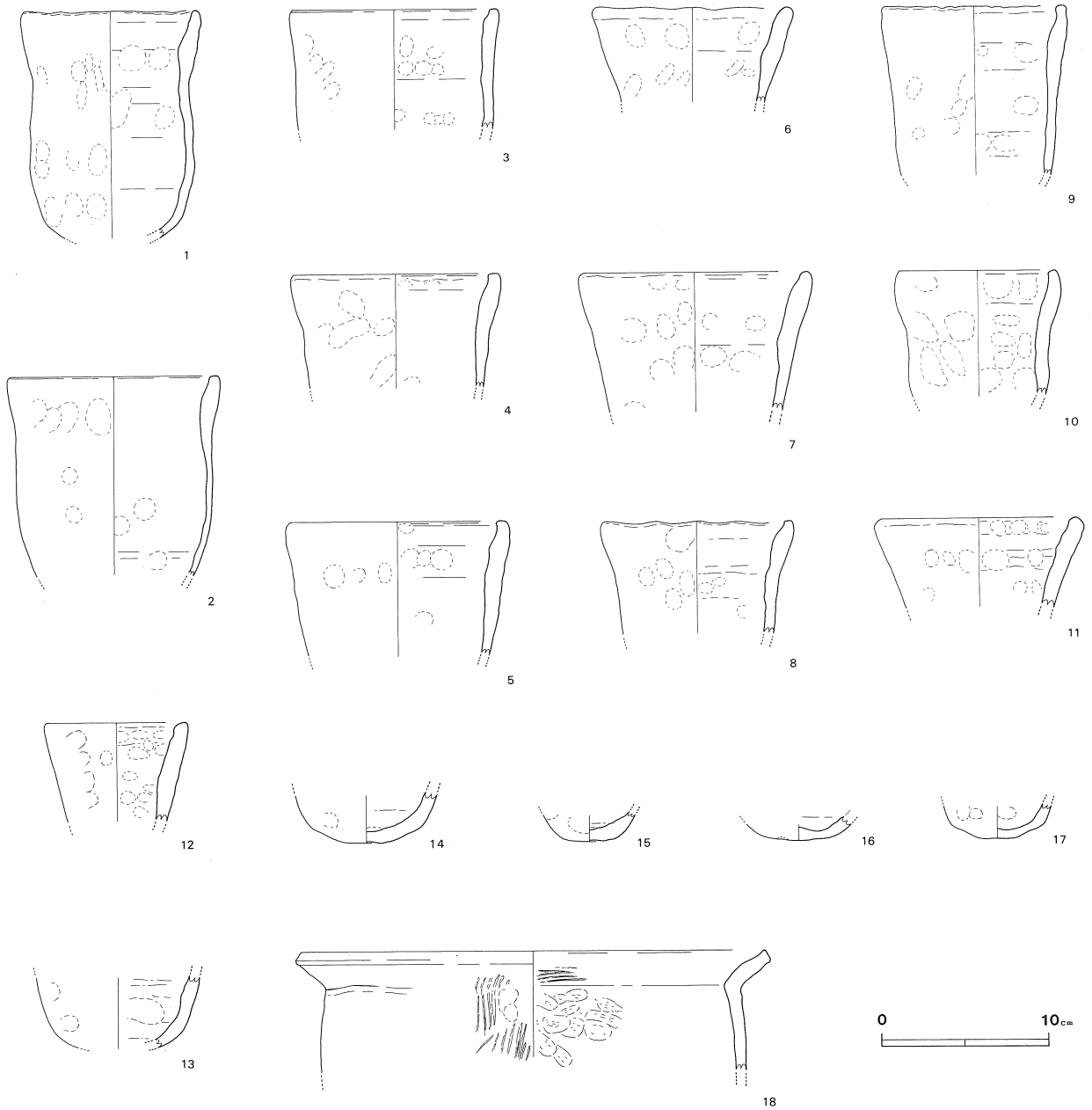
貝塚後期（10～30層）の出土土器は、すべて土師器で、陶磁器類は全く出土していない。坏（29－１、

4～7）は、やや内弯しながら緩く立ち上がり、口縁付近で外反するタイプの坏である。器高にくらべて、やや底部が小さい特徴をもち、いづれも底部は、回転糸切り後未調整である。また、5のみが、回転糸切り後未調整のまま、高台を付けている。小皿（29－2、3）は、口径10cm前後で、小皿としては、やや大きいタイプの土器である。口縁部が外反する形態は坏と同じで、焼きが良い。甕（29－8～11）は、大小さまざまであるが、8は口径35cmの大形品で、10は口径17cmの小形品であり、体部を大きく欠いている。いづれも単純口縁の、頸部がくの字状に屈曲する甕で、内面頸部以下には、ケズリ調整を行なっている。

これらの遺物は、おおむね平安時代末期（12世紀代）に含まれるもの[注26]と考えられる。

製塩土器（第30図）

奈良・平安時代の製塩土器は、島根県内で43遺跡で確認されている[注27]。分布としては、生産地としての海岸部のほか、消費地としての山間地でも数多く発見されている。これまで、出雲市内でも、矢野

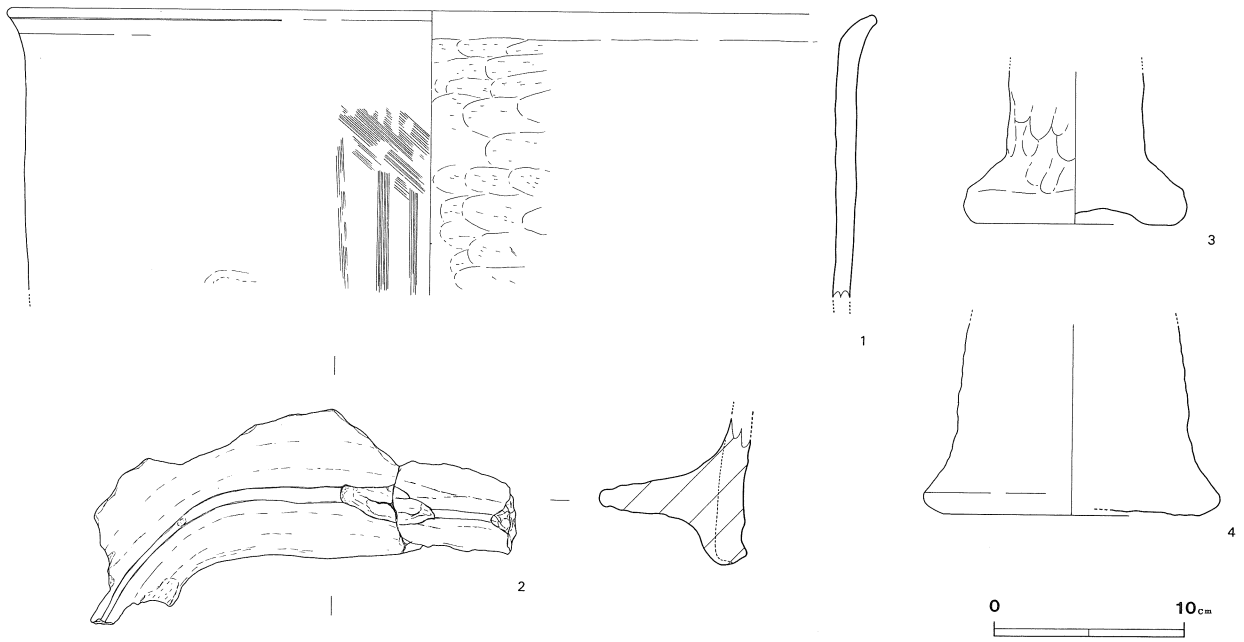


第30図　製塩土器実測図

遺跡をはじめ、３遺跡から出土しているが、昨年、南本町遺跡からも新たに出土[注28]し、かなり広く塩の流通があったことが知られる。製塩土器の多くは、六連式とよばれる焼塩土器で、形態的には砲弾状を呈するものである。上長浜で出土した製塩土器も、この焼塩土器がほとんどで、煎熬過程で使用したと考えられる製塩土器の可能性のあるものも、僅かに出土している。

出土総点数は604点で、層別にみると、33層が圧倒的に多く、221片を数える。その他では、38層（61片）、34層（44片）、37層（39片）となっている。出土グリッドでみると、33層では、Ｇ３（77片）、Ｆ３（74片）が圧倒的に多く、その周辺のＦ～Ｉグリッドに集中しているが、Ｌ３でも20片出土している。34層では、Ｉ４で40片がまとまって出土し、37層ではＪ４（11片）、Ｋ４（20片）に集中している。38層では、Ｇ３（20片）、Ｇ４（15片）、Ｈ４（12片）、Ｉ４（12片）で、Ｇ４～Ｉ４にかけて、南北に細長い分布をみせている。出土分布状態をみた限りでは、層によって出土位置がややずれてはいるが、おおむね尾根状に東に突出したＩラインから北では、Ｆ、Ｇグリッドに集中的な分布状態を示している。また、Ｉラインよりも南の傾斜地では、量は少ないがＩ４～Ｋ４に集中しており、全体的にみると、Ｉラインを挟んだＧ～Ｋグリッドの東半分で、南北方向に、帯状の分布をみせている。

上長浜貝塚で出土した製塩土器の個体数は、口縁部と底部によって調べた結果、少なくとも50個体はあったと考えられる。製塩土器は、その性格上、熱を受けて細かいヒビが入り、粉々にこわれているのがほとんどだが、復元できたものが一個体ある。30－１がそれで、底部の一部は欠いているものの、口径10.5cm、器高14.5cmの、口縁部がやや開いた砲弾形を呈する土器で、外面には３段にわたって指頭圧痕列がみられる。内面には、六連式にみられる布目痕はなく、２段に指頭圧痕列がある。また、底部のみの破片も多く出土しており、それらはすべて丸底である。上長浜貝塚から出土している焼塩土器は、形態的にはほぼ同じで、大きいもので口径13cm、器高15cm、小さいもので口径8.5cm、器高９cmの運搬しやすい、比較的小さな土器で、いづれも内面に布目痕はない。



第31図　貝塚出土土製品実測図

土製品（第31図）

土製品は少なかったが、竈の口縁部（31－１）や庇部（31－２）のほか、土製支脚（31－３、４）が数点出土しており、集落が近くにあったことを窺わせる。

漁網錘（土錘）

漁撈にかかわる生産活動の中で、中心的位置を占めるのは、網漁である。大量の魚を一度に捕獲する手段として最も普遍的に行なわれ、その実体を示すものとして、土錘や浮子がある。

上長浜貝塚では、浮子と断定できるものはないが、土錘は大量に出土している。

土錘は、その形態から、管状土錘、棒状土錘、有溝土錘に大きく分類できる。さらに、管状土錘は、膨らみが少なく細長いもの（Ａ１）、膨らみがあり紡錘形のもの（Ａ２）、膨らみがなく筒状のもの（Ａ３）に、３区分できる。また、棒状土錘も、断面が円形のもの（Ｂ１）と、断面が楕円形のもの（Ｂ２）に２区分できる。

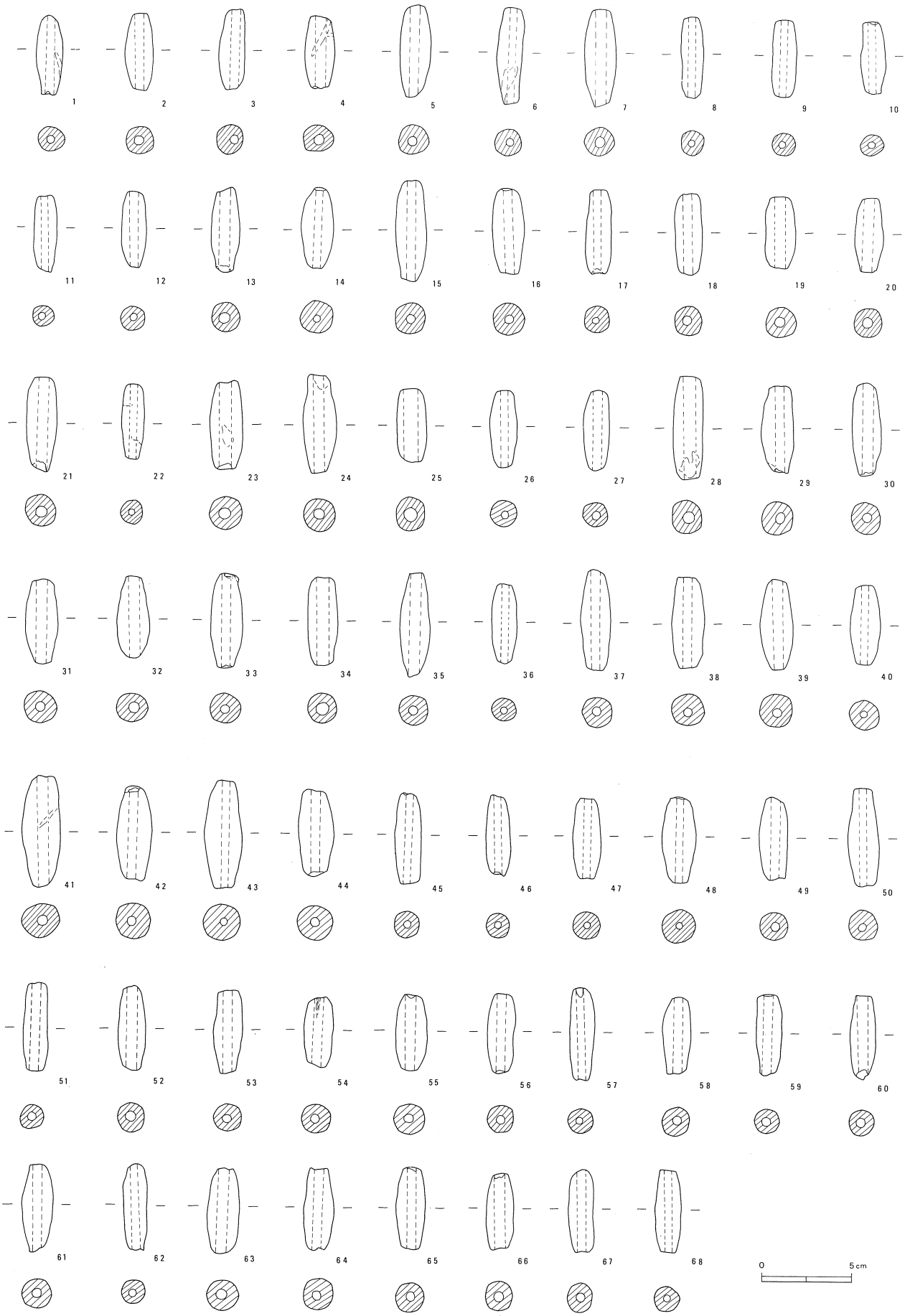
上長浜貝塚から出土した土錘総数は 699点で、完形か、それに近いものが260点、完形ではないが、1/2以上残存しているものが306点あり、合わせると、少なくとも566点はあったことになり、僅か200㎡の調査面積からすれば、歴史時代の貝塚としては最も土錘の出土量が豊富な貝塚といえる。

形態的に、最も多い土錘は管状土錘であり492点を数える。そのうち、Ａ１が370点、Ａ２が103点、Ａ３は僅かに19点しかない。棒状土錘は、73点のうち、Ｂ２は７点しかない。また、棒状土錘を再利用したと考えられる有溝土錘が１点ある。管状土錘のうち、約半数が、完形かそれに近いものであったのにくらべ、棒状土錘では、73点のうち、13点しか完形のものがない。これは、棒状土錘が別名、有孔土錘ともいわれるように、両端近くに１穴づつ孔があいているため、その部分が欠ける確率が高く、完形品が少ない大きな理由となっている。

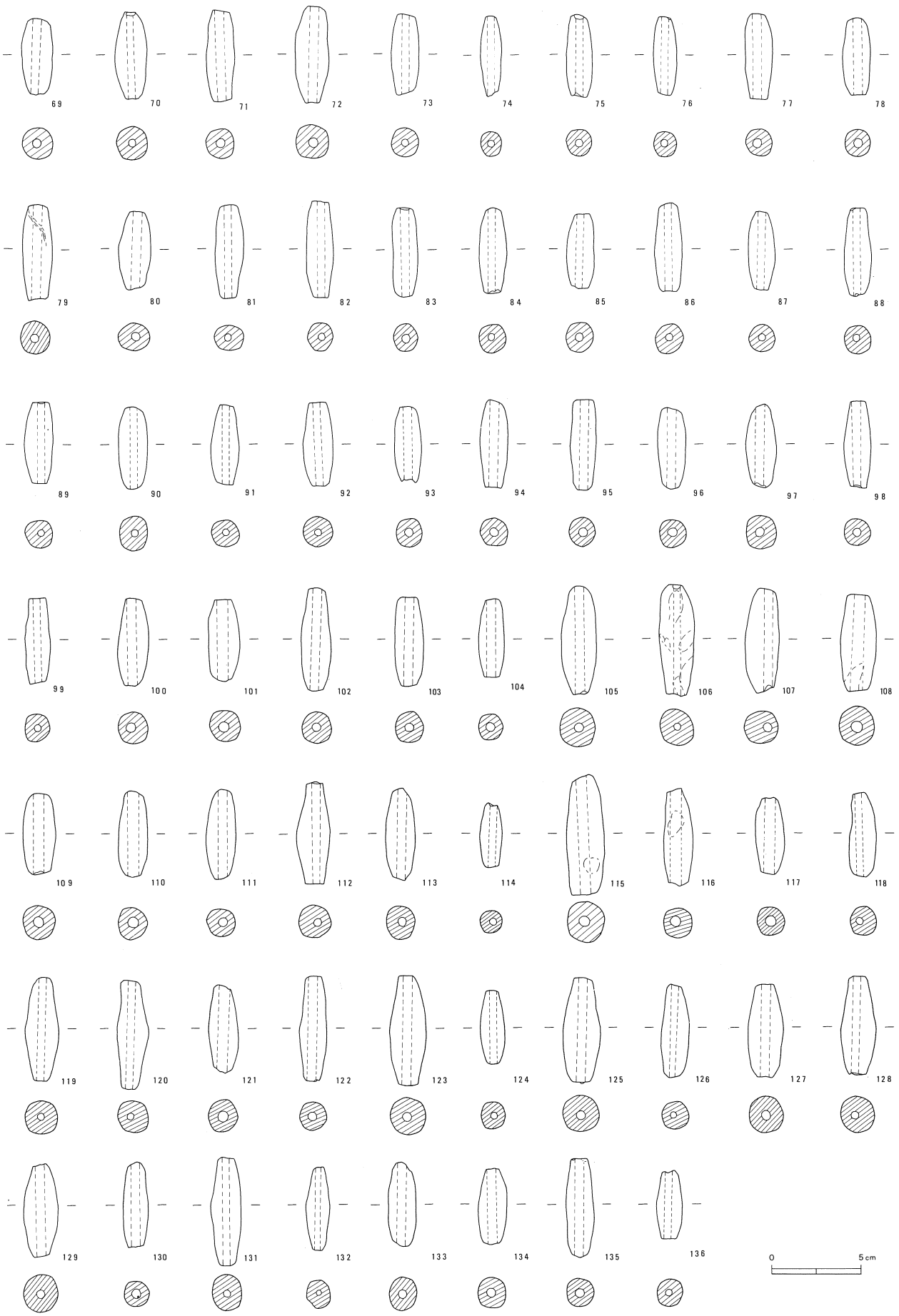
土錘の大きさや重量をみてみると、管状土錘では、形態によって、大きさや重量がやや異なっている。Ａ１は、長さは４～５㎝、最大幅１～２㎝の小さな土錘がほとんどで、重量も10ｇ前後と軽い。Ａ２は、短かいもので3.4㎝、長いもので12㎝と幅があるが、５㎝を超えるものがかなり多く、最大幅も２㎝以上のものも多くみられ、大きいものでは4.5㎝もある。また、重量も100ｇを超えるものもあり、最も重いものでは245ｇもある。Ａ１が、ある程度まとまっているのにくらべ、Ａ２はかなり数値に幅があるが、総体的にＡ１よりも大きな土錘がほとんどである。棒状土錘は、数量が少ないのが統計的には難点であるが、長さは７～９㎝、最大幅も２㎝前後と揃っており、管状土錘にみられたような数値のばらつきはみられない。平均重量でみると、管状土錘が23ｇであるのに対し、棒状土錘は51ｇで、２倍以上の個体重量がある。

また、土錘の層別出土状況をみてみると、２層（58点）、23層（52点）、33層（50点）が特に多い。それらの形態別内訳をみてみると、２層と23層では、管状土錘が、それぞれ57点、51点で、ほとんどが管状土錘である。ところが、33層では、棒状土錘が16点もあり、1/3近くを棒状土錘が占めており、やや様相を異にしている。また、層別の土錘重量をみると、８層（71ｇ）、37層（54ｇ）が突出している。これは、土錘が多く出土し、網漁が盛んに行なわれたと考えられる２層（23ｇ）、23層（17ｇ）33層（21ｇ）の時期が平均的な重量であることを考えると、網漁の方法が異なっていた可能性もある。

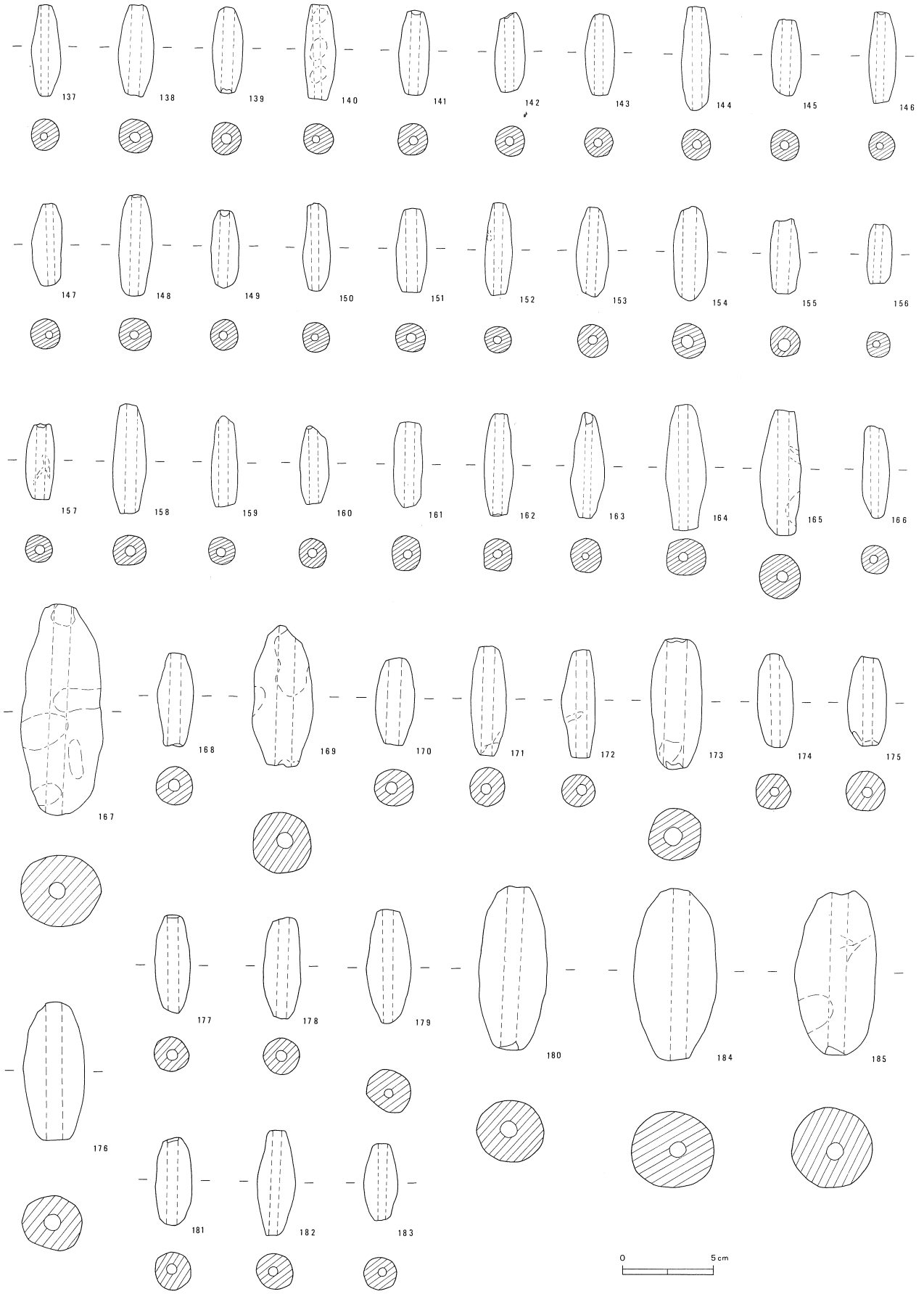
これらについて、網の綱を通す孔径に注目すると、管状土錘のうち、Ａ１は、ほぼ0.4～0.6㎝でまとまっているが、Ａ２は、大きな土錘もあるため0.4～1.1㎝と幅がある。棒状土錘は0.4～0.7㎝で幅は小さい。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
0
5cm

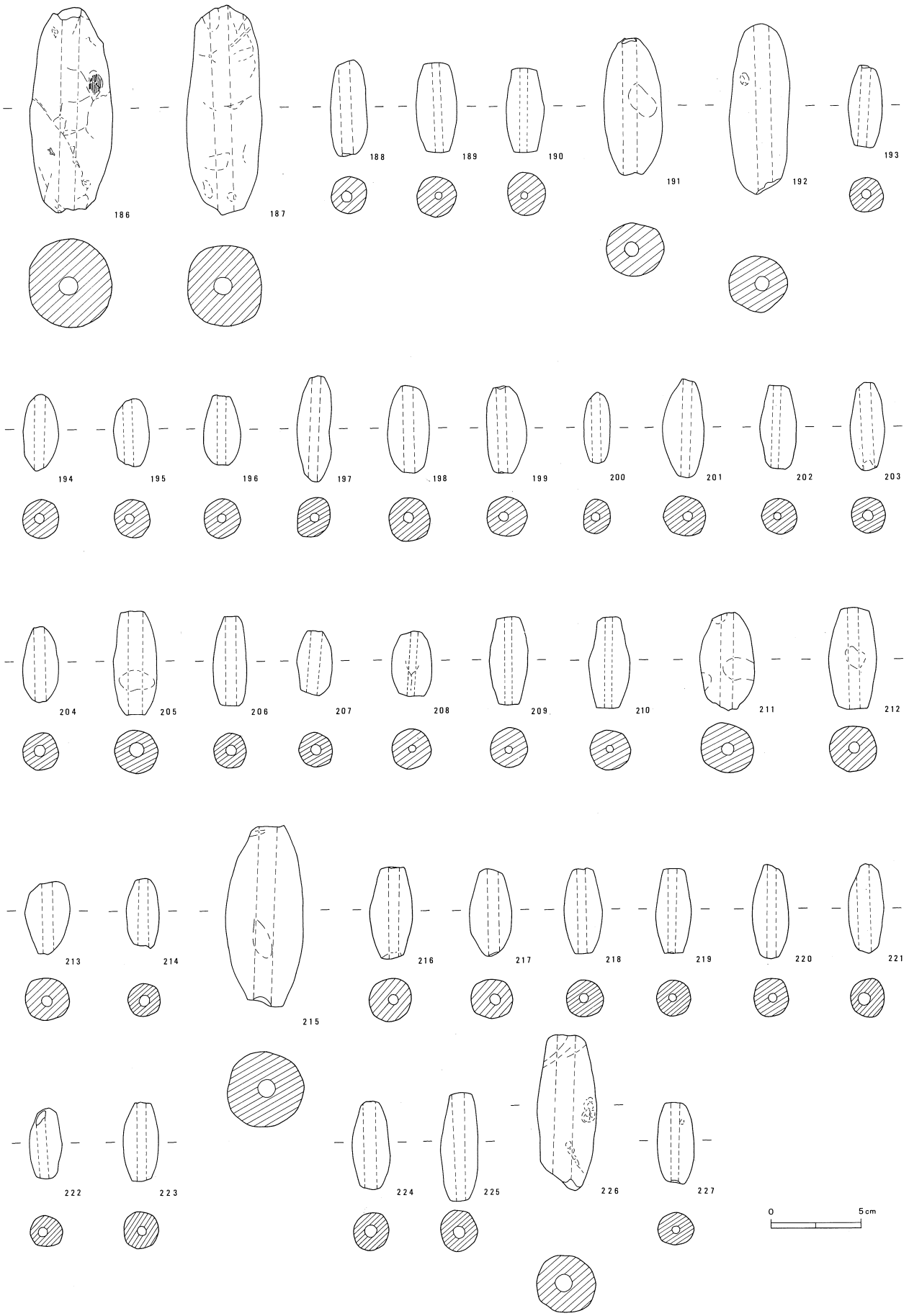
第32図　土錘実測図(1)


69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
0
5cm

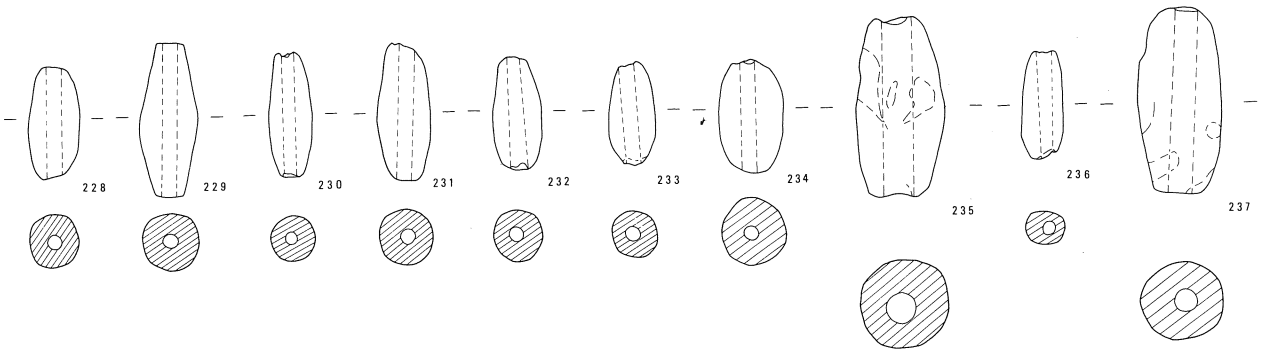
第33図　土錘実測図(2)

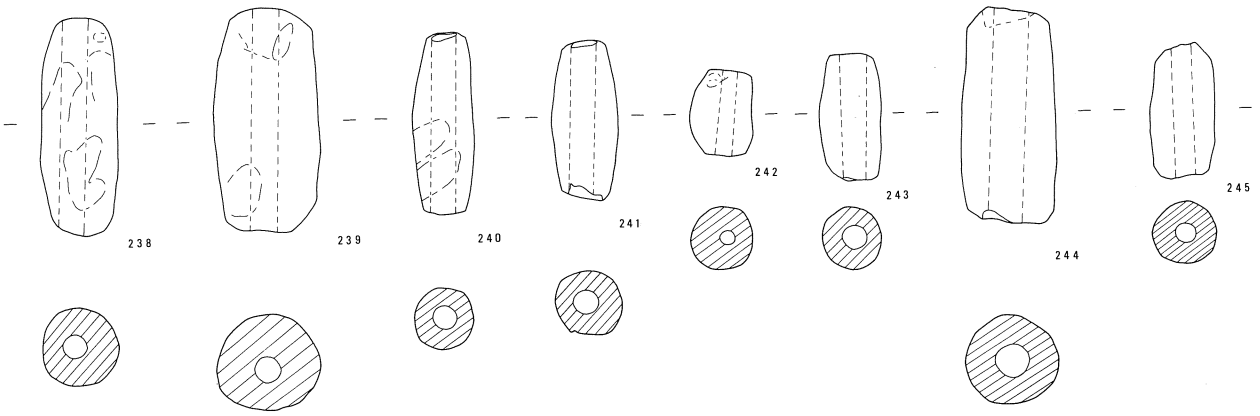

137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
0
5cm

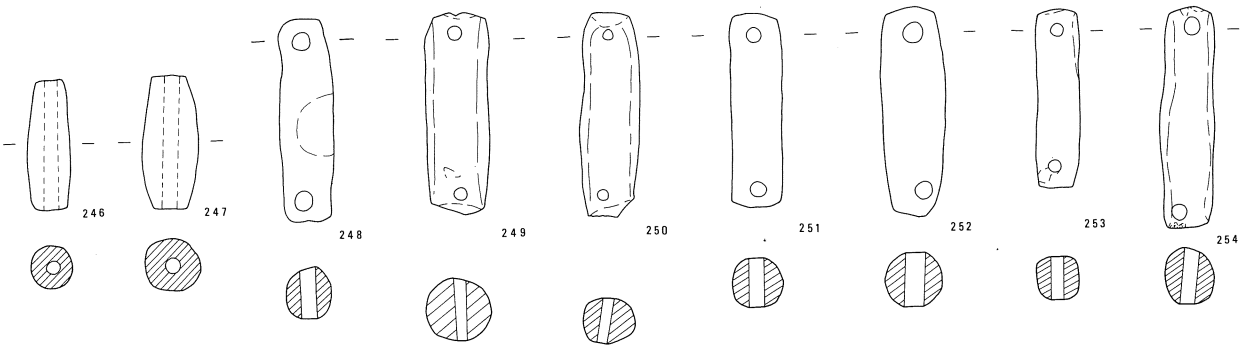
第34図　土錘実測図(3)

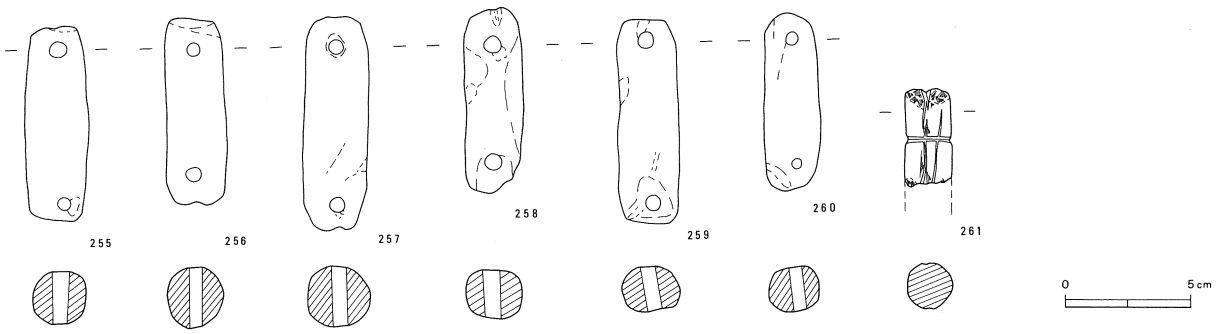

186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
0
5cm

第35図　土錘実測図(4)


228
229
230
231
232
233
234
235
236
237


238
239
240
241
242
243
244
245

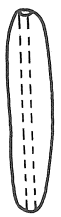
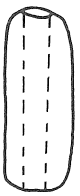

246
247
248
249
250
251
252
253
254


255
256
257
258
259
260
261
0
5cm

第36図　土錘実測図(5)

（単位　点）

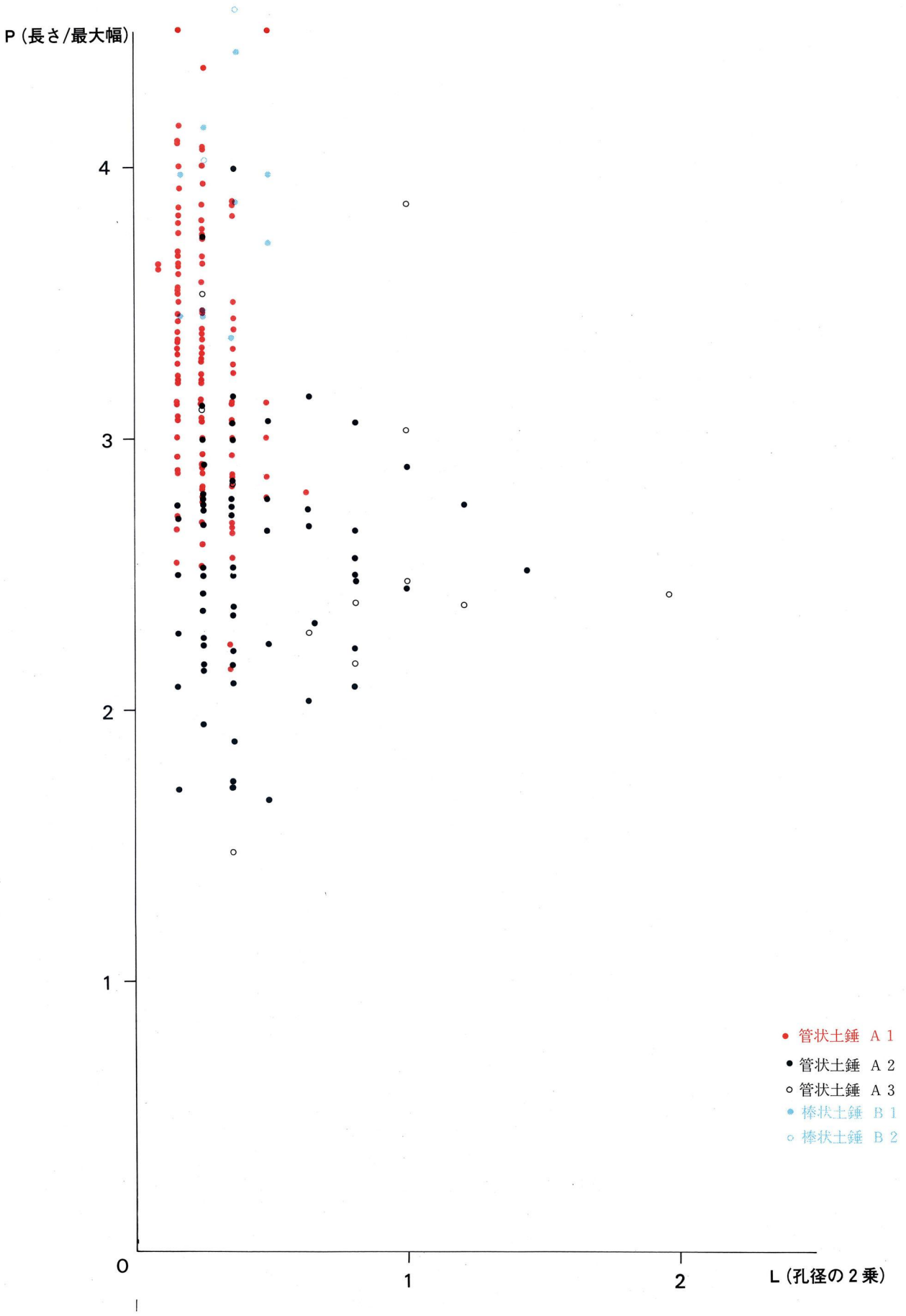
残存状態 形　態	○ 完形及び ほぼ完形	△ 残存½以上	小　計	× 残存½以下	合　計
管状（A 1）	165	205	370	133	699
管状（A 2）	69	34	103		
管状（A 3）	13	6	19		
棒状（B 1）	10	56	66		
棒状（B 2）	3	4	7		
有溝（C）	0	1	1		
合　　計	260	306	566	133	699

管　　状			棒　　状		有　溝
A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	C
					
膨らみ少なく 細長い	膨らみがあり 紡錘形	膨らみなく 筒状	断　面 円形	断　面 楕円形	有　溝

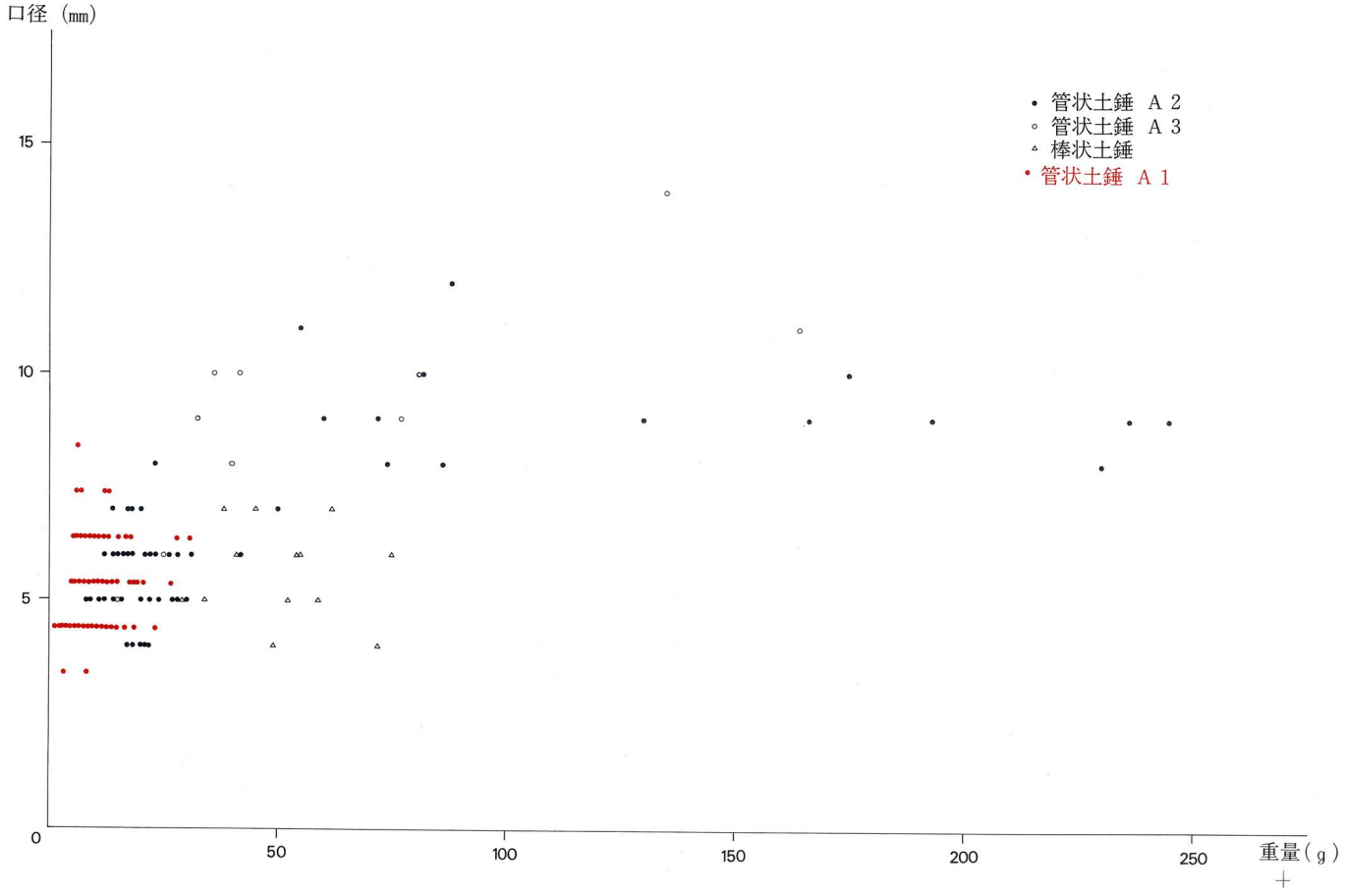
第37図　形態別土錘一覧表

層　別	A　(管状)			B　(棒状)		計	平均重量（g）(残存状態○のみ)	
	A 1	A 2	A 3	B 1	B 2		管　状（g）	棒　状（g）
2	44	12	1	1	0	58	23 (33／ 754)	
3	17	2	2	1	0	22	20 (19／ 373)	
5	20	5	2	1	0	28	33 (15／ 497)	
7	1	3	0	0	0	4	14 (3／ 42)	
8	17	4	0	3	1	25	71 (13／ 928)	
10	8	1	0	0	0	9	10 (5／ 54)	
13	1	0	0	0	0	1	13 (1／ 13)	
18	1	0	0	2	0	3	0 (0／ 0)	
19	1	2	0	3	0	6	22 (2／ 44)	
21	29	2	0	0	0	31	18 (9／ 163)	
22	18	0	0	0	1	19	10 (6／ 59)	
23	44	5	2	1	0	52	17 (20／ 348)	
24	1	0	0	0	0	1	0 (0／ 0)	
25	23	3	2	1	0	29	12 (9／ 109)	
26	0	1	0	0	0	1	0 (0／ 0)	
27	0	2	0	0	0	2	15 (2／ 30)	
28	0	1	0	1	1	3	16 (1／ 16)	
30	18	9	0	5	0	32	18 (14／ 252)	
31	11	2	0	2	0	15	16 (8／ 131)	
33	16	17	1	14	2	50	21 (20／ 410)	
34	0	0	0	1	0	1	0 (0／ 0)	
35	0	0	0	0	0	0	0 (0／ 0)	
37	5	5	1	5	0	16	54 (5／ 269)	
38	4	0	0	0	0	4	17 (2／ 34)	
41	6	2	0	3	0	11	16 (4／ 63)	
42	0	0	1	0	0	1	135 (1／ 135)	
44	4	1	0	0	0	5	20 (1／ 20)	
45	2	0	0	0	0	2	17 (1／ 17)	
46	5	0	0	0	0	5	9 (2／ 18)	
47	1	1	0	1	1	4	14 (1／ 14)	
サブトレ	18	7	2	9	1	37	14 (12／ 167)	
セクションベルト	2	1	1	0	0	4	26 (2／ 52)	
カクラン	27	6	1	4	0	38	17 (17／ 28)	
グリッドのみ	15	8	1	7	0	31	18 (9／ 159)	
東壁崩壊	9	0	0	1	0	10	13 (5／ 63)	
西壁崩壊	1	0	0	0	0	1	30 (1／ 30)	
排土層・不明	2	1	1	1	0	5	39 (4／ 157)	
計	371	103	18	67	7	566	23 (247／5702)	51 (13／665)

第38図　層別土錘一覧表



第39図　土錘法量統計(1)（PとLとの相関）



第40図　土錘法量統計(2)（口径と重量との相関）

さらに、長さと最大幅の比率を、孔径との関係でみてみると、孔径0.6cmを境にして、それ以下がタテに長くなり、その数値を超えたものはヨコに長く広がる傾向が、明らかにみられる。これは、漁法の違いによると考えられ、0.6cm以下を刺網系、0.6cmを超えるものを袋網系とみることができる。(注29)

また、口径と重量との関連をみてみると、管状土錘のＡ１、Ａ３と棒状土錘が、かなりまとまった領域を示すのに対し、Ａ２は、かなり広い範囲に分散する傾向がある。

棒状土錘は、瀬戸内型土錘ともいわれるように、主に瀬戸内海に面した遺跡から出土している。これまで山陰地方での出土は、ほとんど知られていなかったが、上長浜貝塚からは、74点がまとまって出土している。時期的には、貝塚前期の33層から16点が出土し、奈良時代後半から平安時代初期にかけて、主に使用されている。島根県内では、これまでに、上長浜貝塚のほかに４遺跡から出土している。出雲平野の修理免本郷遺跡(注30)、矢野遺跡、山持川川岸遺跡(注31)からは１点づつ出土しているが、そのうち、山持川川岸遺跡出土土錘は弥生時代後期のものである。また、鳥取県に近い安来市の徳見津遺跡(注32)からは９点出土し、時期は奈良時代である。さらに、鳥取県の秋里遺跡(注33)からも出土しているが、上長浜貝塚以外は出土点数が少なく、今後もそう多く出土する可能性はないと考えられる。

第41図　島根県における棒状土錘出土遺跡

番号	層位	グリッド	形態	長さ mm	最大幅 mm	最小孔径 mm	重量 g	残存状態	備考
1	2	A 1	A 1	43	13	4	8	○	
2		A 2	A 1	45	14	5	11	○	
3		A 2	A 1	44	13	5	8	○	
4		A 2	A 1	40	15	6	9	○	
5		A 3	A 1	52	15	5	12	○	
6		A 3	A 1	54	13	4	10	○	
7		B 1	A 1	54	14	6	12	○	
8		B 1	A 1	44	12	4	7	○	
9		C 1	A 1	40	12	4	8	○	
10		C 1	A 1	39	11	4	6	○	
11		C 2	A 1	42	11	4	7	○	
12		C 2	A 1	40	13	4	7	○	
13		C 2	A 1	45	15	6	11	○	
14		C 2	A 1	42	13	4	10	○	
15		C 3	A 1	54	14	5	14	○	
16		D 1	A 1	46	14	5	14	○	
17		D 1	A 1	45	13	4	10	○	
18		D 1	A 1	42	14	5	9	○	
19		D 2	A 1	43	16	6	11	○	
20		D 2	A 1	43	15	6	9	○	
21		D 2	A 1	55	17	6	14	○	
22		D 2	A 1	42	12	4	6	○	
23	3	A 2	A 1	50	18	7	15	○	
24		A 3	A 1	56	16	6	15	○	
25		B 1	A 1	42	15	8	9	○	
26		B 1	A 1	43	14	4	9	○	
27		B 2	A 1	45	12	5	8	○	
28		B 2	A 1	60	21	7	15	○	
29		B 2	A 1	49	16	5	13	○	
30		C 1	A 1	51	15	6	12	○	
31		C 1	A 1	47	21	6	14	○	
32		C 2	A 1	47	15	6	10	○	
33		C 2	A 1	53	16	5	13	○	
34		C 2	A 1	50	16	7	10	○	

番号	層位	グリッド	形態	長さ mm	最大幅 mm	最小孔径 mm	重量 g	残存状態	備考
35	3	C 2	A 1	58	15	6	12	○	
36		C 2	A 1	45	11	4	7	○	
37		D 1	A 1	56	15	5	13	○	
38	5	A 2	A 1	51	15	5	16	○	
39		A 3	A 1	51	15	5	13	○	
40		A 3	A 1	43	15	4	11	○	
41		B 2	A 1	65	17	6	20	○	
42		B 2	A 1	53	17	5	16	○	
43		B 2	A 1	61	18	4	22	○	
44		B 3	A 1	48	16	5	16	○	
45		B 3	A 1	51	13	4	10	○	
46		B 3	A 1	45	10	4	7	○	
47		B 3	A 1	45	15	4	11	○	
48		C 3	A 1	47	15	4	13	○	
49	7	D 3	A 1	48	12	5	10	○	
50	8	B 3	A 1	55	15	4	13	○	
51		C 2	A 1	49	13	5	9	○	
52		C 3	A 1	49	15	6	11	○	
53		D 3	A 1	47	14	5	11	○	
54			A 1	39	13	5	10	○	
55			A 1	45	15	5	12	○	
56			A 1	45	13	5	10	○	
57			A 1	52	13	4	10	○	
58		L 3	A 1	43	15	5	8	○	
59	10	D 3	A 1	43	14	5	9	○	
60			A 1	47	15	6	8	○	
61			A 1	50	16	5	11	○	
62			A 1	48	13	4	8	○	
63	13	E 3	A 1	48	16	6	13	○	
64	21	K 1	A 1	45	14	5	13	○	
65		K 2	A 1	42	14	5	10	○	
66			A 1	40	14	6	9	○	
67			A 1	45	13	5	10	○	
68		L 2	A 1	45	11	4	8	○	

第42図　土錘計測一覧表(1)

番号	層位	グリッド	形態	長さ mm	最大幅 mm	最小孔径 mm	重量 g	残存状態	備考
69	21	L 2	A 1	40	15	4	12	○	
70			A 1	49	16	4	16	○	
71		L 3	A 1	50	14	5	11	○	
72	22	F 3	A 1	54	18	5	18	○	
73		K 1	A 1	45	14	4	11	○	
74		K 2	A 1	45	10	4	5	○	
75			A 1	45	12	4	8	○	
76		L 2	A 1	43	11	4	7	○	
77			A 1	48	12	5	10	○	
78	23	J 3	A 1	43	13	5	8	○	
79		K 1	A 1	54	15	4	14	○	
80			A 1	42	14	5	12	○	
81		K 2	A 1	42	13	4	12	○	
82		L 1	A 1	53	14	4	12	○	
83			A 1	49	12	4	10	○	
84	23	L 2	A 1	48	14	4	10	○	
85			A 1	42	14	4	10	○	
86			A 1	50	15	4	12	○	
87			A 1	44	15	4	8	○	
88			A 1	49	14	4	10	○	
89			A 1	45	14	4	10	○	
90			A 1	46	16	4	14	○	
91		L 3	A 1	46	13	4	10	○	
92		M 1	A 1	47	14	4	12	○	
93			A 1	42	13	5	9	○	
94			A 1	50	13	5	11	○	
95	25	L 3	A 1	51	14	5	10	○	
96			A 1	46	14	5	9	○	
97			A 1	48	17	5	12	○	
98			A 1	49	15	4	9	○	
99			A 1	48	14	4	9	○	
100		M 1	A 1	48	16	5	11	○	
101			A 1	46	18	6	13	○	
102	30	L 3	A 1	47	16	5	16	○	
103		L 4	A 1	50	16	5	12	○	

番号	層位	グリッド	形態	長さ mm	最大幅 mm	最小孔径 mm	重量 g	残存状態	備考
104	30		A 1	45	13	5	8	○	
105		M 1	A 1	60	20	5	24	○	
106		M 2	A 1	63	18	4	22	○	
107		M 3	A 1	56	17	5	21	○	
108	31	E 1	A 1	43	20	6	21	○	
109			A 1	45	17	6	15	○	
110			A 1	48	17	6	12	○	
111			A 1	51	15	5	12	○	
112			A 1	47	18	5	17	○	
113			A 1	43	17	5	15	○	
114	33	D 2	A 1	37	12	4	5	○	
115		E 1	A 1	67	22	6	31	○	
116			A 1	55	18	6	14	○	
117			A 1	43	15	6	10	○	
118		F 3	A 1	48	15	4	10	○	
119			A 1	60	17	4	17	○	
120			A 1	60	17	4	18	○	
121			A 1	50	16	6	12	○	
122		G 3	A 1	60	15	5	14	○	
123		J 2	A 1	60	18	5	21	○	
124		K 1	A 1	43	14	4	27	○	
125	37	M 2	A 1	59	18	5	23	○	
126	38	G 4	A 1	51	14	3	12	○	
127		H 4	A 1	52	18	5	22	○	
128	41	M 3	A 1	55	18	4	20	○	
129			A 1	50	18	5	18	○	
130			A 1	48	11	5	8	○	
131	45	E 3	A 1	60	17	4	17	○	
132	46	C 2	A 1	47	13	3	7	○	
133		D 2	A 1	48	15	5	11	○	
134		E 2	A 1	43	17	5	10	○	サブトレ
135		E 3	A 1	57	15	5	12	○	〃
136			A 1	40	14	4	7	○	〃
137		F 3	A 1	50	16	4	10	○	〃
138		J 3	A 1	50	17	6	16	○	〃

第43図　土錘計測一覧表(2)

番号	層位	グリッド	形態	長さ mm	最大幅 mm	最小孔径 mm	重量 g	残存状態	備考
139		K 4	A 1	48	17	6	12	○	サブトレ
140		N 3	A 1	54	15	4	15	○	〃
141			A 1	47	17	5	13	○	〃
142		K 3	A 1	43	16	5	12	○	セクションベルト
143		E 1	A 1	45	16	5	10	○	カクラン
144		F 4	A 1	57	14	5	14	○	〃
145		J 3	A 1	43	14	5	10	○	〃
146			A 1	50	13	4	11	○	〃
147			A 1	46	17	4	12	○	〃
148		J 4	A 1	57	15	5	15	○	〃
149		K 3	A 1	44	15	5	9	○	〃
150			A 1	47	14	4	11	○	〃
151		K 4	A 1	47	14	6	11	○	〃
152			A 1	50	13	4	10	○	〃
153		L 3	A 1	50	16	5	13	○	〃
154		M 3	A 1	50	18	7	16	○	〃
155			A 1	42	14	7	9	○	〃
156		D 3	A 1	33	13	4	6	○	
157		I 4	A 1	40	14	5	9	○	グリットのみ
158		K 1	A 1	62	18	6	18	○	
159		N 3	A 1	50	15	5	10	○	東壁崩壊
160			A 1	44	14	5	10	○	〃
161			A 1	47	14	5	13	○	〃 (D～F)
162			A 1	55	15	5	13	○	〃
163			A 1	58	16	4	17	○	〃 (I～M)
164			A 1	69	17	5	30	○	西壁崩壊土
165			A 1	70	21	6	34	○	排土層不明
166			A 1	51	14	4	10	○	〃
167	2	A 1	A 2	120	45	9	236	○	
168		A 2	A 2	50	18	6	18	○	
169			A 2	82	33	9	72	○	
170		B 1	A 2	46	15	7	18	○	
171			A 2	60	19	6	23	○	
172			A 2	60	15	6	16	○	
173			A 2	72	26	11	55	○	

番号	層位	グリッド	形態	長さ mm	最大幅 mm	最小孔径 mm	重量 g	残存状態	備考
174		C 2	A 2	50	16	5	16	○	
175			A 2	45	18	6	18	○	
176			A 2	75	30	9	60	○	
177	3	A 2	A 2	55	18	6	18	○	
178		C 1	A 2	57	20	6	22	○	
179	5	A 3	A 2	64	22	5	30	○	
180		B 3	A 2	92	30	9	130	○	
181			A 2	50	20	6	18	○	
182	7	D 3	A 2	60	16	5	20	○	
183			A 2	43	16	5	12	○	
184	8	A 3	A 2	98	44	9	193	○	
185			A 2	90	43	9	166	○	
186		C 3	A 2	115	45	9	245	○	
187			A 2	118	43	8	230	○	
188	10	D 2	A 2	54	18	6	18	○	
189	19	G 3	A 2	50	20	4	22	○	
190		H 3	A 2	46	22	4	22	○	
191	21	K 3	A 2	75	28	8	74	○	
192	23	M 1	A 2	92	29	8	86	○	
193	25	M 1	A 2	45	18	5	14	○	
194	27	J 3	A 2	43	20	5	16	○	
195			A 2	39	18	5	14	○	
196	28	J 3	A 2	39	20	5	16	○	
197	30	L 3	A 2	48	19	5	22	○	
198			A 2	50	23	6	26	○	
199			A 2	50	20	5	20	○	
200		L 4	A 2	42	15	5	9	○	
201		M 1	A 2	56	23	5	24	○	
202			A 2	46	17	4	18	○	
203			A 2	49	18	6	15	○	
204		M 3	A 2	42	20	6	15	○	
205	31	E 1	A 2	47	23	8	23	○	
206			A 2	42	18	6	16	○	
207	33	D 3	A 2	34	18	6	12	○	
208		F 2	A 2	36	21	4	20	○	

第44図　土錘計測一覧表(3)

番号	層位	グリッド	形態	長さ mm	最大幅 mm	最小孔径 mm	重量 g	残存状態	備考
209	33	F 2	A 2	50	20	4	21	○	
210		G 3	A 2	48	21	4	22	○	
211			A 2	50	30	7	50	○	
212		I 3	A 2	55	23	6	42	○	
213		I 4	A 2	40	23	6	21	○	
214		M 1	A 2	38	17	5	11	○	
215	37	L 2	A 2	98	40	10	175	○	
216		L 4	A 2	50	22	5	27	○	
217		M 1	A 2	48	19	6	22	○	
218		M 2	A 2	45	19	5	22	○	
219	41	M 3	A 2	47	17	4	17	○	
220	44	M 2	A 2	52	19	5	20	○	
221	47	B 2	A 2	48	18	7	14	○	
222		E 3	A 2	38	17	5	8	○	サブトレ
223			A 2	45	19	5	16	○	〃
224		F 3	A 2	50	18	7	20	○	〃
225		H 4	A 2	60	20	5	28	○	〃
226		J 3	A 2	87	30	10	82	○	ガクラン
227		K 4	A 2	47	17	5	16	○	〃
228		M 3	A 2	40	18	6	17	○	〃
229		D 3	A 2	64	23	6	28	○	グリットのみ
230		E 3	A 2	50	18	5	14	○	〃
231		K 1	A 2	55	20	6	22	○	〃
232			A 2	45	20	7	17	○	〃
233		K 2	A 2	40	17	6	14	○	〃
234		K 4	A 2	43	25	6	31	○	〃
235			A 2	83	33	12	88	○	排土層不明
236	2	B 1	A 3	46	13	5	9	○	
237	3	C 2	A 3	72	30	9	77	○	
238		D 1	A 3	89	23	10	81	○	
239	5	A 3	A 3	91	38	11	164	○	
240	23	L 2	A 3	70	23	10	42	○	
241		M 1	A 3	62	25	10	36	○	
242	25	L 3	A 3	34	23	6	22	○	
243	33	E 1	A 3	50	23	9	32	○	

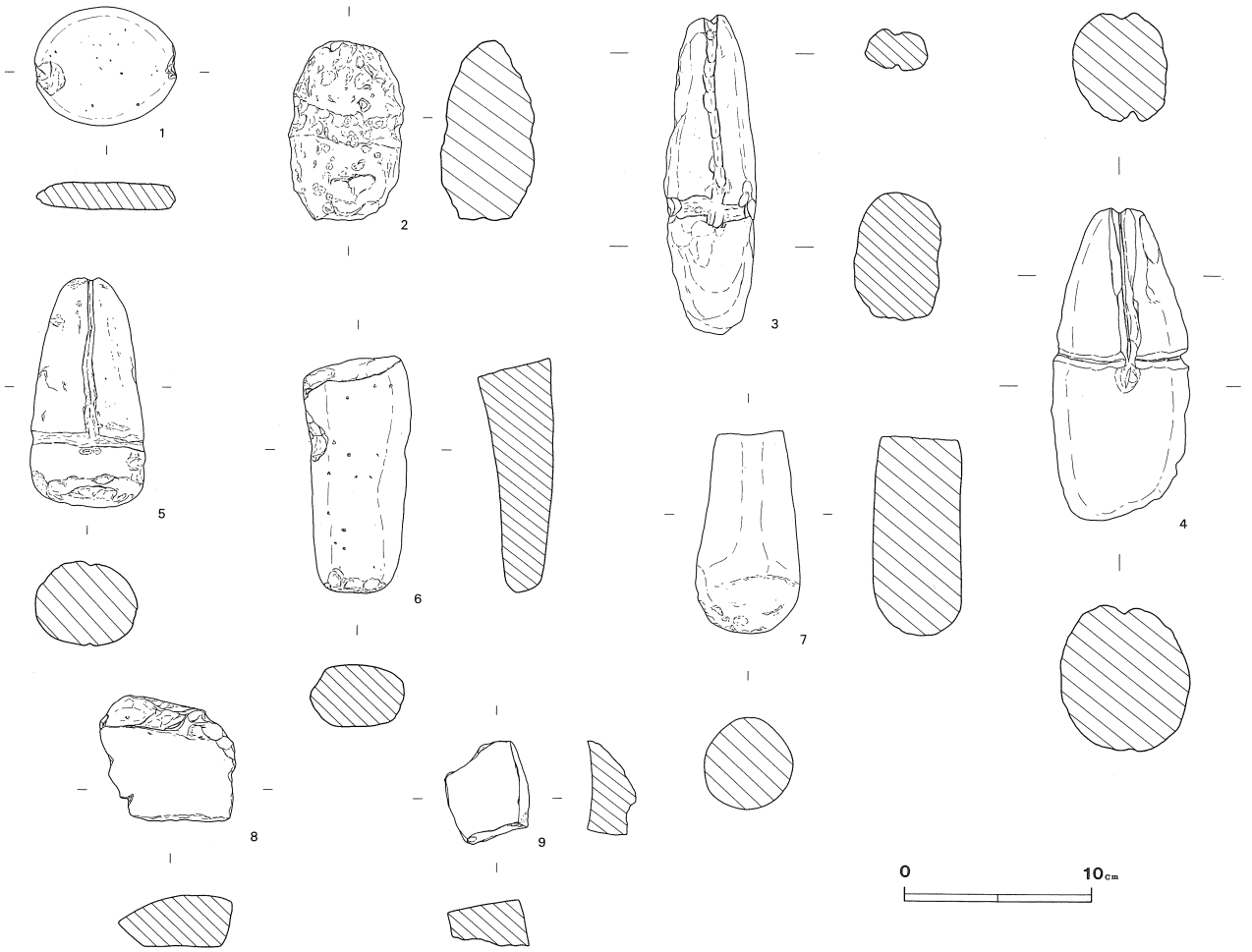
番号	層位	グリッド	形態	長さ mm	最大幅 mm	最小孔径 mm	重量 g	残存状態	備考
244	42	L 4	A 3	85	35	14	135	○	
245		K 3	A 3	55	24	8	40	○	セクションベルト
246		J 3	A 3	53	17	5	15	○	カクラン
247			A 3	54	19	6	25	○	排土層不明
248	2	A 1	B 1	83	21	7	45	○	
249	23	F 3	B 1	79	23	4	72	○	
250	25	I 3	B 1	83	21	4	49	○	
251	30	M 3	B 1	77	20	6	41	○	
252	31	E 1	B 1	85	23	7	62	○	
253	37	K 4	B 1	70	17	5	29	○	
254		M 2	B 1	88	20	6	55	○	
255	41	M 3	B 1	76	22	5	59	○	
256			B 1	72	21	5	52	○	
257		B 3	B 1	87	26	6	75	○	グリットのみ
258	28	I 3	B 2	75	19	7	38	○	
259	33	D 3	B 2	82	18	6	54	○	
260	47	A 2	B 2	72	18	5	34	○	
261	37	L 4	C	40	18		19	△	

第45図　土錘計測一覧表(4)

石製品（第46図）

石製品としては、石錘のほか、叩き石、砥石などがある。弥生時代以降では、石錘が少なくなり、土錘の占める比重が高くなってくる。上長浜貝塚から出土した石錘は、土錘にくらべると極めて少なく、10点にも満たない。形態から分類すると、打欠石錘、有溝石錘、大型有溝石錘の３種類が認められる。

打欠石錘（46－１）は、扁平な礫の両端を打ち欠いたもので、石錘の中では最も普遍的にみられ、上長浜貝塚からは、１点（112ｇ）だけ出土している。有溝石錘（46－２）は、短軸の中央に溝が１条あり「瀬戸内型」ともよばれる瀬戸内海水系に卓越する石錘で、貝塚前期の33層から出土している。重さは400ｇの凝灰質砂岩製の石錘である。大型有溝石錘は、「中部型」ともよばれ、日本海沿岸に広く分布している。Ｔ字状に直交する溝をもつもので、石錘の中では最も重量がある。上長浜貝塚からは形態がやや異なるものが３点出土している。３は、長さ17.5cm、重さ680ｇの細粒礫岩で、貝塚後期の24層から出土している。４は、３点の中では最も重く、1.23kgの超重量石錘である。紡錘状を呈し斑晶の多い流紋岩製で、８層から出土している。５は、３点の中では一番小さく、510ｇの流紋岩製の石錘である。これら３点に共通することは、両端のうち、片方の先を細く尖がらせ、もう一方は打ち欠いて幅広くつくっていることである。溝がある方が細くなっていることから、紐をかけ、垂下するのに適した形態をしており、そうした使用方法による機能が考えられる(注34)。この形態の石錘は、出



第46図　石製品実測図

土例はそう多くなく、島根県内では、隠岐島前で４点採集されている[注35]ほか、出雲平野の砂丘地に立地する南原遺跡等から４点出土している[注36]に過ぎない。また、鳥取県では、秋里遺跡から１点出土[注37]している。

６、７は、敲打痕が認められる叩き石で、６は流紋岩、７が安山岩質凝灰岩である。

８、９は砥石である。８は流紋岩で、37層出土、９はアプライトで、38層から出土している。

骨角器（第47図）

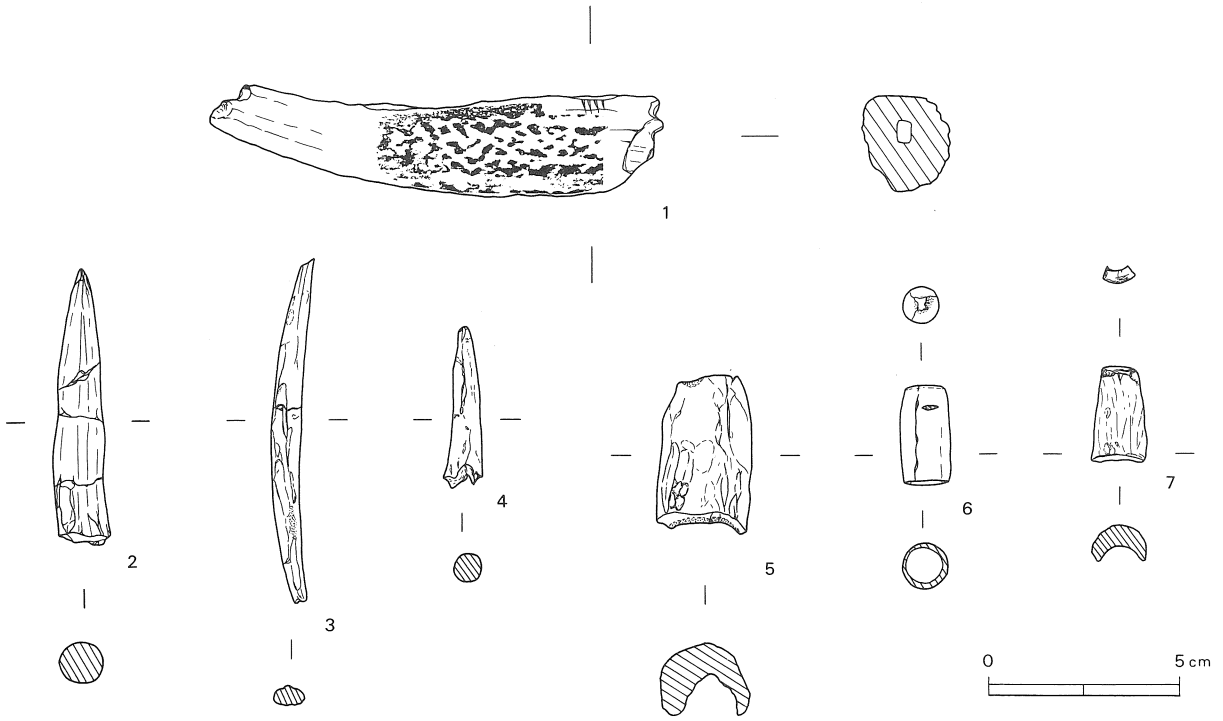
上長浜貝塚からは、量的にはごく僅かだが、骨角器も出土している。

１は、長さ11.5cmの鹿角の中心部分を、タテ長の断面長方形に刳り抜き、そこに鉄製品を嵌め込んで、刀子などの柄頭として使用したものである。親指で押さえたり、指で握る位置には、鉄製品で平らに削ったり、磨耗した痕が残っている。この骨角器は、Ｇ４の33層から出土している。２、３は、ヤス状刺突具として使用されたと考えられるもので、２はＫ３の37層、３はＩ３の33層、４はＫ３の37層から出土しており、いづれも貝塚前期の出土遺物である。５、６、７は、大きさは異っているが、いづれも両端を鋭く削り、中央部分を刳り抜き、内外面を磨研した円筒形製品と考えられる。因みに、時期は異なるが、出雲平野の弥生遺跡である知井宮多聞院遺跡の貝塚からは、鹿角装刀子が出土している。

鉄製品（第48図、第49図）

貝塚には、鉄製品も多く含まれ、鎌、紡錘車、火打金、ヤス、釣針、鏃、刀子などが数多く出土している。しかし、これらの多くは、小さな破片になっており、その原形がわかるものは少ない。また、それらの中には、１mmメッシュの洗じょうカゴで、はじめて検出されたものもかなりある。

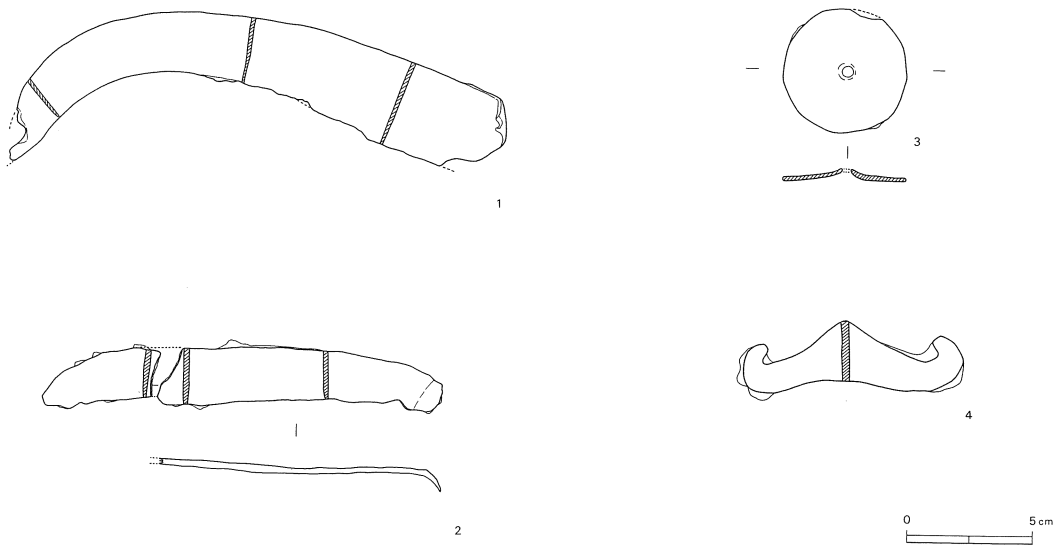
鎌は２点出土しているが、１は、長さ20cm、幅は基部で3.5cm、先端付近は２cmである。緩く内弯



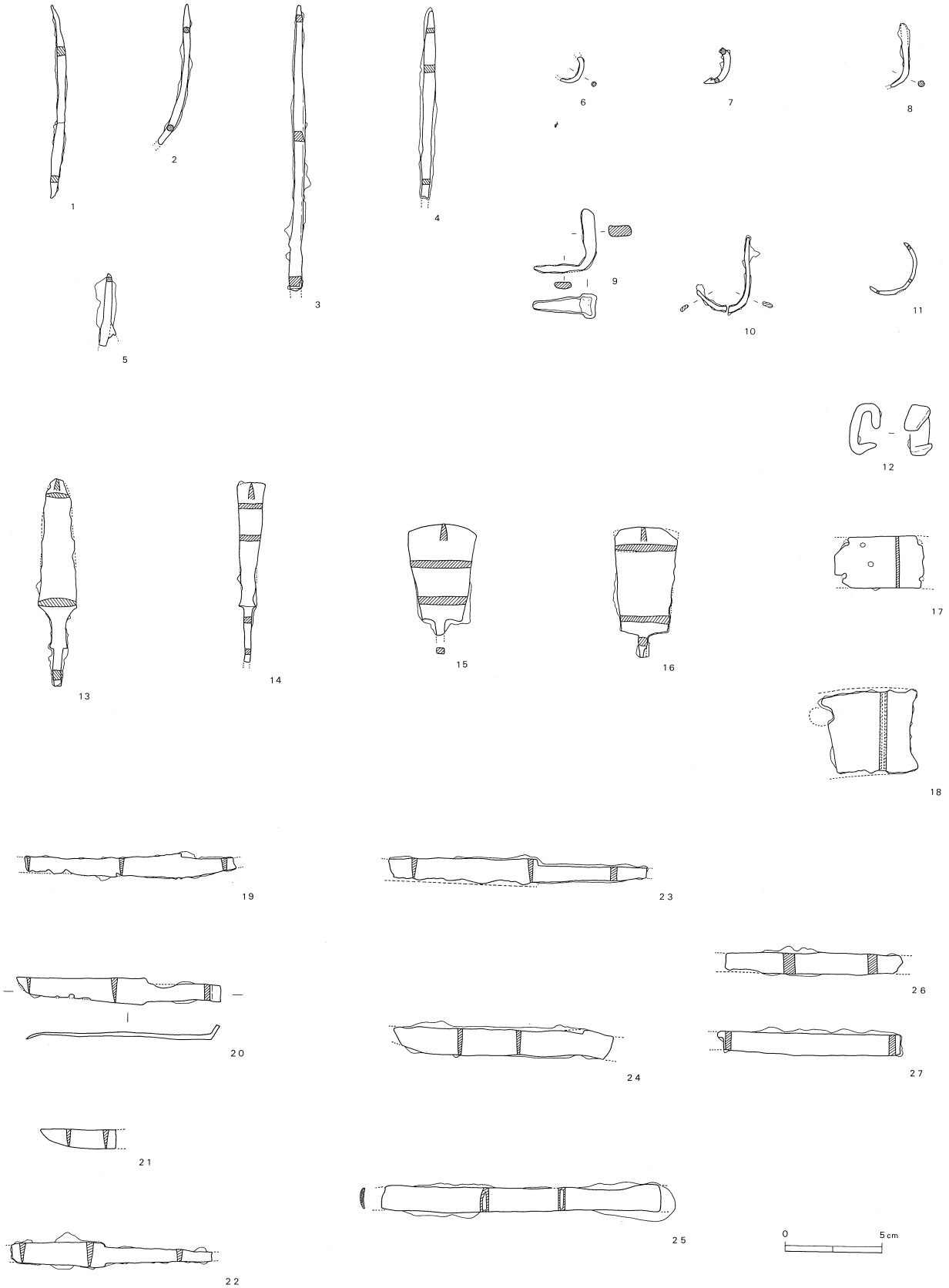
第47図　骨角器実測図

しながら、先端にいくにしたがって、刃幅を狭めており、先端部の一部を欠いている。また、着柄のための折り返し部は、棟部から端部にかけて、三角状に折り曲げられている。2は、1よりも小さく身がやや直線的で、あまり内弯しないタイプの鎌である。身の中ほどを欠いており、基部の折り返しは、全体的に折り曲げられている。3は、厚さ0.2cmの紡錘車で、1点のみの出土である。直径5cmの紡輪の中心部に、0.4cmの孔をあけている。4は火打金で、1点のみの出土であるが、全国的に出土例の少ない遺物である。島根県内からは、市内の長者原廃寺から1点確認されている(注38)。貝塚前期の33層から出土しており、形態的には、両端がやや鋭く突出した山形火打金である。刃の長さは8cmで刃部の中央部が擦り減り、やや弯曲している。山形の中央部にみられる小孔は、X線写真では判然としなかった。

漁具としてのヤス（49－1 ～5)は、断面が方形または円形の細長いもので、先端を尖らせているが、やや弯曲するものと、直線的なものの2種類がある。長いヤス（49－3）は、現存長が15cmをはかる。釣針（49－6～8）は、その可能性のあるものはかなりあるが、原形がわかるものは、ほとんどない。いづれも小形品で、7はアグ（逆刺）をもつ。貝塚からは、漁具のほかに武器も出土している。なかでも、鉄鏃（49－13～16）は、普遍的で、上長浜貝塚からは、3種4点が出土している。いづれも、鏃身部が大きく幅広い平根系である。13は、鏃身部形態が長三角形を呈し、鏃身関部は鈍角の段をなすもので、有茎の長頸式鉄鏃である。14は、鏃身部形態が先端にいくほど広がる方頭を呈するもので、鏃身関部が直角に段をなす有茎の長頸式鉄鏃である。15、16は、鏃身部がやや短かく、幅がかなり広い方頭式で、刃部はやや弧を描いて円頭状になっている。身が厚く、茎は短かい。刀子（49－19～24）は、完形のものはないが、かなり出土している。関の形状をみると、両関のものが多く、身幅は関部で1.5cm、茎幅は1cmで、茎端にいくにしたがってやや細くなり、茎長は、長いものでは6cmの残存長がある。



第48図　鉄製品実測図(1)

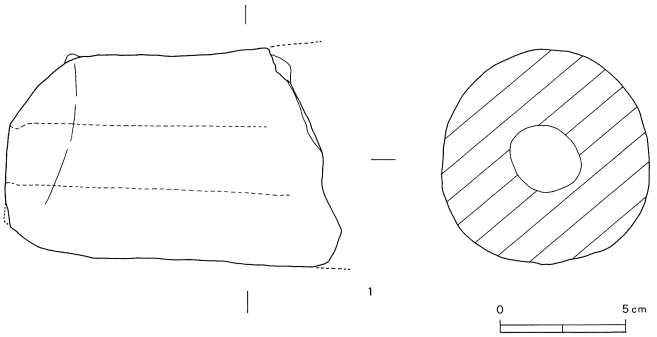


第49図　鉄製品実測図(2)

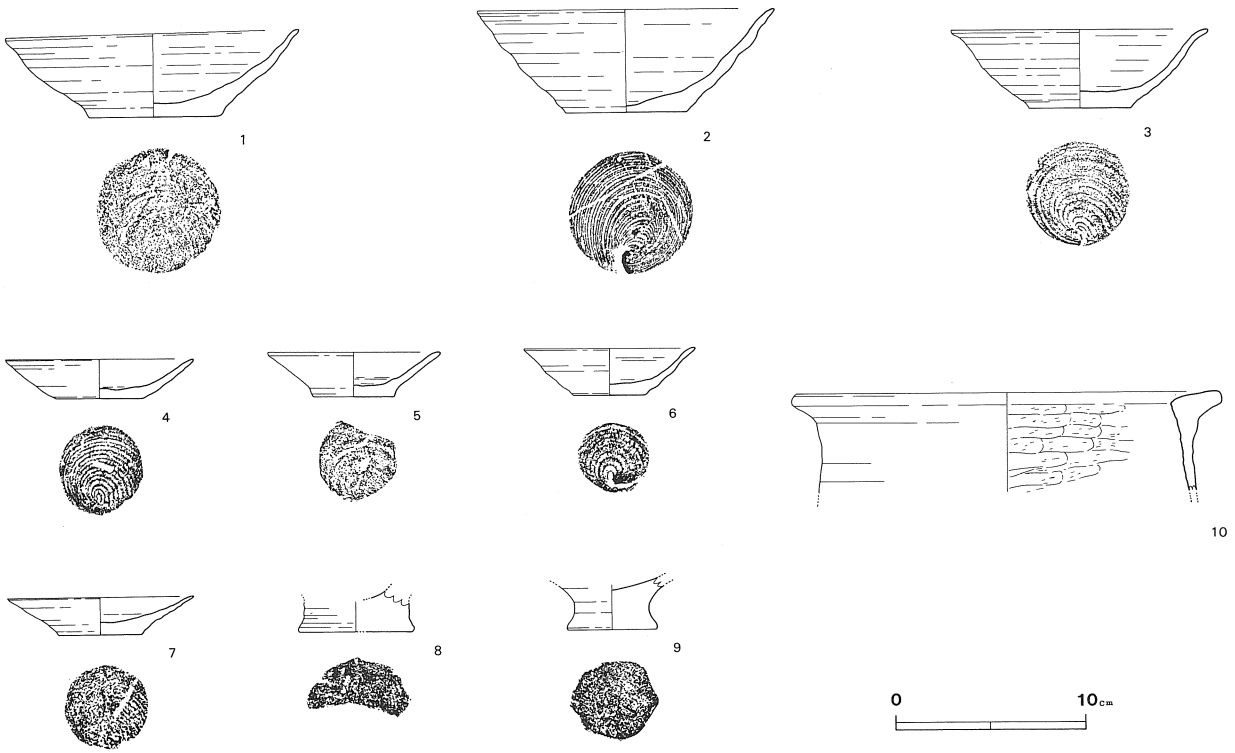
（3）貝塚以後（第50図、第51図）

上長浜貝塚では、最も新しい時期（上長浜Ⅳ期）にあたり、貝塚が形成されなくなってからも、クロスナ中に遺物が包含されており、生活は継続して営まれていることがわかる。層的には１～９層で、土師器のほか、土錘、石錘、鉄製品、鞴の羽口などが、貝塚北側のＡ～Ｄグリッドから出土している。遺構としては、ピットのほか、５層で炭化物集積層を検出している。Ｂ２を中心として広がり、厚いところでは10cmある。炭化物集積層の下に落ち込みは検出できなかったが、層中やその付近に、黒褐色粘土塊や鞴の羽口が出土している。また、炭化物集積層の下層で鍛造薄片が１点だけ確認されている(注39)ことからみて、この付近で小鍛冶が行なわれていた可能性がある。また、遺物としては、かなりの量の土錘も出土しており、貝の採取をやめた後も、網漁は行なわれ、漁村としては、その機能を、しばらくは維持していたものと考えられる。２～８層に約130点が含まれ、そのうち棒状土錘も７点出土している。

出土土器は、いづれも土師器である。１～３は坏で、口縁部が外反し、やや小さい底部は、回転糸切り後未調整である。４～７は小皿で、底部から口縁部にむけて、かなり開いて立ち上がり、口縁部が薄く、やや外反する形態は、貝塚後期の土師器とほとんど変わらない。８、９は台付坏の台部で量的には少ない。



第50図　貝塚以後出土土製品実測図



第51図　貝塚以後出土土器実測図

4．上長浜貝塚と周辺の古環境

島根大学地質学教室　中村　唯史

上長浜貝塚の立地

上長浜貝塚は出雲平野西部の出雲砂丘上に位置する。出雲砂丘は大社湾に西面する海岸砂丘で、三瓶木次軽石層に覆われた古砂丘上に、完新世の新砂丘が重なる[1]。上長浜貝塚は外海（大社湾）側からは裏側にあたる東側斜面に存在する（図１）。

上長浜貝塚を取り巻く環境は、汎世界的な現象である、完新世の急速な海水準変動と神戸川、斐伊川の運搬・堆積作用によって大きく変化してきた。これらの現象によって形成された内湾および潟湖の形成が、漁撈遺跡としての上長浜貝塚の性格と深い関わりがあると推定される。

海面変化と地形発達

完新世は最終氷期（ウルム氷期）が終わってから現在までの時代で、始まりは１万年前とされている。

最終氷期中は大陸上に氷床が厚く発達し、海水量が減少したために海面が低下した。最も低下した時は現在より100ｍ前後低いところに海面があったと考えられている。

氷期中は現在の出雲平野から宍道湖の一帯は、東から西へ流れる河川が谷地形を形成し、現在の神戸川の河口付近では谷底の標高は-40ｍ以下であったことが、ボーリング資料や宍道湖における音波探査から明らかになっている[2]。

氷期が終った１万年前は、海面は現在より30～40ｍ低いところにあった。その後、気温が上昇するとともに海面は急上昇した。海面の上昇速度が三角州が発達する速度を大きく上回ったため、汀線が

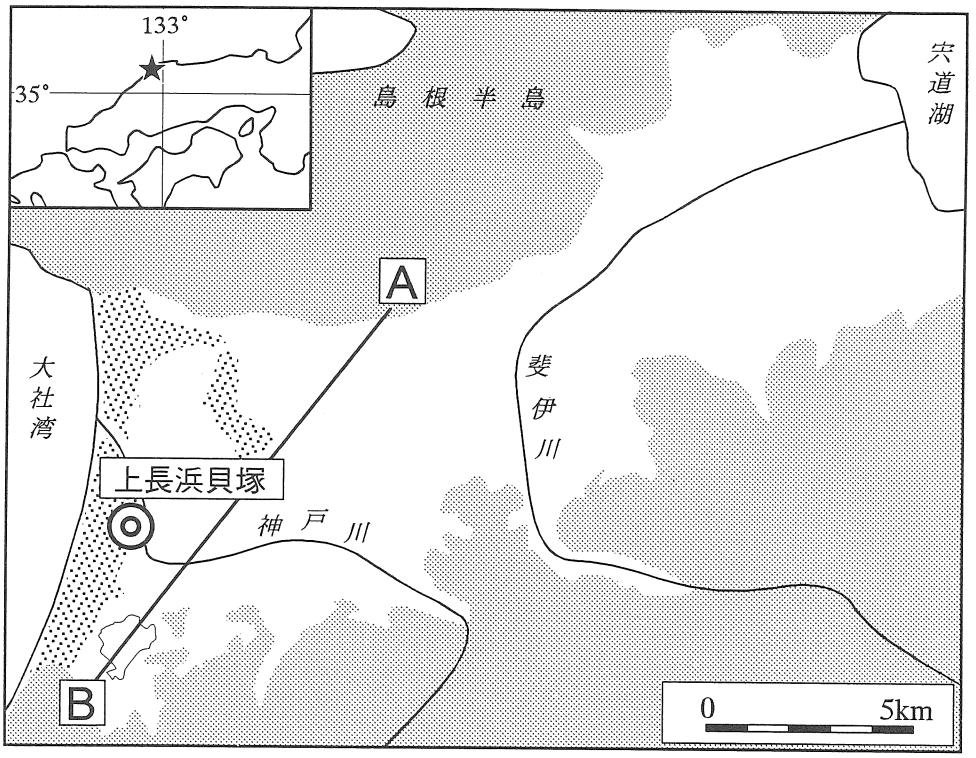


図１　上長浜貝塚の位置

アミかけ部は山地．打点部は砂丘

陸側へ移動する海進現象が生じ、それまで陸域だった場所へ海が進入した。氷期中に出雲平野から宍道湖の一帯に形成されていた谷にも海が進入した。この海進の時期は縄文時代に相当することから、一般に『縄文海進』と呼ばれる。

九州の南の鬼界火山の噴火にともなって噴出したアカホヤ火山灰が降灰した6,300y.B.Pには、海面は現在とほぼ同じ高さまで達していた。上長浜貝塚周辺では、アカホヤ火山灰層は宍道湖湖底堆積層から出雲平野地下堆積層へ連続する内湾性の泥質堆積層に挟まれている。その挟まれる高さは東から西へ低くなり、神戸川下流では標高-30m前後に挟まれる。アカホヤ火山灰層の分布高度は降灰当時の内湾底の地形といえ、当時の出雲平野から宍道湖の一帯は西へ開いた湾（古宍道湾）であったことがわかる。出雲砂丘は最終氷期以前の高海面期に海岸砂丘（砂州）として形成された古砂丘が、湾の入り口を狭窄する形の半島として存在し、その上に新砂丘が形成されていった。

松江平野の島根大学構内遺跡ではアカホヤ火山灰降灰後の、縄文時代前期後半から縄文時代中期初頭（5,500～5,000y.B.P）に、海面が現在より1m程度高くなったと考えられている[(3)]。日本列島の太平洋岸では完新世の最高海面は、6,000～5,000y.B.Pに現在より2m以上高くなったと考えられている地域が多い[(4)]。宍道湖周辺の地域ではこの時期の、陸上で形成された遺跡が標高2m以下の低地に存在することから（たとえば鹿島町佐太講武貝塚など）、現在より2m以上海面が高くなったことは考えにくい。

海面の急上昇が終わり、低下・停滞に転じてからは、古宍道湾はおもに斐伊川と神戸川の三角州に次第に埋積され、出雲平野が形成されはじめた。縄文時代後・晩期（4,000～2,300年前）には出雲平野上に遺跡が出現しはじめ、弥生時代になると急増する。このことから、遅くとも弥生時代までには、斐伊川、神戸川の三角州が島根半島まで達し、湾奥部は外海から遮断され宍道湖の原形が形成され、湾口部の出雲砂丘と神戸川三角州の間には出雲国風土記に『神門水海』と記されている潟湖が残されたと考えられる。神門水海は神戸川、斐伊川に堆積され、現在は神西湖のみが水域として残っている。

遺跡の時代の環境

上長浜貝塚では、奈良・平安時代に形成された貝塚の下位に弥生時代と縄文時代早期末～前期の遺物包含層があり、人々の活動時期は大きく3つの時代に分けられる。

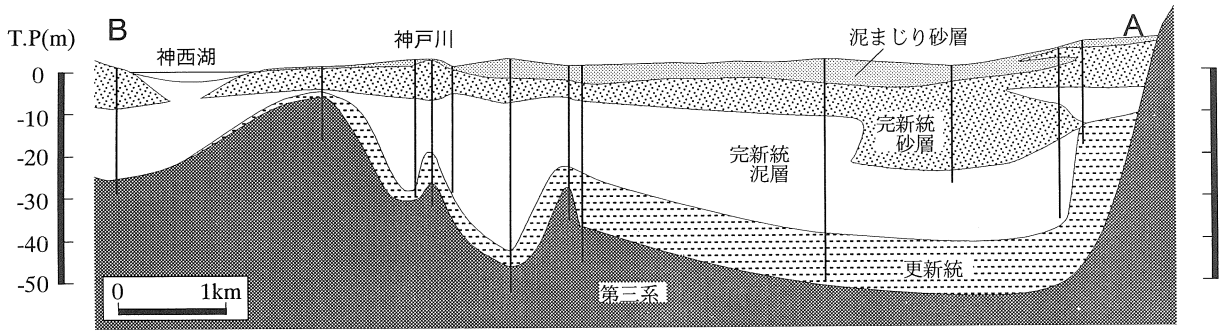
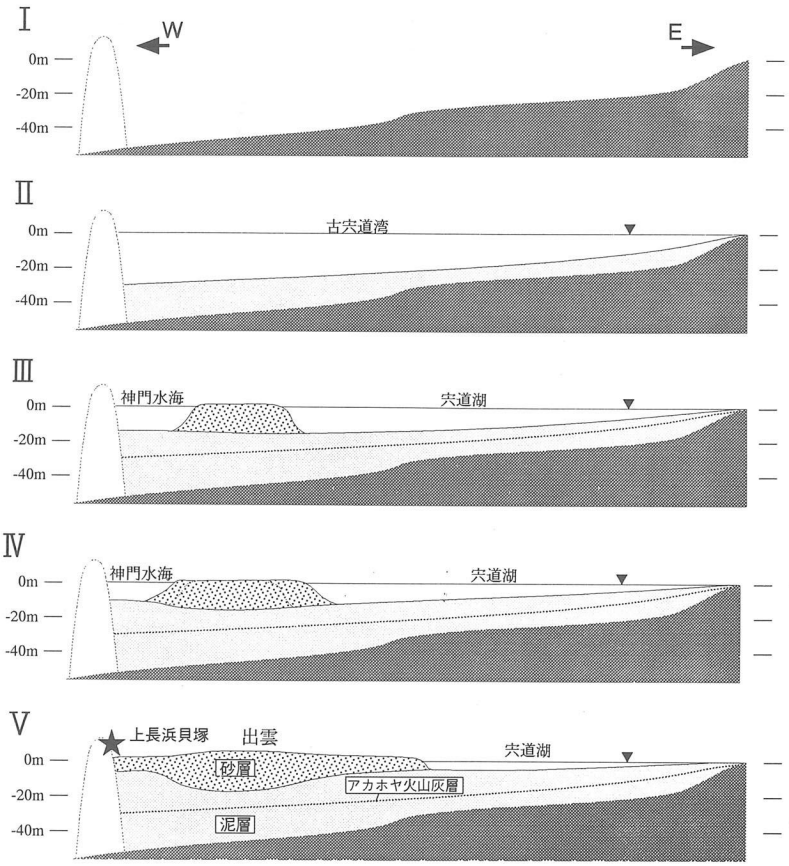


図2　出雲平野西部の地質断面図

『島根県地盤図』（米子工業高等専門学校編、1985）のデータをもとに作成

測線位置は図1参照



Ⅰ　更新世末（11,000年前頃）
氷期には海面が低下し、出雲平野の西部では標高-40ｍに達する谷が形成されていた。

Ⅱ　縄文時代早期末（6,300年前頃）
氷期が終わり、気温が上昇するとともに海水準が上昇し、海進が生じた。アカホヤ火山灰の降灰した6,300年前には海水準は現在とほぼ同じ高さまで達し、古宍道本が形成されていた。出雲砂丘は湾口部を狭窄する半島であった。

Ⅲ　弥生時代（2,000年前頃）
弥生時代には出雲平野上に多くの遺跡が出現する。出雲平野は神戸川と斐伊川の三角州の前進によって形成された。古宍道湾の湾奥部は宍道湖として孤立し、湾口部には神門水海が残された。

Ⅳ　奈良時代（1,200年前頃）
三角州の前進で水域は縮小した。上長浜貝塚の貝層の形成がこのころから始まる。

Ⅴ　現在
神門水海は消滅し、神西湖のみが水域として残されている。図中、右端が松江平野にあたる。

図３　出雲平野と宍道湖の地形発達模式図

１）縄文時代早期末～前期

縄文時代早期末～前期は海進の極大期（海域が最も広がった時期）に相当し、出雲砂丘は古宍道湾の湾口部を狭窄する半島であった。上長浜貝塚の位置は古宍道湾に面し、かつ外海にも近く、漁撈を中心とした生活を営むのに適した環境であったと考えられる。出雲平野地下に分布する内湾性堆積層のアカホヤ火山灰層より下位の層準には海水棲の貝化石がよく含まれ、アカホヤ火山灰降灰の頃までの古宍道湾は、海水の交換がよい環境であったと考えられる。

当時は上長浜貝塚の周囲は海水であり、砂州上を流れる河川もない。地表水による淡水の確保は困難であるが、海岸砂州では海水と淡水の比重差によって、砂州の地下に淡水レンズが形成され、地下水位が高くなることから、比較的容易に地下水を採取できる。砂州上で定住していたかどうかは、上長浜貝塚の出土遺物からは不明であるが、定住することが可能な環境であったと考えられる。

２）弥生時代

弥生時代には斐伊川、神戸川の三角州が島根半島まで達し、出雲平野と宍道湾の原形が形成されていた。神戸川三角州と出雲砂丘の間には古宍道湾の名残である神門水海が残されていたと推定される。出雲砂丘の地形は縄文時代と同じく半島であった。

日本各地で、弥生時代から古墳時代頃に現在より若干海面が低下したと考えられている[(4)]。出雲平野周辺でも古墳時代の遺構を伴った遺跡が、標高０ｍ前後の低いところに存在することが報告されはじめており、この時期に若干の海面の低下があったと考えられる。

弥生時代の遺物は土壌化が進んで黒色化した、いわゆる『クロスナ』に含まれている。クロスナ層が形成されるためには、ある期間、その地点の砂が移動しないこと、新たな砂が供給されないことが必要で、クロスナ層の形成要因のひとつに、海水準が低下して汀線が遠くなることが考えられている。

3）奈良・平安時代

奈良・平安時代は上長浜貝塚の貝層が形成された時期である。平安時代頃は世界的に気候が温暖だったことが知られており、特にヨーロッパでは『中世温暖期』と呼ばれる。また、温暖な気候にともなって、若干の海面上昇があったと考えられており、日本列島において、現在より海面が１ｍ程度高くなった地域も報告されており[(4)]、この時期の海面上昇を『平安海進』と呼ぶこともある。出雲平野周辺では現在より高くなった証拠はこれまでみつかっていないが、松江平野の原の前遺跡では、河川の下刻深度の変化から、奈良・平安時代に、古墳時代の低海面から、現在と同程度の高さまで海面が上昇したと考えられている[(5)]。

奈良時代に編纂された『出雲国風土記』に神門水海が記述されている。上長浜貝塚の貝層を構成する貝の大部分を占める汽水棲のヤマトシジミは、神門水海で採取されたものであろう。

貝塚の放棄後、上長浜貝塚は砂丘砂層に厚く覆われる。日本各地の砂丘で古代以降、砂丘が大型化する傾向がみられ、山地の荒廃による砕屑物供給量の増大と、製塩など燃料として砂丘上の森林が伐採されたことによる飛砂の増大が、砂丘の成長を促したと考えられている[(6)]。

神門水海の古環境復元

神門水海は、出雲国風土記の記載や、完新世の海面上昇にともなう古宍道湾の形成と神戸川三角州と出雲砂丘の位置関係からみて、ある時期に存在したことは確かであるが、その具体的な姿を示す資料はこれまでほとんど得られていない。ここでは、既存の資料をもとに神門水海についての推定と、姿を復元する手法について若干紹介する。

神門水海の位置は神戸川三角州上の微高地（沖積扇状地）に囲まれた低地と考えられている。既存のボーリング資料によると、この低地の地下は、地表から、泥まじり砂層、粗粒砂層、泥層があり、泥層の下部にはアカホヤ火山灰層が挟まれる（図２）。神門水海の底質は泥を主体とすると考えられ、神門水海はかつての古宍道湾の一部であることから、アカホヤ火山灰層を挟む泥層の上部が神門水海の堆積層に相当すると考えられる。泥層に重なる粗粒砂層は神戸川（一部は斐伊川）三角州の堆積層で、三角州の前進によって神門水海は埋積された。したがって、泥層と砂層の境界部の堆積年代が、神門水海が消失した時期を示すと考えられる。

神門水海が存在したと考えられる地域を取り巻くような形で、弥生時代以降の貝塚が分布し、これらの貝塚を構成する貝には、ヤマトシジミやサルボウガイなど、汽水棲の貝が多く含まれ、汽水域の存在が推定される。なかにはサザエなど、外海に面した岩礁帯で採取された貝も含まれており、これらは外海に面した地域から運ばれたことは明らかで、汽水棲の貝についても他地域から持ち込まれた可能性があるが、貝塚の分布からみて、その中心に汽水環境の神門水海が存在し、そこで貝を採取したと考えてよいだろう。

神門水海の名残である神西湖のボーリング試料の解析からは、神西湖では塩分濃度の変化を繰り返しながら、中世までは海水の流入が続き、その後淡水化したと考えられている。神西湖は差海川の開削（1698年）以前は神門水海側にしか海水の流入口を持たなかった。したがって、少なくとも中世までは神門水海は存在したといえる。(7)

今後、神門水海の環境復元のためには、ボーリングやトレンチ調査による堆積層の解析、特に海水流入の有無の解析と堆積年代の決定が必要と考えられる。神門水海の湖心に相当する地点と神西湖の湖心で、完新統泥層の基底までか、少なくともアカホヤ火山灰層までのボーリングコア試料を採取し、これについて検討することで、神門水海の環境を復元できる。

海水流入の有無の解析は、硫黄濃度分析、珪藻分析が有効である。堆積年代の決定は、炭素14年代測定法、連続的な花粉分析による方法がある。さらに様々な分析を行なうことによって、より詳細な環境解析が可能である。

神門水海の環境復元は、上長浜貝塚をはじめとする周辺の遺跡を評価するうえで重要であり、また、古代出雲文化の自然環境的背景を検討するうえでも貴重な資料となるだろう。

注

（1）島根県、1985：島根県の地質。665p。

（2）徳岡隆夫・大西郁夫・高安克巳・三梨昂、1990：中海・宍道湖の地史と環境変化。地質学論集、36、15-34。

（3）島根大学埋蔵文化財調査研究センター、1995：島根大学構内遺跡（橋縄手地区）発掘調査概報Ⅰ。44p。

（4）太田陽子・海津正倫・松島義章、1990：日本における完新世相対的海面変化とそれに関する問題：1980～1988における研究の展望：。第四紀研究、29、31-48。

（5）徳岡隆夫・大西郁夫・中村唯史・高安克巳、1995：原の前遺跡と周辺の古環境。朝酌川中小河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書原の前遺跡、181-195。

（6）成瀬敏郎、1989：日本の海岸砂丘。地理学評論、62、129-144。

（7）大西郁夫・徳岡隆夫・高安克巳・石原　清・梶田秀児・日下智博・熊井克己、1989：出雲平野西部の自然史。山陰地域研究、6、21-34。

5．出雲市上長浜貝塚出土の貝類

島根大学汽水域研究センター　　高安　克己

1．はじめに

出雲市上長浜貝塚は出雲平野西縁の砂丘地に位置し、縄文早期末から中世初期の複合遺跡であるが、1991年に行われた市道建設に伴う発掘調査の際に、厚さ10数ｍの新砂丘砂に覆われて夥しい量のヤマトシジミ殻を含む奈良時代後半から中世初期の貝塚が発見された（川上・湯村、1992）。奈良時代に編纂された『出雲國風土記』の記載などから、本遺跡の東方には「神門水海」と呼ばれる潟が広がっていたと推定されており、本貝塚の遺物の分析は当時の村の生業を知るばかりでなく、周辺の環境を復元する上でも重要な資料を提供するものと考えられる。筆者は、本貝塚から層別に採取された貝類のうち大量に出土したヤマトシジミをのぞく貝類について、出雲市教育委員会より同定を依頼された。本報告では、同定された貝類の種構成について述べたあと、そこから推定される当時の人々の生活と貝との関わり合いや周辺の環境について、若干の考察を行う。

2．上長浜貝塚出土の貝類

上長浜貝塚から出土した貝類は、種までの同定が不明な種や、今回の標本では同定に疑問が残る種も含めると、腹足類（巻貝）35種、二枚貝類７種であった。また、腹足類のうち14種は有肺類（陸貝類）であった（表１および表２）。これらを、生息地や採取条件などを考慮して整理すると、およそ次のようになる。

（１）外海に面した岩礁の浅瀬や小規模な砂だまりに生息する貝類

腹足類のヨメガカサガイ、ウノアシガイ、サザエ、タマキビガイ、ヒメミツカドボラ、レイシガイ、イボニシ、ヒメムシロガイなどである。食用にされる貝も含まれるが出土数は少ない。また、タマキビガイ、ヒメミツカドボラ、キヌボラ、ヒメムシロガイなどの小型の貝は明らかに食用には適さず、意識的に何かの目的を持って当時の人々が採集したとは考えられない。かつて筆者は、海藻上に生息するチグサガイやハナチグサガイなどの微小貝が海藻の食用や製塩に関連して遺跡に持ち込まれた可能性もあることを指摘したが（高安・角館、1989）、今回は出土数がきわめて少なく、その可能性は低い。

（２）外海に面した砂底ないし砂泥底に生息する貝類

このうち比較的沖合いに生息するものは、腹足類ではヒメキリガイダマシ、シドロ、バイ、テングニシ、二枚貝類ではサトウガイ、タマキガイなどである。また、岸に近いところに生息するのはオキアサリで、30層（平安時代末期）や37層（奈良時代後半～平安時代初期）から多数出土している。オキアサリは外海側ではもっとも採取が容易な場所に生息しており、しかもこの貝はときどき爆発的に多数発生することがあることから、当時の人々にとって重要な蛋白源になり得たと思われる。他にバイ、テングニシ、サトウガイ、タマキガイなども食用にされたと思われるが出土数は少ない。

（３）内湾の岩礁または岩礫底に生息する貝類

腹足類のスガイ、二枚貝のマガキ、ウネナシトマヤガイなどである。このうちマガキは二枚貝ではヤマトシジミに次いで多数出土した。また、マガキには殻が長く成長するナガガキ型と長くならない

型とがあるが、岩礁の浅瀬には後者の型が多い。今回は各層についてこの2型の量的な検討は行っていないが、本貝塚で２つの型が出土することは確かである。

（４）内湾の砂泥底に生息する貝類

腹足類のツメタガイと二枚貝のハマグリおよびナガガキ型のマガキがこのグループに入る。このうちハマグリとマガキは食用として一般的であるが、ハマグリについては出土数が少ない。

（５）汽水の潟や河口域に生息する貝類

腹足類のイシマキガイと二枚貝のヤマトシジミがこのグループに入る。このうちイシマキガイは河口域の岩礁や礫上に生息し、ヤマトシジミは砂泥底に生息する。前述したように、本貝塚ではヤマトシジミの出土数が圧倒的に多い。また、ヤマトシジミはほとんど例外なく両殻が分離した状態で産出している。殻長も４㎝以上におよぶ大型の個体が多い。

（６）淡水の河川や池に生息する貝類

今回検出したものは腹足類のカワニナのみであった。

（７）落ち葉や腐植土中に生息する貝類

ケシガイ、ホソオカチョウジガイ、クルマナタネガイ、ハリマキビ、キビガイ、ヒメベッコウガイ、ウラジロベッコウなど多数の微小～小型陸貝と若干の中型陸貝類からなり、本遺跡の貝類相を特徴づけるグループとなっている。個体の大きさや出土した個体数からみても、これらの貝類が人為的に貝塚に集積されたとは考えられない。これらの多くは落ち葉や腐植土中など湿った環境を好むもので、現在は砂丘地である遺跡の立地を考える上で興味深い。なお、陸貝類は地域的な個体変異が大きく、また、地域的な固有種も多いため、現在筆者が持ち合わせている資料では、同定が十分に確信できる段階には至っていない。しかし、属レベルでみても、上述したような生息環境は概ね間違いないと思われる。

３．出土貝類からみた当時の生活と環境

上長浜貝塚は出雲砂丘の陸側（東側）斜面に立地し、貝層上面のレベルが９～４ｍである。貝層の厚さは厚いところで1.5ｍに達し、どの貝層でもヤマトシジミが優占している。そのうちヤマトシジミが圧倒的多数を占める純貝層が5層確認されている。殻体はほとんど磨耗や破損されておらず保存状態は非常によいが、すでに述べたように両殻がそろって出土したものはほとんどない。川上・湯村（1992）が指摘しているように、もし、この貝層がむき身に加工したあとの貝殻を捨てたものだとしたら、煮沸や振動などを加えているうちに両殻が分離しやすくなった、とも考えられる。しかし、これまで入手した資料のなかには加工法について具体的に言及できるものはない。

ヤマトシジミ以外の貝類構成においても、各時代毎の違いはほとんどなく、各層とも微小な陸貝類を多数含むことが本貝塚のもう一つの特徴となっている。この陸貝類は有機物の多い暗褐色混貝土層に多量に含まれていることから、当時の出雲砂丘は安定し、湿潤で植生も豊富であったと考えられる。貝塚がつくられた時代は、世界的な気候変動と関連でみると、いわゆる「中世の温暖期」に相当しており、中緯度地帯に当時こうした湿潤気候が発達していたことを示すひとつの例として興味深い。

本貝塚の貝類を特徴づける大量のヤマトシジミは、遺跡の東側に当時広がっていた沿岸潟湖の「神門水海」で採取されていたとするのが自然であろう。地形学的および地質学的研究からも、当時の

「水海」には神戸川だけでなく斐伊川も流入していたとされている（林、1991;徳岡ほか、1990）。したがって、それが現在の中海のように海に直結した潟であっても、塩分はヤマトシジミの生育に適した５～10‰程度（宍道湖や神西湖と同程度）であったことは充分考えられる。また、砂丘地に隣接しているので、底質は砂質のところが広く、これもヤマトシジミの生育にとって好都合であったにちがいない。ただし、「水海」の入口にあたる薗の付近は、海水の侵入が容易であり、塩分も高くハマグリやマガキが生育する条件に適していたと思われる。マガキは固着性であるが、底質が泥質であっても死殻を土台にして礁を造る性質があり、また、ハマグリよりも塩分耐性が多少強いので、潟の中央に近いところまで分布し、カキ礁を造っていたかも知れない。「水海」を埋積してできた出雲平野部の地下地質の解明が待たれるところである。

上長浜貝塚の人々は、外海側の浜では専らオキアサリを採取していたと思われる。オキアサリは別名コタマガイとも呼ばれ、形もハマグリに似て美味である。現在でも美保湾などで大量発生することがあり、採取も容易である。沖合いに生息する貝や岩礁地帯に生息する貝は数も少なく、日常的に食用とすることはなかったと考えられる。

４．まとめ

（１）奈良時代後半から中世初期の上長浜貝塚からは、帰属が不明な種や疑問が残る種も含めて、腹足類35種と二枚貝7種が産出した。腹足類のうち14種は陸貝類であった。

（２）本貝塚出土の貝類は、大量のヤマトシジミと微小な陸貝の産出で特徴づけられる。このことは当時の「神門水海」がヤマトシジミの生育に適した水域であり、また、出雲砂丘が当時は湿潤な環境にあったことを示唆している。

（３）ヤマトシジミ以外では、外海に面した浜でオキアサリを採取し、また「神門水海」ではマガキを採取して、食用に供していたと考えられる。そのほかの貝は日常的な食用としての採取対象にはならなかった。

文献

東　正雄（1994）原色日本陸産貝類図鑑（増補改訂版）。保育社

川上　稔・湯村　功（1992）島根県出雲市上長浜貝塚。日本考古学年報、1992年度版、561-563。

波部忠重（1961）続原色日本貝類図鑑。保育社

波部忠重（1977）日本産軟体動物分類学　二枚貝綱／掘足綱。図鑑の北隆館

波部忠重・小管貞男（1967）貝（標準原色図鑑全集３）。保育社

波部忠重・奥谷喬司（1983）貝Ｉ　巻貝（学研生物図鑑）。学習研究社

波部忠重・奥谷喬司（1983）貝ＩＩ　二枚貝・陸貝・イカ・タコほか（学研生物図鑑）。学習研究社

林　正久（1991）出雲平野の地形発達。地理学評論、61巻、１号、26-46。

肥後俊一・後藤芳央編著（1993）日本および周辺地域産軟体動物総目録。エル貝類出版局

稲葉明彦（1982）瀬戸内海の貝類。広島貝類談話会

河本卓介・田辺澄生編（1956）山口県産貝類目録。山口県立博物館

吉良哲明（1959）原色日本貝類図鑑（増補改訂版）。保育社

黒田徳米・波部忠重・大山桂（1971）相摸湾産貝類。丸善

奥谷喬司編（1986）決定版生物大図鑑貝類。世界文化社

高安克己・角館正勝（1989）西川津遺跡弥生層出土の貝類について。朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書、273-292、島根県教育委員会
徳岡隆夫・大西郁夫・高安克己・三梨　昂（1990）中海・宍道湖の地史と環境変化。地質学論集、36号、15-34。
内海冨士夫（1969）原色日本海岸動物図鑑（改訂版）。保育社
内海冨士夫・西村三郎・鈴木克美（1971）海岸動物（標準色図鑑全集16）。保育社

	学名	和名	分布	深度（m）	底質	図版
	Class GASTROPODA	腹足綱				
	Subclass PROSOBRANCHIA	前鰓亜綱				
	Order ARCHAEOGASTROPODA	原始腹足目				
	Family PATELLIDAE	ツタノハ科				
G1	**Cellana toreuma (Reeve)**	**ヨメガカサガイ**	北海道南部以南，日本全国，小笠原，西太平洋	潮間帯	岩礁	図版34/図1
	Family ACMAEIDAE	ユキノカサ科				
G2	**Patelloida (Collisellina) saccharina lanx (Reeve)**	**ウノアシガイ**	北海道南部・男鹿半島以南	潮間帯	岩礁	図版34/図2
	Family TROCHIDAE	ニシキウズ科				
G3	**Cantharidus japonicus (A.Adams)**	**チグサガイ**	北海道南部・男鹿半島以南，四国，九州	潮間帯～下部	海藻上	図版34/図4
G4	**Cantharidus callichroa (Philippi)**	**ハナチグサガイ**	北海道南部・男鹿半島以南，四国，九州，朝鮮	潮間帯～下部	岩礁の海藻上	図版34/図5
	Family TURBINIDAE	リュウテン科				
G5	**Turbo (Batillus) cornutus Lightfoot**	**サザエ**	茨城県・北海道中西部以南，日本各地	潮間帯～40	岩礁	図版34/図3
G6	**Lunella coronata coreensis (Recluz)**	**スガイ**	北海道南部・男鹿半島以南，種子・屋久島まで，朝鮮	内湾の潮間帯	岩礫地	図版35/図1
	Family NERITIIDAE	アマオブネ科				
G7	**Clithon retropictus (v. Martens)**	**イシマキガイ**	房総半島・能登半島以南，奄美，沖縄，中国南部	汽水～淡水域	岩礫地	図版34/図6
	Order MESOGASTROPODA	中腹足目				
	Family LITTORINIDAE	タマキビガイ科				
G8	**Littorina (L.) brevicula (Philippi)**	**タマキビガイ**	北海道以南，日本各地，朝鮮，中国南部	潮上部	岩礁	図版35/図2
	Family PLEUROCERIDAE	カワニナ科				
G9	**Semisulcospira libertina (Gould)**	**カワニナ**	北海道以南，日本全国（沖縄まで），朝鮮，台湾	河川，湖沼，池	泥底	図版35/図3
	Family TRRITELLIDAE	キリガイダマシ科				
G10	**Kuroshioia cingulifera Sowerby**	**ヒメキリガイダマシ**	房総半島・佐渡島以南，奄美，沖縄，熱帯太平洋，北オーストラリア	5-155	砂底	図版35/図7
	Family STROMBIDAE	ソデボラ科				
G11	**Doxander vittatus japonicus (Reeve)**	**シドロ**	房総半島・男鹿半島以南，四国，九州，奄美，沖縄	潮間帯下部～50	砂泥底	図版34/図7
	Order HETEROPODA	異足目				
	Family NATICIDAE	タマガイ科				
G12	**Glossaulax didyma didyma (Roding)**	**ツメタガイ**	北海道南部・男鹿半島以南，九州まで，朝鮮，中国，東南アジア，インド	内湾潮間帯～100	細砂底	図版34/図10
	Family CYMATIIDAE	フジツガイ科				
G13	**Turritriton labiosus (Wood)**	**ヒメミツカドボラ**	房総半島・能登半島以南，日本全国，奄美・沖縄，インド・太平洋，西インド諸島	潮間帯～10	岩礁	図版35/図6
	Order NEOGASTROPODA	新腹足目				
	Family MRICIDAE	アクキガイ科				
G14	**Thais (Reishia) bronni (Dunker)**	**レイシガイ**	北海道南部・男鹿半島以南，本州，四国，九州，朝鮮，中国	潮間帯下部	岩礁	図版35/図4
G15	**Thais (Reishia) clavigera (Küster)**	**イボニシ**	北海道南部・男鹿半島以南，日本各地，朝鮮，台湾，中国	潮間帯中部～下部	岩礁	図版35/図5
	Family RAPANINAE	チリメンボラ科				
G16	**Rapana venosa (Valencienns)**	**アカニシ**	北海道西南部以南，日本海，日本各地，台湾，中国沿岸	潮間帯～30	砂泥底	図版34/図8
	Family NASSARIIDAE	オリイレヨフバイ科				
G17	**Reticunassa japonica (Lischke)**	**キヌボラ**	三陸沿岸・能登半島以南，日本各地，朝鮮，台湾，中国北部	潮間帯	細砂底	図版35/図8
G18	**Reticunassa multigranosa (Dunker)**	**ヒメムシロガイ**	北海道以南，日本各地，朝鮮，中国北部	潮間帯～20	岩礫底	図版35/図9
	Family BUCCINIDAE	エゾバイ科				
G19	**Babylonia japonica (Reeve)**	**バイ**	北海道南部・男鹿半島以南，四国，九州までの日本各地，朝鮮半島，中国	潮間帯～30	砂底	図版34/図9
	Family MELONGENIDAE	テングニシ科				
G20	**Hemifusus tuba (Gmelin)**	**テングニシ**	房総半島・男鹿半島以南，四国，九州，インド・西太平洋	10～100	砂底	図版33/図4
G21	Fam., gen. et sp. indet.	腹足類　不明種				図版35/図10

表１－ａ　出雲市上長浜貝塚出土の貝類とその生息分布及び生息環境

	学名	和名	分布	深度（m）	底質	図版
	Subclass PULMONATA	有肺亜綱				
	Order BASOMMATOPHORA	基眼目				
	Family CARYCHIIDAE	ケシガイ科				
P1	**Carychium pessimum Pilsbry**	**ケシガイ**	青森・秋田以南，本州，四国，九州，薩南・奄美・沖縄，朝鮮，台湾		落葉下	図版35/図11
	Order STYLOMMATOPHORA	柄眼目				
	Family SUBULINIDAE	オカクチキレガイ科				
P2	**Allopeas pyrgula (Schmacker & Boettger)**	**ホソオカチョウジガイ**	本州，四国，九州，奄美・沖縄，朝鮮，台湾，中国大陸		人家の庭や原野	図版35/図12
	Family PUNCTIDAE	ナタネガイ科				
P3	**Punctum rota Pilsbry & Hirase**	**クルマナタネガイ**	本州，四国，九州，沖永良部，朝鮮		斜面山麓落葉下	図版35/図13
	Family HELICARICARIONIDAE	ベッコウマイマイ科				
P4	**Parakaliella harimaensis (Pilsbry)**	**ハリマキビ**	本州，四国		山林の落葉下	図版35/図17，24
P5	**Gastrodontella stenogyra (A.Adams)**	**キビガイ**	本州，四国，九州，朝鮮		山麓の落葉下	図版35/図16
P6	**Discoconulus sinapidium (Reinhardt)**	**ヒメベッコウガイ**	本州，四国，九州，朝鮮，台湾		山地の小石混じり腐植土中	図版35/図14
P7	**Urazirochlamys doenitzii (Reinhardt)**	**ウラジロベッコウ**	本州，四国，九州		渓流沿いの落葉や小石下	図版35/図15
	Family ZONITIDAE	コハクガイ科				
P8	**?Hawaiia minuscula (Binney)**	**？ヒメコハクガイ**	北海道以南の日本全国，朝鮮，台湾（原産地；北米．明治時代中期に日本に移入と言われる）			図版35/図18-20
	Family BRADYBAENIDAE	オナジマイマイ科				
P9	**?Aegista (Plectotropis) aemula aemula (Gude)**	**?チクヤケマイマイ**	中国地方・隠岐島以西の本州，四国，九州北部．（模式地は松江市竹矢）			図版35/図21
P10	**Trisphoplita commoda commoda (A.Adams)**	**マメマイマイ**	近畿地方以西の本州，九州北部？			図版35/図23
P11	**?Bradybaena similaris (Ferussac)**	**？オナジマイマイ**	北海道の一部，本州，奄美・沖縄，小笠原（移入種とも言われている）		地上性	図版35/図22
P12	STYLOMMATOPHORA fam.,gen.et sp. indet -A	柄眼目　不明種-A				
P13	STYLOMMATOPHORA fam.,gen.et sp. indet -B	柄眼目　不明種-B				
P14	STYLOMMATOPHORA fam.,gen.et sp. indet -C	柄眼目　不明種-C				
	Class BIVALVIA	二枚貝綱				
	Order ARCOIDA	フネガイ目				
	Family ARCIDAE	フネガイ科				
B1	**Scapharca satowi Dunker**	**サトウガイ**	三陸沿岸・能登半島以南～九州	10～30	砂泥底	図版32/図2
	Family GLYCYMERIDIDAE	タマキガイ科				
B2	**Glycymeris (G.) aspersa (A.Adams & Reeve)**	**タマキガイ**	北海道南部・男鹿半島以南，九州までの各地，朝鮮南部	3～30	砂底	図版32/図1
	Order PTERIOIDA	ウグイスガイ目				
	Family OSTREIDAE	イタボガキ科				
B3	**Crassostrea gigas (Thunberg)**	**マガキ**	日本各地，朝鮮，中国沿岸，東南アジア	低塩度の潮間帯	岩礫底	図版33/図2，3
	Order VENEROIDA	マルスダレガイ目				
	Family TRAPEZIIDAE	フナガタガイ科				
B4	**Trapezium (Neotrapezium) liratum (Reeve)**	**ウネナシトマヤガイ**	津軽・下北半島以南，日本全国，台湾中国南岸	汽水域の潮間帯	岩礫底	図版33/図1
	Family CORBICULIDAE	シジミ科				
B5	**Corbicula (C.) japonica Prime**	**ヤマトシジミ**	北海道以南，九州までの日本全国	汽水域	砂泥底	図版32/図5
	Family VENERIDAE	マルスダレガイ科				
B6	**Gomphina (Macridiscus) aequilatera (Sowerby)**	**オキアサリ（＝コタマガイ）**	北海道南部以南の日本各地，朝鮮南部，中国，東南アジア	潮下部～60	砂底	図版32/図3
B7	**Meretrix lusoria (Roding)**	**ハマグリ**	北海道南部・男鹿半島以南，九州までの日本全国，朝鮮，中国大陸沿岸	内湾の潮間帯～20	砂泥底	図版32/図4

表１－ｂ　出雲市上長浜貝塚出土の貝類とその生息分布及び生息環境

	学名	和名	2層	平安時代末期～中世初頭（12世紀）							
				10層	11層	13層	17層	18層（純貝層）	19層	21層	22層
G1	Cellana toreuma (Reeve)	ヨメガカサガイ									
G2	Patelloida (Collisellina) saccharina lanx (Reeve)	ウノアシガイ									
G3	Cantharidus japonicus (A.Adams)	チグサガイ									
G4	Cantharidus callichroa (Philippi)	ハナチグサガイ									
G5	Turbo (Batillus) cornutus Lightfoot	サザエ	1								
G6	Lunella coronata coreensis (Recluz)	スガイ									
G7	Clithon retropictus (v. Martens)	イシマキガイ	1								3
G8	Littorina (L.) brevicula (Philippi)	タマキビガイ									
G9	Semisulcospira libertina (Gould)	カワニナ									
G10	Kuroshioia cingulifera Sowerby	ヒメキリガイダマシ									
G11	Doxander vittatus japonicus (Reeve)	シドロ									
G12	Glossaulax didyma didyma (Roding)	ツメタガイ									
G13	Turritriton labiosus (Wood)	ヒメミツカドボラ									
G14	Thais (Reishia) bronni (Dunker)	レイシガイ									
G15	Thais (Reishia) clavigera (Kiister)	イボニシ								1	
G16	Rapana venosa (Valencienns)	アカニシ	1?							1	
G17	Reticunassa japonica (Lischke)	キヌボラ									
G18	Reticunassa multigranosa (Dunker)	ヒメムシロガイ									1
G19	Babylonia japonica (Reeve)	バイ								1	
G20	Hemifusus tuba (Gmelin)	テングニシ								1	
G21	GASTROPODA ord.,fam.,gen. et sp. indet.	腹足類　不明種									
P1	Carychium pessimum Pilsbry	ケシガイ				*					*
P2	Allopeas pyrgula (Schmacker & Boettger)	ホソオカチョウジガイ	**			**			*	****	****
P3	Punctum rota Pilsbry & Hirase	クルマナタネガイ	*						*	*	**
P4	Parakaliella harimaensis (Pilsbry)	ハリマキビ				*			*	**	***
P5	Gastrodontella stenogyra (A.Adams)	キビガイ								*	*
P6	Discoconulus sinapidium (Reinhardt)	ヒメベッコウガイ	*			**			*?	***	****
P7	Urazirochlamys doenitzii (Reinhardt)	ウラジロベッコウ							*		**
P8	?Hawaiia minuscula (Binney)	？ヒメコハクガイ	**			**			**	****	****
P9	?Aegista (Plectotropis) aemula aemula (Gude)	?チクヤケマイマイ							*	**	**
P10	Trishoplita commoda commoda (A.Adams)	マメマイマイ									*
P11	?Bradybaena similaris (Ferussac)	？オナジマイマイ	*?								
P12	STYLOMMATOPHORA fam.,gen.et sp. indet -A	柄眼目　不明種-A							*	**	
P13	STYLOMMATOPHORA fam.,gen.et sp. indet -B	柄眼目　不明種-B								*	
P14	STYLOMMATOPHORA fam.,gen.et sp. indet -C	柄眼目　不明種-C							*		
B1	Scapharca satowi Dunker	サトウガイ					1				
B2	Glycymeris (G.) aspersa (A.Adams & Reeve)	タマキガイ			1						
B3	Crassostrea gigas (Thunberg)	マガキ		3（f.elongata）			2			8	42
B4	Trapezium (Neotrapezium) liratum (Reeve)	ウネナシトマヤガイ									5
B5	Corbicula (C.) japonica Prime	ヤマトシジミ	★	★	★	★	★	★	★	★	★
B6	Gomphina (Macridiscus) aequilatera (Sowerby)	オキアサリ（＝コタマガイ）		1			1				
B7	Meretrix lusoria (Roding)	ハマグリ									

有肺類（P1～P14）の個体数については，*；1～9，**；～25，***；～50，****；51～，として示す．また，★はヤマトシジミが全ての層で密集して産することを示し，その他は実数を示す．

表２－ａ　出雲市上長浜貝塚における層別の貝類出土状況

	平安時代末期～中世初頭（12世紀）						平安(10世紀)	奈良時代後半～平安時代初期						
	23層	24層（純貝層）	25層	26層	27層（純貝層）	30層（純貝層）	31層	33層	34層	36層	37層	38層	40層（純貝層）	42層
G1								2？						
G2	1													
G3											1			
G4											1			
G5	1（蓋）							1（蓋）			3（内2蓋）			
G6								1（幼）						
G7	4			1		19		8			14			
G8						2					1			
G9											1			
G10											1？			
G11	1													
G12														
G13											1			
G14						2								
G15	2								1		7			
G16		1	1								2			
G17											1			
G18	1		6					1			2			
G19														
G20											3			
G21	13	4				1								
P1	*			***		*		***			****			**
P2	***		****	**	*	***		***	**	**	****	***		***
P3	**		*					*		*	**			*
P4	***		**		**	***				**	***	*		**
P5	*				****						**	*		*
P6	****		****	****	**	****		****	**	***	****	****		****
P7	**				**	**		**		*	***			
P8	****		****	****	****	****		****	**	***	****	***		****
P9	**		**	*	*	**	*	*			***	*		*
P10	*										*			*
P11											*			
P12											*			
P13	*		*					*			**			*
P14				*		*		*						*
B1	1						1	7			1	4		
B2	1					2		2			3			
B3	22	17	81	6		193	8	171			221	29		
B4														
B5	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★
B6			2	1		26	10	5			50+	10		
B7						2		1			1			

有肺類（P1～P14）の個体数については，*；1～9，**；～25，***；～50，****；51～，として示す．また，★はヤマトシジミが全ての層で密集して産することを示し，その他は実数を示す．

表２－b　出雲市上長浜貝塚における層別の貝類出土状況

図版説明

図版32

図1　*Glycymeris(G.)aspersa*(A.Adams & Reeve)　タマキガイ　住居跡東側崩壊壁面

図2　*Scapharca satoui* Dunker　サトウガイ　G4-38層

図3　*Gomphius(Mactromeris)aequilatera*(Sowerby)　オキアサリ　G3-33層

図4　*Meretrix lusoria*(Röding)　ハマグリ　H4-33層

図5　*Corbicula(Corbicula)japonica* Prime　ヤマトシジミ

図版33

図1　*Trapezium(Neotrapezium)liratum*(Reeve)　ウネナシトマヤガイ　K2-22層

図2　*Crassostrea gigas*(Thunberg)　マガキ　F3-17層

図3　*Crassostrea gigas*(Thunberg)forma *elongata* Amemiya　ナガガキ　K3-10層

図4　*Hemifusus tuba*(Gmelin)　テングニシ　M3-37層

図版34

図1　*Cellana toreuma*(Reeve)　ヨメガカサガイ　K3-33層

図2　*Patelloida(Collisellina)saccharina lanx*(Reeve)　ウノアシガイ　H3-23層

図3　*Turbo(Batillus)cornutus* Lightfoot　サザエ（蓋）　L4-37層

図4　*Cantharidus japonicus*(A.Adams)　チグサガイ　M3-37層

図5　*Cantharidus callichroa*(Philippi)　ハナチグサガイ　M3-37層

図6　*Clithon retropictus*(v.Martens)　イシマキガイ　M2

図7　*Doxander vittatus japonicus*(Reeve)　シドロ　L3-23層

図8　*Rapana venosa*(Valencienns)　アカニシ　L3-25層

図9　*Babylonia japonica*(Reeve)　バイ　K1-21層

図10　*Glossaulax didyma didyma*(Röding)　ツメタガ　M2

図版35

図1　*Lunella coronata coreenses*(Recluz)　スガイ（幼貝）　G2-33層

図2　*Littorina(Littorina)brevicula*(Philippi)　タマキビガイ　K3-30層

図3　*Semisulcospira libertina*(Gould)　カワニナ　L4-37層

図4　*Thais(Reishia)bronni*(Dunker)　レイシガイ　I4-34層

図5　*Thais(Reishia)clavigera*(Kiister)　イボニシ　H3-23層

図6　*Turritrition labiosus*(Wood)　ヒメミツカドボラ　L1-37層

図7　*Kuroshioia cingulifera* Sowerby　ヒメキリガイダマシ　L3-37層

図8　*Reticunassa japonica*(Lischke)　キヌボラ　M3-37層

図 9　*Reticunassa multigranosa*(Dunker)　ヒメムシロガイ　L3-25層

図10　GASTROPODA ord., fam., gen. et sp. indet.　腹足類　不明種　G3-23層

図11　*Carychium pessimum* Pilsbry　ケシガイ　L2-37層

図12　*Allopeas pyrgula*(Schmacker & Boettger)　ホソオカチョウジガイ　L2-37層

図13　*Punctum rota* Pilsbry & Hirase　クルマナタネガイ　L2-37層

図14　*Discoconulus sinapidium*(Reinhardt)　ヒメベッコウガイ　L2-37層

図15　*Urazirochlamys doenitzii*(Reinhardt)　ウラジロベッコウ　L2-37層

図16　*Gastrodontella stenogyra*(A.Adams)　キビガイ　L2-37層

図17, 24　*Parakaliella harimaensis*(Pilsbry)　ハリマキビ　L2-37層

図18-20　*?Hawaiia minuscula*(Binney)　？ヒメコハクガイ　L2-37層

図21　*?Aegista(Plectotropis)aemula aemula*(Gude)　？チクヤケマイマイ　L1-23層

図22　*?Bradybaena similaris*(Ferussac)　？オナジマイマイ　L2-23層

図23　*Trishoplita commoda*(A.Adams)　マメマイマイ　G3-23層

6．上長浜貝塚出土の脊椎動物遺存体

奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター　松井　章
京都大学大学院 人間・環境学研究科 日本学術振興会特別研究員　宮路　淳子

1．概要

本資料は、発掘時に採取したものと、発掘終了後に貝塚土壌を持ち帰って室内で１ミリの篩いで貝層を水洗したものの中から肉眼で選別したものを含む。タイ科の遊離歯、棘、小型魚類、ヘビ類の椎骨などはほとんど篩いを使った選別資料から採取できたものである。

筆者らは上長浜貝塚から出土した動物遺存体のうち、貝類を除いた魚類、両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類の分析を担当した。

軟骨魚類は科、属が不明のエイ、サメ類が出土した。硬骨魚類では、スズキ、マハタ科の一種、ヘダイ、マダイ、クロダイ属の一種、ブリ、イサキ、コショウダイ属の一種、ニベ科の一種、ボラ、サバ科の一種、ソウダガツオ属の一種、フサカサゴ科の一種、コチ、コチ科の一種、ギマ、フグ科の一種、ヒメエソ科の一種、ニシン科の一種（マイワシ近似）、コイ科の一種、フナ属の一種、ウグイ属の一種、ナマズなどが同定できた。両生類ではカエル目の一種、爬虫類ではヘビ亜目の一種が出土しており、鳥類では、ガンカモ科の一種、オシドリ、ハクチョウ、ウミネコ、ウ科の一種が出土している。哺乳類ではニホンザル、ノウサギ、イヌ、タヌキ、キツネ、イタチ、ネズミ科の一種、モグラ科の一種、イノシシ、ニホンジカ、ウシ、ウマであった。ただしウシには、機械ノコギリで挽いた痕跡が残っており、後世のものであることが明白なので出土種名表から除外した。

これらの動物遺存体は、奈良時代後期（８ｃ.後半）から平安時代末（12ｃ.後半）までの貝層から出土したもので、古代から中世にかけての、日本海沿岸地域における漁撈民の生活の実態を知る上で、貴重な資料であるといえる。以下に種類毎の特徴を記し、考察を加えたい。

2．出土した動物遺存体

魚類

軟骨魚類

第37層からは、正三角形に近いメジロザメ相当の歯２点と、鋭く尖るアオザメ相当の歯６点の２種類の歯が出土している。試掘トレンチ（サブトレ）および崩落土からも大型のサメ類の歯が出土しているが量は多くない。また、大型のサメ類に相当する椎骨の出土も全くみられなかった。大型のサメ類はこの貝塚には決して多くは投棄されなかったことであろう。

エイ目の一種としたのは、軟骨魚類の特徴を持つ円筒形の椎骨のなかでも特に小型のものである。海浜部の遺跡から出土する例の多いアカエイ属、トビエイ属に特徴的な毒のある尾棘や、歯板などは出土していない。

硬骨魚類

クロダイ属の一種

最も出土量が多かったのはクロダイ属である。日本海側近海にはキチヌ（*Acanthopagrus latus*）とクロダイ（A.*schlegeli*）が生息し、部分骨では区別が困難であるが、現在の漁獲量からみてクロダ

脊椎動物門　PHYLUM VERTEBRATA

軟骨魚類綱　CLASS CHONDRICHTHYES
　板鰓亜綱　Subclass Elasmobranchii
　エイ目の一種　Order *Rajiformes*
　　Fam. et gen. indet.
　メジロザメ目　Order Carcharhiniformes
　　メジロザメ科　Family Carcharhinidae
　　メジロザメ属の一種
　　Gen. *Carcharhinus* sp. indet
　ネズミザメ目　Order Lamniformes
　　ネズミザメ科　Family Lamnidae
　　アオザメ属の一種　Gen. *Isurus* sp. indet
硬骨魚類綱　CLASS OSTEICHTHYES
　条鰭亜綱　Subclass Actinopterygii
　スズキ目　Order Perciformes
　　スズキ科　Family Percichthyidae
　　スズキ　*Lateolabrax japonicus*
　ハタ科　Family Serranidae
　　マハタ属の一種　Gen.*Epinephelus* sp.indet
　　タイ科　Family Sparidae
　　ヘダイ　*Sparus sarba*
　　マダイ　*Pagrus major*
　　クロダイ属の一種
　　Gen.*Acanthopagrus* sp. indet.
　　タイ科の一種
　　Family Sparidae gen. et sp.indet
　アマダイ科　Family Branchiostegidae
　　アマダイ属の一種
　　Gen.*Branchiostegus* sp. indet.
　アジ科の一種　Family Carangidae
　　属、種不明 gen. et sp. indet
　　ブリ　*Seriola quinqueradiata*
　　イサキ科　Family Haemulidae
　　イサキ　*Parapristipoma trilineatum*
　　コショウダイ属の一種
　　Gen.*Plectorhinchus* sp. indet.
　　ニベ科の一種
　　Family Sciaenidae gen. et sp.indet
　　ボラ科　Family Mugilidae
　　ボラ　*Mugilcephalus cephalus*
　　サバ科　Family Scombridae
　　ソウダガツオ属の一種
　　Gen.*Auxis* sp. indet
　カサゴ目　Order Scorpaaeniiformes
　　フサカサゴ科　Family Scorpaaenidae
　　属、種不明
　　コチ科　Family Platycephalidae
　　コチ　*Platycephalus indicus*
　　コチ科の一種
　　Family Platycephalidae gen. et sp. indet
　フグ目　Tetraodontiformes
　　ギマ科　Family Triacanthidae
　　ギマ　*Triacanthus biaculeatus*
　　フグ科の一種
　　Family Tetraodoontidae gen. et sp.indet
　ヒメ目　Order Aulopifformes
　　ヒメ科の一種　Family Aulopoidae
　　gen. et sp. indet.
　　エソ科の一種　Family Synodontidae
　　gen. et sp. indet
　ニシン目　Order Clupeiformes
　　ニシン科の一種　Family Clupeiformes
　　属、種不明
　コイ目　Order Cyprinuformes
　　コイ科　Family Cyprinidae
　　フナ属の一種　Gen.*Carassius* sp. indet
　　ウグイ属の一種　Gen. *Tribolodon* sp. indet
　ナマズ目　Order Siluriformes
　　ナマズ科　Family Siluridae
　　ナマズ　*Silurus asotus* Linnaeus
両生綱　CLASS AMPHIBIA
　カエル目の一種　Order Salientia
　　科、属不明　Fam. et gen. indet.
爬虫綱　CLASS RREPTILIA
　有鱗目　Order Squamata
　　ヘビ亜目の一種　Suborder Serpentes
　　科、属不明　Fam. et gen. indet.
鳥綱　CLASS AVES
　雁鴨目　Order Anseres
　　ガン・カモ科の一種　FamilyAnatidae
　　gen. et sp. indet
　　オシドリ　*Aix galericulata*
　　ハクチョウ　*Cygnus columbianus*
　カモメ目
　　カモメ科
　　ウミネコ　*Larus crassirostris*
　全蹼目
　　ウ属の一種 Gen. *Phalacrocorax* sp. indet.
哺乳綱　CLASS MAMMALIA
　霊長目　Order Promates
　　オナガザル科　Family Cercopithecidae
　　ニホンザル　*Macaca fuscata*
　ウサギ目　Order Lagomorpha
　　ウサギ科　Family Leporidae
　　ノウサギ　*Lepus brachyurus*
　食肉目　Order Carnivora
　　イヌ科　Family Canidae
　　イヌ　*Canis familiaris*
　　タヌキ　*Nyctereutes procyonoides*
　　キツネ　*Vulpes vnlpes*
　　イタチ科　Family Mustelidae
　　イタチ　*Mustela sibirica*
　げっ歯目　Order Rodentia
　　ネズミ科の一種　Family Muridae
　　gen. et sp. indet
　　属、種不明
　食虫目　Order Insectivora
　　モグラ科の一種　Family Talpidae
　　gen.et sp. indet
　偶蹄目　Order Artiodactyla
　　イノシシ科　Family Suidae
　　イノシシ　*Sus scrofa*
　　シカ科　Family Ceruidae
　　ニホンジカ　*Cervus nippon*

イが大部分を占めると考えられる。なかでも歯骨、前上顎骨、主上顎骨、角骨、方骨の出土が多い。出土した資料には、稚魚から、成魚に至るまでさまざまなクラスがあるが、前位部歯骨高をみると9.5～11.5ミリに分布し、手持ちの現生比較標本の体長25～30センチ前後に相当する個体が多い（図1）。クロダイは、主に内湾の浅海の泥底や砂泥底域に生息する種類であるが、汽水域から淡水域に侵入してくることも多く、同じような立地の他の西日本の遺跡でも出土量が多い。

マダイ

瀬戸内海地域の代表的な中世の都市遺跡である、広島県福山市の草戸千軒町遺跡では最も多い出土量を示す種類であるが（松井　1994）、日本海側に位置する本貝塚からの出土量は決して多くない。マダイは沿岸の水深20～200メートルの岩礁域や砂礫底に生息する種類であり、本貝塚からの出土例が少ないのは、砂丘を隔てた日本海側にマダイが生息する岩礁性の海底が少ないことと関連するかも知れない。

ヘダイ

前上顎、歯骨とも奥の歯が特に大きく、他のタイ科魚類と区別できる。ヘダイは沿岸の岩礁域に多く生息し、時に内湾にも入る種類である。量は決して多くないが、西日本の遺跡では縄文貝塚などで普通に見られる魚種である。

アマダイ属の一種

キアマダイ、アカアマダイ、シロアマダイとがあるが出土標本からはいずれとも決しがたい。西日本の貝塚からは少量ながら出土している。

スズキ

クロダイ属に続いて出土量の多かった種類である。歯骨、前上顎骨、主上顎骨、主鰓蓋骨などの各部位が出土している。特に、歯骨、主鰓蓋骨に種の特徴がよくあらわれ、同定されやすい。大きさは、前位部歯骨高で3.5～10.5ミリが多く、これは体長20～30センチ前後の２～３年魚のセイゴクラス相当のものが多く捕獲されたことを示している（図２）。

ブリ

対馬海流にのって冬季に北上するブリは、日本海を代表する魚種であるが、出土量は非常に少ない。

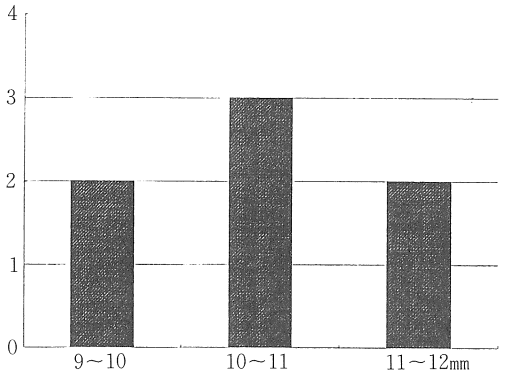


図１　クロダイ歯骨高分布

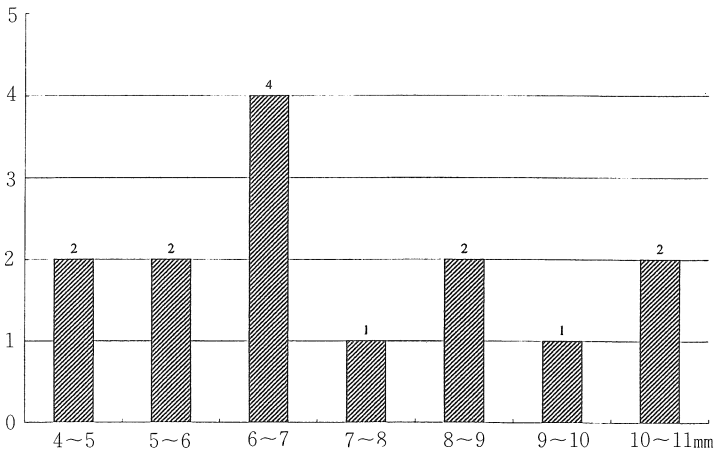


図２　スズキ歯骨高分布

イサキ

イサキは沿岸のやや深い海藻の多い海底にいて、夜間浮上し摂食する種類である。本貝塚からの出土例は多くない。

コショウダイ属の一種

コショウダイ属、あるいはコロダイ属に類似する前上顎骨が目に付く。沿岸の岩礁域に多く生息するが、幼魚は内湾にも入る種類である。この魚種は、西日本の貝塚では量は少ないが普通に見られる魚種である。

ボラ

ボラもクロダイ、スズキと同様に汽水域に入ってきて、しばしば水面近くに多く群れる。丸みのある主鰓蓋骨が出土している。『出雲国風土記』には「鰡（なよし）」として記載されている。

フグ科の一種

大型のフグの出土は少なくない。歯骨としたのは前上顎骨と歯骨とを合計したもので、なかには両部位の区別ができるものもあるが、ここでは一括した。出土した歯骨には、大きな個体から小さな個体までさまざまなサイズが存在する。

コイ科の一種

主鰓蓋骨の破片、背鰭棘、臀鰭棘の破片、大型の咽頭骨の破片が見られる。ここに含めたのは完形の部位がないので、同定出来なかったもので、ウグイ属、フナ属の可能性を含む。環椎、第２、第３椎骨などコイ科の特徴を持つ部位もかなり出土しているが、属、種の同定は出来なかった。淡水魚で河川の中流、湖、沼に生息する。

フナ属の一種

噛み合わせ面が平坦で細長い咽頭歯、主鰓蓋骨などが出土している。骨質が脆弱なこともあって出土量は多くない。

ウグイ属の一種

先端が細く尖るウグイ属特有の咽頭歯と咽頭骨が出土している。量は多くない。

ナマズ

胸鰭棘が出土している。その他の歯骨、前上顎骨、擬鎖骨などナマズの特徴のある部分は見られない。

コチ、コチ科の一種

コチ科の特徴のある歯骨、前鰓蓋骨が比較的多く出土している。コチ以外の小型のコチ科の別種も存在する。コチは水深100メートル以浅の砂泥底に生息し、初夏には浅海の砂場で産卵する。

その他の出土量の少ない魚類として、サバ科の一種、ソウダガツオ属の一種、フサカサゴ科の一種、エソ科の一種、ニシン科の一種（マイワシ近似）など、多種にわたる魚類が出土している。

両生類、爬虫類

カエル類の四肢骨、ヘビ類の椎骨が出土している。ヘビの椎骨は、21層で15個、30層で31個とかたまって出土する傾向がある。このように椎骨が一かたまりになって、しかも頭骨を欠いて出土していることから、人々の食用になった可能性を指摘できる。

鳥類

ガンカモ科の数種類の鳥類、ウミネコ、ウミウなどが出土している。現代でも神西湖、宍道湖、中海には多くの渡り鳥が飛来してくる。古代の神門水海にも、さらに多くの渡り鳥が飛来したと推測できる。鳥類はイヌの餌になるためか、一般的に遺跡からの出土は多くない。本遺跡においても、出土する層位は第23、30、33層に集中する傾向が強い。『出雲国風土記』には「白鵠（くぐひ）」（オオハクチョウ）・「鴻雁（かり）」（マガン類）・「鳧（けり）」（ヤマゲリ）・「鴨」（カモ）・「鴛鴦（おし）」（オシドリ）の５種の水鳥が記載されている（水野　1965）。

哺乳類

ニホンジカ

全体の量は少ないが、第23、33、37層から各部位の骨の出土が集中することは、魚類の出土の傾向と同様である。第33層からの加工痕跡のある鹿角の出土は、この集落で骨角器の生産を行っていたことを示す。古代においてもシカは代表的な狩猟獣で、シカ肉は腊（きたい）などにして出荷されたものであろう。

イノシシ

ニホンジカに比べるとはるかに出土量が少ない。臼歯、切歯、指骨などが出土しているだけである。本貝塚の人々は積極的にイノシシを狩猟したとは考えられない。

イヌ

出土量は少ないが、出土したニホンジカ、イノシシ、大型のクロダイ、スズキの骨の表面にイヌの噛み跡がみられるので、本貝塚では多くのイヌが飼われていたと考えられる。

その他の哺乳類

ニホンザル、ノウサギ、タヌキ、キツネ、イタチなどが出土しているが、量は少ない。他にネズミ科、モグラ科の下顎骨、四肢骨も出土している。これらはいずれも１ミリの篩いで採集されていた微細な骨なので、散乱状態で貝層中に遺存していたことは確実である。しかし、これらが人々の食用となったものか、貝塚部を徘徊していたイヌの食べ残したものかの判断は困難である。

３．考　　察

動物遺存体が多く出土したのは、第23（黒褐色混土貝層、平安時代末－12ｃ.後半）、25（黒褐色混貝土層、平安時代末－12ｃ.後半）、30（純貝層、平安時代末－12ｃ.後半）、33（褐色混貝土層、奈良時代後期～平安時代初頭－８ｃ.後半）、37（褐色混土貝層、奈良時代後期～平安時代初頭－８ｃ.後半）層などである。これらの層準は、純貝層の第30層を除けば混土貝層、混貝土層で、純貝層には動物遺存体が少ないという傾向が顕著である。これは、縄文貝塚一般にも共通する特徴で、見た目には他の貝層と同じような厚さに見えるが、純貝層は短時間（単一のシーズン、１年から数年？）のうちに堆積したのに対して、混土貝層、混貝土層は比較的長い期間（数年から10数年？）にわたって形成された結果、さまざまな遺物が含まれるに至った考えられる。縄文貝塚からの出土例と比較すると、本貝塚では貝の採捕はより短期間に行われ、それらの貝を大量に処理し、煮沸し、塩を加えて干貝を生産していたのではないかと考えることができる。貝の投棄が少ない期間や地点には、貝層のうえで様々な人間の活動が行われ、魚骨や獣骨、製塩土器、土錘などさまざまな残滓が捨てられた結果、混

土貝層、混貝土層に遺物が多くなったと考えられる。中世初頭の第22層より上層に行くに従って獣魚骨の種類、出土量が貝類とともに減少していることから、この時期にこれまで主要な生産の場であった神門水海が縮小し、貝の採捕、漁撈の場も狭くなり、漁撈活動が低調になっていったことを示しているとも考えられる。この貝塚は第37層から第22層にかけて、特に奈良時代後半期と平安時代末期頃に最も活発に生産活動を行い、純貝層－混土貝層－混貝土層のサイクルを形成しているといえる。

本貝塚で最も出土量の多かったクロダイの産卵期は３～７月で、沿岸の浅所で卵を産む。クロダイは満１年で体長約12センチ、２年で19センチ、３年で23センチ、４年で28センチに達する。本貝塚から出土しているのは、主に満４年前後の成魚である。『出雲国風土記』には「鎮仁（ちぬ）」と記載されている。クロダイ属に続いて出土量の多かったスズキは、冬季に外海に面したやや深所で産卵し、稚魚は３～４月頃内湾へ移動する魚種である。６～７月頃体長が10センチ前後になると内湾や汽水域あるいは河川にも入るようになる。水温が下降し始める９月頃には１歳魚の多くは沿岸の深所に移動する。そこで越冬した１歳魚は再び４～５月頃内湾へ入り込んでくる。スズキは原則として、終生このような規則正しい季節的移動を繰り返す種類である。こうした習性から、本遺跡から出土している多くは、春から夏にかけての季節に捕獲されたものと推測することができる。スズキは、『出雲国風土記』には「須受枳（すずき）」と記され、神門郡の産物とされている。また藤原宮跡からは、出雲地域からスズキの煮魚が大贄（おおにえ）として送られたことを示す木簡が出土している。

フグ科の出土量も多い。フグ類の多くの種が強い毒をもつにもかかわらず、日本ではフグは重要な食用魚であった。それは、フグは捕獲する地域や季節によってその毒の有無や強さに大きな違いがあるため、それを熟知していれば食用にすることもできたからだと考えられる。主要漁場は、沿岸地域から沖合いの砂泥地や砂地である。『出雲国風土記』にも「朝鮒（ふぐ）」と記載されており、食用に供されていたことがわかる。金子浩昌は縄文時代の島根県崎が鼻洞窟から出土した魚類遺存体を分析し、本貝塚で出土した種の他に、さらにカンダイの種名をあげている（金子　1963）。これは、カンダイが特に岩礁性の海岸に生息することから、本貝塚の周囲にはそうした岩浜が発達していなかったのでカンダイがみられないと考えられる。

漁撈の場は、出土したクロダイ、スズキ、ボラに示される神門水海の汽水域と、マダイ、コショウダイ属、ハタ科，サメ類などの沖合いの岩礁性の海底や表層近く、コチなどの砂質の浅い岸近くなどの鹹水部、ウグイ、フナ、ナマズなどの淡水域の３つに求められ、もっとも大きな漁場となっていたのは、ヤマトシジミの採捕域と同じ汽水域であったと考えられる。ウグイ、フナなどのコイ科の淡水魚は、マイワシ、アジ、サバなどと同様、骨が脆弱であり容易にイヌの餌になるので、実際に捕獲されたよりも出土した量は少ないと考えられる。

近年、古代、中世の非農耕民に対する興味が歴史学において高まりつつある。それは、米に象徴される経済にあって、漁撈、狩猟などに関する記録はきわめてわずかであり、これまであまりかえりみられてこなかったためである。しかし本貝塚での分析結果からは、古代から中世にかけての水田に適した地を周囲に持たない上長浜の人々は、季節毎にヤマトシジミの採捕とクロダイ、スズキ、ボラなどの漁撈、ニホンジカ、イノシシの狩猟に従事し、製塩や、製塩のためか食料としてか、海藻の採捕にも従事する生活をしていたことが明らかになった。特筆できることは、本貝塚から、ウシ、ウマの

骨がごくわずかであることである。ウシ、ウマは、5世紀後半から全国各地にひろがり、古代、中世では各地の遺跡からの出土例も多いが、本貝塚からの出土は極めて少ない。これは、本貝塚の人々が狩猟で得た野生動物の解体その他の処理は行うが、斃牛馬の処理にはかかわっていなかったことを示し、動物とかかわる人々の中でも、野生動物と家畜とではその処理に従事する集団が異なっていたことをうかがわせる。実際、筆者らは千葉県多古町南借当遺跡、君津市郡遺跡などで、古代・中世の斃牛馬処理の遺跡の報告を行った結果、ウシ、ウマのような家畜の処理は、独自の生業として水に恵まれた河原などで行われたことが多かったことを推測している。

このように、本貝塚から出土した動物遺存体から、古代から中世にかけての海浜部の漁撈民の活動の実態とその変容を知ることができた。この地域には『出雲国風土記』が残されており、そのなかに記載されている平城宮に献上された魚類や、また藤原宮跡で発見された木簡に記された魚類などをこうして実際に考古資料として明確に確認できたことは、この地域のみならず、広く日本列島全体の古代・中世史のなかに新しい史料を提供することとなり、非常に貴重な成果であると考える。

＊魚類の学名は主として中坊（1993）による。

引用・参考文献

蒲原稔治1961『続原色日本魚類図鑑』保育社。

能勢幸雄・羽生功・岩井保・清水誠編 1989『魚の事典』東京堂出版。

中坊徹次編 1993『日本産魚類検索－全種の同定－』東海大学出版会。

樋泉岳二 1994「魚類同定の手引き（1）」『動物考古学』第2号　動物考古学研究会。pp.23-38

樋泉岳二 1995「魚類同定の手引き（2）」『動物考古学』第5号　動物考古学研究会。pp.11-38

水野　祐 1965『出雲国風土記論攷』早稲田大学古代史研究会。

門脇禎二 1987『検証古代の出雲』学習研究社。

森　公章 1994「出雲国の木簡」『古代の日本』角川書店。pp177-178

金子浩昌 1963「美保湾・中ノ海の石器時代漁撈－島根県崎が鼻洞窟出土の魚類骨」『考古学研究』第10巻第1号　考古学研究会。pp.38-41

松井　章 1991「南借当遺跡出土の動物遺存体」『多古町南借当遺跡』千葉県埋蔵文化財センター。pp.130-142

松井　章・宮路淳子 1996（印刷中）「郡遺跡出土の動物遺存体について」『郡遺跡』君津郡市埋蔵文化財センター。

謝辞

イサキ、ソウダガツオ属、コショウダイ属などの同定、記載にあたっては、㈶大阪市文化財協会の久保和士氏の御協力によることをここに明記し、謝辞とする。

層序	クロダイ														
	主上顎		前上顎		角骨		歯骨		主鰓蓋		方骨		上後頭骨	前頭骨	鋤骨
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R			
2	1			2				2							
5															
7															
8															
10															
13			1	1	1		1								
16							1								
17			1												
18			1	2			1								
19			4					1							
21	1		11	6	1		6	5			2	3			
22	2		2			1		2		1	1				
23	1	8	41	26	3	7	11	13	1	3	5	4			
24			2	2			1					1			
25		1	4	2	2	1	5	1				3			
26															
27															
28											1				
29															
30		3	4	8	2	2	8	6	1		1				2
31			2	1											
32															
33	4	1	13	19		3	14	6	1			2			
34															
35															
36															
37	7	3	10	16	5	3	15	9		1	1	1			
38					1		1								
40															
42			1	2			1.5	1.5	1						
44															
45				3			3								
46															
計	16	16	97	90	15	17	68.5	46.5	4	5	11	14	0	0	2

層序	マダイ													
	主上顎		前上顎		角骨		歯骨		主鰓蓋		方骨		上後頭骨	前頭骨
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R		
2														2
5														
7														
8														
10														
13														
16														
17														
18														
19														
21														
22														
23	1				1									
24														
25											1	1	1	
26														
27														
28														
29														
30				2							2	1		
31														
32														
33		2		2		1	2			1	1	1	1	4
34					1									
35														
36														
37	2	1	2	2	1		3		1		6	3		1
38														
40														
42				1		1					1	2	1	
44														
45														
46														
計	3	3	2	7	3	2	5	0	1	1	11	8	3	7

層序	ハタ科								ナマズ				ボラ				フグ
	主上顎		前上顎		方骨		歯骨		胸鰭棘		前上顎		主鰓蓋骨		方骨		歯板
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	
2													1	1			
5																	
7																	
8																	
10																	
13																	
16																	
17																	
18																	1
19																	2
21		1				1			2.5	1.5							
22										1							
23				1					9	10							32
24										3							
25									1	1			1				
26																	
27																	
28																	3
29																	
30									1	2			2	3			62
31																	8
32																	
33		1	1	1					0.5	2.5			1				10
34																	
35																	
36																	
37			3							1			1.5	2.5			2
38																	1
40																	
42														1			
44																	
45																	1
46																	
計	0	2	4	2	0	1	0	0	14	22	0	0	6.5	7.5	0	0	122

左右不明は0.5として左右に振り分けている。

層序	コチ									フサカサゴ科					
	歯骨		前上顎骨		主上顎骨		前鰓蓋骨		椎骨	前上顎骨		主上顎骨		歯骨	
	L	R	L	R	L	R	L	R		L	R	L	R	L	R
2		1													
5															
7															
8															
10															
13								1							
16															
17															
18															
19															
21	3	3		1		2	3	1	2						
22			1												
23	5	5			3	1	1	3							
24		1			1		1								
25	1	3			2	2	1	2							
26															
27															
28															
29															
30	5	4								1					
31															
32															
33				1									2		
34					1										
35															
36															
37	1	2					2	2	1	1		1			
38		1													
40															
42															
44															
45															
46															
計	15	20	1	2	7	5	8	9	3	2	0	1	2	0	0

層序	そ　の　他
2	サバ型椎骨３
5	
7	
8	不明主鰓蓋１
10	
13	
16	
17	
18	フグ類歯板１
19	
21	コイ科鰭棘２；咽頭骨左１；歯骨右；ヘダイ前上顎右１；サバ型椎骨３；エイサメ類椎骨３；イワシ類椎骨１；不明方骨１；不明主鰓蓋骨１；不明前上顎骨１
22	アジ型椎骨１
23	エイサメ類椎骨21；コイ科鰭棘３；フナ咽頭歯１；ウグイ咽頭骨左１、右２；サバ型椎骨14；イワシ類椎骨２；フグ歯板30
	コショウダイ主上顎右１；タイ科主上顎右１；不明主上顎左２
24	コショウダイ主上顎右１；コイ科鰭棘１；イワシ類椎骨１；サバ型椎骨４；不明方骨右１
25	エイサメ類椎骨５；不明角骨右１；コショウダイ方骨左１；コイ科鰭棘２、主鰓蓋骨３；不明鋤骨１
26	イワシ類椎骨１；不明前上顎左１
27	
28	
29	
30	コイ科鰭棘２；ウグイ咽頭骨右１；フグ類歯板６；エイサメ類椎骨１；サバ型椎骨５；イワシ型椎骨２；ヘダイ歯骨左１；ヘダイ歯１；タイ科角骨１
31	エイサメ類椎骨１；フグ類歯板８
32	
33	エイサメ類椎骨７；ヘイダイ前上顎右１；アマダイ属前上顎左１；フグ類歯板52；不明歯骨左１；不明主上顎１；不明前鰓蓋１；不明主鰓蓋１；エソ類歯骨右１；コイ科咽頭骨１；サバ型椎骨２；コショウダイ前上顎左２
34	角骨右１；フグ類歯板２
35	フグ類歯板１；サバ型椎骨３
36	フグ歯板５
37	フグ歯板55；ヘダイ歯骨右２、前上顎左１、ヘダイ歯骨左１、歯１；エイサメ類椎骨37；イワシ類椎骨11；コショウダイ方骨右１、前上顎左１、右２、左２；コイ科鰭棘１、歯骨左１、咽頭骨右１；サメ類歯８；サバ型椎骨１；不明前上顎左１
38	コショウダイ前上顎右１；サバ型椎骨３；不明主上顎１
40	
42	フグ類歯板３；コイ科鰭棘１
44	
45	
46	

層序	ニホンジカ	イノシシ	その他
2			
5			
7			
8	橈骨左体部；		シカ／イノシシ肋骨；
10			
13			
16			
17			
18			
19	踵骨左；	中筋骨；	
21	舟状骨左；中筋骨；下顎骨左（幼）足根骨左；橈骨左遠位端２；シカ前臼歯１；足根骨；基筋骨２；椎骨１；	第４足根骨左；	ノウサギ橈骨右遠位端；イタチ？犬歯上１、下１；不明小哺乳類橈骨２；大腿骨右１；ヘビ椎骨15；鳥類椎骨１；カモ類大腿骨左；鳥類尺骨１；
22	鹿角１；		鳥類脛骨２；齧歯類切歯１；ヘビ類椎骨２；
23	肩甲骨右１；中手／中足骨左遠位端１；橈骨右遠位端１；橈側主根骨左１；		ニホンザル犬歯１；タヌキ下顎骨右１；齧歯類切歯５；ヘビ類椎骨３；ネズミ？大腿骨遠位端１；ウミネコ上腕骨左遠位端１、上腕骨右１；ウミウ大腿骨左遠位端１；鳥類脛骨１；鳥類上腕骨１；鳥類大腿骨１；鳥類（オシドリ？）烏口骨左１；鳥類指骨３；鳥類椎骨１、鎖骨１、椎骨１；オシドリ烏口骨左１、右２；鳥類尺骨２；
24			鳥類椎骨１；
25	踵骨左１；中手／中足骨左１；		ノウサギ肩甲骨左１；鳥類烏口骨右１、脛骨左１、；小哺乳類歯２、下顎骨１；
26	踵骨右１、基節骨１	切歯１	タヌキ後頭骨１；鳥類椎骨１；齧歯類下顎骨左１；
27			
28			
29			
30	鹿角１、	臼歯１、	シカ／イノシシ肋骨；キツネ肩甲骨左１；鳥類尺骨１、橈骨１；小動物下顎骨右１；齧歯類切歯１；ヘビ類椎骨31；
31			シカ／イノシシ四肢骨体部１；イヌ大腿骨左体部２；
32			
33	鹿角４（加工品１）、中足骨右近位端１、手根骨２＋３右１、仙椎左１、大腿骨右体部１	腸骨右１、	シカ／イノシシ椎骨（切り傷）１、四肢骨片18、指骨１；ハクチョウ／ガン？手根中手骨右遠位端１；ネズミ類下顎骨左１、大腿骨左（幼）１、橈骨右１；モグラ？；カモ類烏口骨右１；カエル類四肢骨１；
34			
35			タヌキ犬歯２；
36			
37	中足骨左近位端１、左右不明１、脛骨右１、橈側手根骨右１、大腿骨左１、右１、体部（幼）、中手骨左体部１、基節骨１、下顎骨左２、中足骨左右不明１、大腿骨左１、鹿角３、	臼歯上１	シカ／イノシシ肋骨１、膝蓋骨１、腸骨左１、肋骨１、四肢骨１；ノウサギ大腿骨右遠位端１、近位端１；ヘビ類椎骨２；
38			シカ／イノシシ肋骨１、中手／中足骨１；齧歯類上腕骨右１；
40			シカ／イノシシ四肢骨片１
42			齧歯類切歯１；
44	中足骨１、		
45			
46			シカ／イノシシ四肢骨４；

図版36

1～27スズキ　28～37マダイ

1～12・27　スズキ主鰓蓋骨

13・14　スズキ主上顎骨

15～19　スズキ前上顎骨

20～26　スズキ歯骨

28　マダイ主鰓蓋骨

29～31　マダイ方骨

32　マダイ角骨

33・36・37　マダイ前上顎骨

34・35　マダイ主上顎骨

図版37　クロダイ

1～24　クロダイ前上顎骨

25～35　クロダイ主上顎骨

36～47　クロダイ歯骨

48～51　クロダイ角骨

52・53　クロダイ主鰓蓋

図版38　フグ

1～50　フグ歯板

図版39　その他魚類

1　ハタ科方骨

2～4　ハタ科前上顎骨

5～14　コショウダイ前上顎骨

15　ヘダイ角骨

16・17　ヘダイ前上顎骨

18～20　ヘダイ歯骨

21・22　ナマズ胸鰭棘

23　コショウダイ主上顎骨

24　クロダイ歯骨

25　コチ主上顎骨

26・28　コチ歯骨

27　コチ前上顎骨

29・30　コチ前鰓蓋

31　コチ椎骨

32～35　ボラ主鰓蓋骨

36　マダイ前頭骨

37　カツオ椎骨

38　マダイ上後頭骨

39　マダイ前頭骨

40　サメ椎骨

41・42　メジロザメ属歯

43～47　アオザメ属歯

図版40　哺乳類

1　ニホンジカ基節骨

2　ニホンジカ肩甲骨

3～5　ニホンジカ鹿角

6　ウマ臼歯

7　イノシシ切歯

8　ニホンジカ臼歯下

9　ウシ臼歯下

10　ニホンジカ第3後臼歯

11　ニホンジカ臼歯上

12　イノシシ中間手根骨

13　ニホンジカ踵骨

14　イノシシ尺側手根骨

15　イノシシ犬歯

16　イノシシ中節骨

17　ニホンジカ尺側手根骨

18　ニホンジカ基節骨

19～23　ニホンジカ中手・中足骨

24　ニホンジカ／イノシシ四肢骨

25　カモ類烏口骨

26　ウシ椎骨

27・28　シカ／イノシシ椎骨

29　ニホンジカ大腿骨

30　イノシシ腸骨

31　ニホンジカ橈骨

図版41

1　イサキ方骨

2・8　イサキ主上顎骨

3　イサキ主上顎骨

4　フサカサゴ前上顎

5　ブリ属歯骨

6　ソウダガツオ属尾部棒状骨

7　ウグイ咽頭歯

9　ニベ科前上顎骨

10　ニベ科主上顎骨

11　ニベ科

12　イサキ方骨

13～16　ニシン科椎骨

17～19　齧歯類切歯

20　齧歯類下顎骨

21　齧歯類臼歯

22　齧歯類下顎骨

図版42

1～4　ヘビ類椎骨

5　鳥類尺骨

6　不明哺乳類下顎骨

7　ウミネコ上腕骨

8　オシドリ烏口骨

9　ネズミ大腿骨

10　モグラ尺骨

11　ネズミ上腕骨

12・13　ノウギ大腿骨

14　ウミウ大腿骨

15　モグラ科下顎骨

まとめ

縄文時代早期末から中世初期の複合遺跡である上長浜貝塚は、時期的に4期に区分することができる。Ⅰ期は縄文時代早期末から前期初頭、Ⅱ期は弥生時代後期から古墳時代、Ⅲ期は奈良時代後半から平安時代末期までの貝塚形成期、Ⅳ期は平安時代末期の貝塚以後で、それぞれの時期において貴重な知見が得られている。特に、この遺跡の中心は、古代から中世初期にわたって形成された歴史時代の貝塚であり、貝塚から出土したさまざまな遺物は、漁撈に生きた村の実態を語りかけている。

上長浜Ⅰ期

縄文時代早期末から前期初頭で、繊維土器や轟B式土器が出土している。県内でのこの時期の遺跡分布をみると、遺跡数は少ないが、海岸部の遺跡が多くなってくる。当時は大きな内湾が東西に広がっていたが、上長浜貝塚の対岸に位置する菱根遺跡からは、魚骨（フグ、タイ）、獣骨（イノシシ、シカ、タヌキなど）、植物遺存体（マテバシイ、ヤマモモなど）とともに、土器、石製品（石鏃、石錐など）や骨角器も出土している。春の草木の萌え出ずるころには、山で山菜を採り、海辺では貝採りも始まる。夏は湾内外での魚捕り、秋は山野でのシイ、ドングリなど、冬を乗り切る保存食の確保、冬にはシカ、イノシシ、渡り鳥の狩猟など、年間を通して満足すべき食生活が営まれていたことが推定される[注40]。上長浜貝塚からは、調査の限りでは、土器と石器しか出土していないが、石鏃も多く出土し、石錐も含まれる。遺跡をとりまく自然環境も、上長浜貝塚とほぼ同じであり、菱根遺跡でみられたような生活が推察できる。

また、縄文土器では、菱根式と呼ばれる繊維土器が多量に出土しているが、基本的には平底が主流であることや、輪積み痕が明瞭に認められるものが出土するなど、新知見が得られている。縄文時代前期後半以降の遺構、遺物は発見されていないが、上層の50層はかなり砂質であることから、縄文海進によって汀線が近くなり、遺跡にも飛砂が及ぶことによって、生活に適しない環境になったため、人が住まなくなったことが考えられる。

上長浜Ⅱ期

弥生時代後期になると、縄文時代前期後半以降、生活の痕跡がみられなかったこの地にも、再び集落が営まれている。発掘調査では、弥生時代後期後半（的場期）の竪穴住居1棟のほか、土坑1基が検出されている。竪穴住居には屋内炉があり、弥生土器のほか、砥石、黒曜石などが出土している。

出雲平野においては、沖積平野の微高地である旧自然堤防上に、縄文時代後期からの遺物散布がみられる。そして、弥生時代中期中葉以降は、弥生遺跡のほとんどが、神戸川が生成した旧自然堤防上に立地し、大規模な拠点的集落は例外なく、そうした選択をしている。また、弥生遺跡のなかには、貝塚を伴うものもみられ、水田農耕とともに、潟湖で貝や魚を捕獲して、豊かな食生活を確保している。

そうした状況の中で、大社町原山遺跡など、砂丘地に立地する遺跡もあり、上長浜貝塚においても、弥生時代後期には、砂丘地に集落を営んでいるが、調査の限りでは、貝塚は検出されていない。

こうした遺跡の立地は、水田農耕が普及した弥生時代においては特異である。弥生時代後期には、海水準が低下することによって、汀線も海側に後退し、これまでの砂丘地も次第に生活ができる環境にはなりつつあるが、かなり立地条件は劣っている。すぐ近くに生活適地があるにもかかわらず、あ

えて、潟湖に面した砂丘地を選んでいることには、何らかの理由があるかも知れない。その理由のひとつとして考えられることは、この集落に住む人々が、農業を生業としない人々であろうことが推定できる。おそらく、海と深いかかわりをもつと考えられ、位置的にみて、出雲平野への海からの入口にあたることは、遺跡の性格を考えるうえで興味深い。時期は少し下るが、古墳時代前期後半の朝鮮半島南部の伽耶から搬入されたと考えられる陶質土器が出土していることも、この遺跡の性格をよく表わしているといえる。また、遺物についても、スタンプ文を出土したり、他地域との交流を示す搬入系遺物もみられるなど、出雲平野の他遺跡とはやや様相を異にしている。

上長浜Ⅲ期

出雲平野では、弥生時代以降の貝塚が13遺跡で確認されているが、奈良時代以降の貝塚は、大社町の砂丘地に立地する中分貝塚と、神西湖南部の谷あいの御領田遺跡と常楽寺遺跡、上長浜貝塚の4遺跡に限られている。御領田遺跡、常楽寺遺跡の周辺には、田中谷貝塚、雲部Ⅰ遺跡、竹崎遺跡などの小貝塚が弥生時代後期以降、集落の一角に形成されている。また、中分貝塚からは、刺突漁具の鉄製ヤスも出土し、専業的な漁村といえるが、規模は小さい。中分貝塚周辺には、既に古墳時代に、鹿蔵山遺跡、南原遺跡が、砂丘上に貝塚を伴なった集落として営まれており、その延長上に中分貝塚があるとみることができる。

しかし、上長浜貝塚は、これまで遺跡が認められなかった、外海と潟湖に挟まれた砂丘地の一角に突発的に出現し、しかも、集落内での消費量をはるかに上回る貝を長期にわたって捕採し、大規模な貝塚を形成している。これは、自然発生的な集落というよりも、むしろ大きな需要に支えられて、漁撈集落の行なうすべての労働が集約された、極めて専業的な集落として確立した姿をみることができる。

『出雲国風土記』には、厳密には時期的に重ならないこともあり、上長浜貝塚については何らの記載もないが、「出雲郡」の条には、「鮑は出雲郡尤も優れり。捕らふる者は、謂はゆる御埼の海子是なり。」と記載している。上長浜貝塚には、鮑は全く見当らなく、サザエ、ウニも極めて稀である。このことから、漁場には厳しいテリトリーがあり、島根半島部の磯に出かけて捕採することは全くなかったと考えられる。捕採場所も、神門水海でのヤマトシジミとカキ、外海の浜でのオキアサリにほぼ限られている。上長浜貝塚にみられるヤマトシジミも『出雲国風土記』の「神門水海」の産物としてとりあげられることもなく、贄として貢納されたり、国庁の役人の食膳を賑わすこともおそらくあまりなかったと考えられる。このことは、出土土器のなかに、その交流を示す陶磁器が全く見当らないことからも窺うことができる。

そうしてみると、上長浜貝塚の大量のヤマトシジミは、官ではなく、民の需要に支えられたものと考えることができる。ヤマトシジミは上長浜貝塚の出土貝類のほとんどを占め、貝の観察から、そのほとんどは、殻をこじ開けたり、焼かれた痕跡もないことから、一度茹でてムキ身にし、干貝として出荷したものと考えられる。大型が多いものの、殻長が不揃いで、選別はしていないが、神門水海がその捕採場所であることは疑いなく、現在でも、神門水海の遺跡湖である神西湖には、宍道湖産より殻長の大きなヤマトシジミが棲息している。

貝とならんで漁業の大きな柱は、魚の捕獲である。その漁法には、釣漁、突漁、網漁がある。釣漁では、鉄製の釣針やその未製品が出土しているが、小型品が多く、舟を外洋に出して、やや深いとこ

層　名	純貝層	魚骨(点)	製塩土器(点)	土錘(点)
2		1074	2	58
3				22
5		1	4	28
7		6		4
8		34		25
10		83		9
13		340		1
16		139		
17		117		
18	○	544		3
19		596		6
21		3094		31
22		1053		19
23		13993	4	52
24	○	481		1
25		3042		29
26		154		1
27	○	129		2
28		23		3
29		3		
30	○	4634		32
31		415		15
32		1	1	
33		9142	221	50
34		165	44	1
35	○	47	7	
36		75	2	
37		13669	39	16
38	○	213	61	4
40	○	458		
41				11
42	○	2063		1
44		79	5	4
45		30	4	2

相　関　表

ろを回遊するマダイを釣ったと考えられる。突漁では、鉄製のヤスが出土している。完成品はないが、おそらく三本ヤスと思われ、潟湖の浅い水面下を泳ぐ魚類を突いたものであろう。網漁は、多くの魚を一度に捕獲できる最も一般的な漁法である。土錘の多くは軽量の管状土錘であり、主に波の小さい静かな潟湖で、刺網によって小魚を捕獲していたと考えられる。小魚は刀子によってさばき、中には保存食料として塩づけにして出荷したものもあったと思われ、焼塩土器が50個体近く出土しているが、多くはこうした使途が考えられる。

次に、貝、魚、製塩土器、土錘の相関について検討する。

まず、貝と魚であるが、純貝層は、18層、24層、27層、30層、35層、38層、40層、42層の８層があり、これらに含まれる魚骨をみてみると、その多くは500点以下であり、総じて、貝を集中的に多く採っているときには、比較的短期間のうちに堆積していることもあり、魚はあまり捕獲されていない。また、貝と製塩土器との関係をみてみると、貝を多く採っているときは、38層（61点）を除けば、製塩土器はほとんど含まれていない。さらに、土錘は、30層(32点)を除けば、ほとんど出土していない。

こうしてみると、貝を多く集中的に採っているときには、魚、製塩土器、土錘は少なく、貝の採取は、これらとはほとんど関連のない個別的な漁撈活動といえる。

それでは、魚と製塩土器との関係をみると、魚骨の多く出土した21層、23層、25層、30層、33層、37層では、貝塚前期の33層から221点が出土するなど、製塩土器との深いかかわりがみられるが、貝塚後期の21層以後には、全く認められない。貝塚前期には、魚を塩づけにして、保存食料とする手だてがなされたと考えられるが、貝塚後期には全く塩は使われていない。23層からは約14,000点もの大量の魚骨を検出しているが、塩を使わない方法、たとえば、乾物にして出荷したものであろうか。次に、魚と土錘の関係をみてみると、これは網漁そのものを示しており、魚を多く捕獲しているときは、自ら土錘も多いという当然の結果がでている。これら各層の土錘の平均重量をみてみると、その多くは、全体の平均値である23ｇに達しない層がほとんどであり、37層だけが、土錘点数は少ないが、平均重量は54ｇで、他層の３倍もある。なお、魚

骨はほとんどないが、貝塚以後の２～８層で、やや大きな土錘がある。特に８層では、平均重量が71ｇで圧倒的に重く、網漁の形態が変わった可能性がある。

こうしてみると、魚と製塩土器と土錘は、密接不離な関連があることがわかる。なお、製塩土器は多いが、魚も土錘も少ない結果が得られている34層や38層については、魚の塩づけ以外の用途で塩が使われた可能性もある。

貝そのものは、塩分を補給する役割ももっているが、製塩により、塩そのものを確保する手段が広まってもなお、貝は採り続けられている。これは、美味で貴重な蛋白源として、欠かすことのできない食物として、定着しているからに他ならない。また、ヤマトシジミという特定の貝に集中しているように、魚についても、クロダイ、マダイ、スズキなど商品価値の高い魚種に集中する傾向にあり、このことは、近在の消費地への商品として、流通していたことを示すものと考えられる。

上長浜貝塚は、高度に専業化された漁撈集落ではあるが、貝塚から出土したシカ、イノシシの骨の中には、犬にかじられたあと(注41)があることから、犬を狩猟用に飼い、武器（鉄鏃）は、殺しょうするためのものであり、漁撈専業集落とはいえ、漁の合間には、こうした狩りをすることもあったと考えられる。

上長浜Ⅳ期

交易商品としての貝の採取をやめても、網漁業は行なわれており、漁撈集落としての形態は依然として保たれているが、実質的には、貝塚後期の22層以後には、漁撈活動は低調になっている(注42)。貝塚を形成していないこともあり、魚骨がほとんど残っていないが、魚は鮮魚として、そのまま消費地に運ばれている可能性が強い。貝を採取しなくなったのは、需要がなくなったからではなく、これまでヤマトシジミの棲息に適していた潟湖の棲息環境が、次第に悪化してきたことが考えられる。それは、河川からの砕屑物の増大により、潟湖が次第に埋積されてきたことが主因で、中世になると潟湖はかなり沼沢地化し、やがて近世には、秦喜兵衛の開拓によって美田に生まれ変わっていく。さらには、遺跡が10数ｍの砂丘下に埋もれていたことからもわかるように、上長浜貝塚付近にも飛砂が激しくなり、生活を維持するには適しない環境になったことも大きな理由であろう。この２点が、やがて漁撈専業集落を放棄せざるを得ない状況に追い込んだものと考えられる。

このように、上長浜貝塚は、縄文時代早期末から中世初期にわたって断続的に生活が営まれているが、遺跡の中心となるのは歴史時代の貝塚である。全国的にみると、古墳時代からの海浜漁撈遺跡である鳥羽市の贄遺跡では、帯金具、皇朝十二銭、刀装具、緑釉陶器、白磁などが発見され、権力との結びつきを示している(注43)ほか、太宰府政庁に直属した厨戸（くりやべ）の集落とされる福岡市の海の中道遺跡(注44)など、律令体制に組み込まれた漁撈集落もある。また、島根県内においても、奈良時代から平安時代の松江市才ノ峠遺跡が農耕と漁撈、イガラビ遺跡が須恵器生産と漁撈の二つの生業から成り立っている集落(注45)であるのに対し、上長浜貝塚は、貝類採取と網漁業を主体とし、近郷の村々を消費地とする漁撈専業集落を形成している。これは、生業生活の範囲が、潟湖と、すぐ近くの外海に限られていたにもかかわらず、中世初頭（12世紀）まで漁撈専業集落として存続し得たのは、ヤマトシジミが貴重な蛋白源として、近郷の村々で広く食用に供されたことと、潟湖という網漁業には絶好の内水面を保有していたからに他ならない。

この潟湖周辺には、弥生時代から鎌倉時代までの貝塚が数多く点綴しており、今後も新たに発見される可能性も高い。出雲平野では、潟湖の消長が、そのまま生業としての漁撈集落の消長に直結して

おり、潟湖の果たした役割がいかに大きかったかを窺い知ることができる。

注

1．「上長浜貝塚」『出雲市埋蔵文化財調査報告書』第１集　出雲市教育委員会（1988）
2．高安克己「出雲市上長浜貝塚出土の貝類」『上長浜貝塚』（1996）
3．同志社大学出雲古文化調査団『出雲古文化調査団報告書』（1959）
4．島根県教育委員会『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅰ』（1980）
5．島根県教育委員会『朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅰ』（1979）
6．宍道正年「県下における縄文早期ないし前期土器の一様相」『季刊文化財』第23号（1974）
7．米子市教育委員会『目久美遺跡発掘調査概報Ⅱ』（1984）
8．前掲注６に同じ
9．足立克己「出雲の前期縄文土器」『えとのす』第16号（1981）
10．島根大学埋蔵文化財調査研究センター『島根大学構内遺跡（橋縄手地区）発掘調査概報Ⅰ』（1995）
11．鳥取県教育文化財団『秋里遺跡』（1990）
12．島根県古代文化センターの松本岩雄氏の好意により、京都文化博物館の定森秀夫氏に、ご教示いただいた。
13．内田律雄『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書４』島根県教育委員会（1988）
14．内田律雄「西ノ島町・外浜貝塚について」『隠岐の文化財』第８号　隠岐島前教育委員会・隠岐島後教育委員会（1990）
15．山本清『島根県出雲市矢野町貝塚発掘調査概報』（1953）
16．田中義昭「出雲市矢野遺跡第１地点の調査」『古代金属生産の地域的特性に関する研究』（1992）
17．大塚初重「島根県出雲市知井宮遺跡の調査」『考古学集刊』第２巻第１号（1963）
18．出雲市教育委員会『古志地区遺跡分布調査報告書』（1988）
19．大社町教育委員会『鹿蔵山遺跡』（1984）
20．松本岩雄「原始から古代へ」『大社町史』上巻　大社町（1991）
21．西尾克己・野坂俊之「神西湖周辺の集落遺跡」『湖陵町誌研究』第４号（1995）
22．前掲注21に同じ
23．西尾克己「大社・中分貝塚」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅷ集　島根県教育委員会（1981）
24．柳浦俊一「出雲地方の須恵器生産」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会（1986）
25．島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書』（1984）
26．広江耕史「島根県における中世土器について」『松江考古』第８号　松江考古学談話会（1992）
土師器については、広江耕史氏から全般的にご教示いただいたほか、古市遺跡出土土師器については、原裕司、榊原博英の両氏に、また、西石橋遺跡出土土師器については、宍道年弘氏のご好意により、遺物の実見及びご助言を得た。西石橋遺跡出土小皿よりも、上長浜貝塚出土小皿の口径が、やや大きい点からみて、西石橋遺跡よりやや古い時期と考えられる。
27．内田律雄「鳥取県・島根県」（近藤義郎編『日本土器製塩研究』所収）青木書店（1994）
28．岸道三氏の教示による。
29．真鍋篤行氏のご教示による。真鍋氏によれば、土錘の孔径の２乗の数値は沈子綱の抗張力に比例し、この数値を網の操業単位に関わる指標とすることが可能という。
30．大社町教育委員会『修理免本郷遺跡』（1992）
31．出雲市教育委員会『山持川川岸遺跡』（1996）
32．調査を担当した島根県埋蔵文化財調査センター主事岩橋孝典氏から、９個体分出土しているとの教示を得た。
33．『海の生産用具』埋蔵文化財研究会第19回研究集会発表要旨資料（1986）
34．これらの石錘については、これまで延縄用の錘とされているが、藤田富士夫氏は、大型石錘（Ｂ群）とし、水深測定器の用途を推定している。
35．柚原恒平「隠岐島発見の大型石錘について」『隠岐の文化財』第８号　隠岐島前教育委員会・隠岐島後教育委員会（1990）
36．島根県立八雲立つ風土記の丘『'83特別展　古代人の食生活』（1983）
37．前掲注11に同じ
38．内田律雄「出雲・長者原廃寺と神門郡日置郷」『青山考古』第７号（1989）
39．穴澤義功氏の指導を受けたときには、既に炭化物集積層をほぼ掘り終えていたため、やむを得ず、すぐ下層で調査している。
40．前掲注20に同じ
41．松井章氏のご教示による。
42．松井章・宮地淳子「上長浜貝塚出土の脊椎動物遺存体」『上長浜貝塚』（1996）
43．岡村道雄「貝塚と骨角器」『日本の美術』第356号　至文堂（1996）
44．朝日新聞社西部本社・海の中道遺跡発掘調査実行委員会『海の中道遺跡Ⅱ』（1993）
45．内田律雄「中海・宍道湖周辺の古代集落」『公開シンポジウム報告書　中海・宍道湖とその流域』島根大学汽水域研究センター（1993）

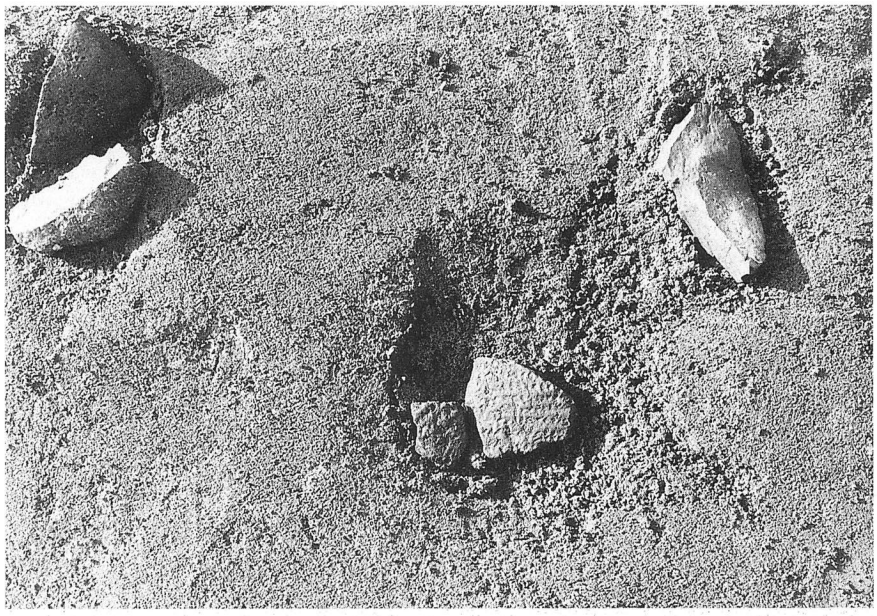
図　　版

上長浜貝塚遠景（中央家の手前）

上長浜貝塚南の砂丘から東方の景観

図版 2

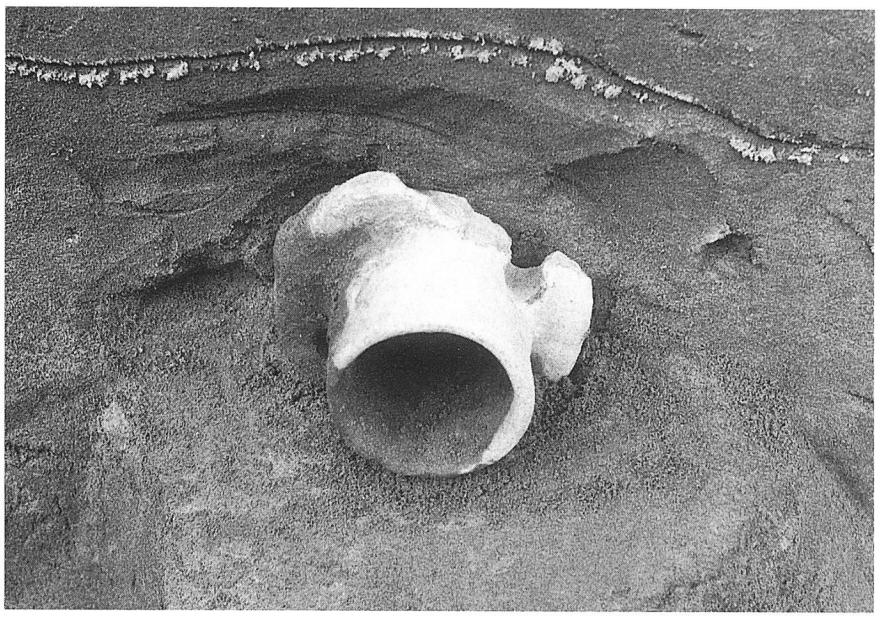
発掘調査区西側土層断面



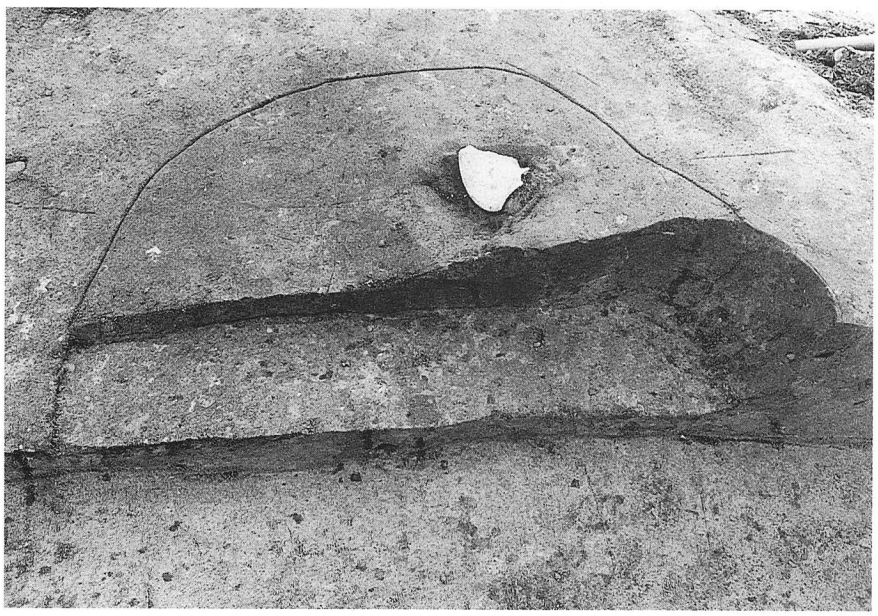
縄文土器・石器出土状況

縄文土器・石器出土状況

ＳＩＯ１調査状況



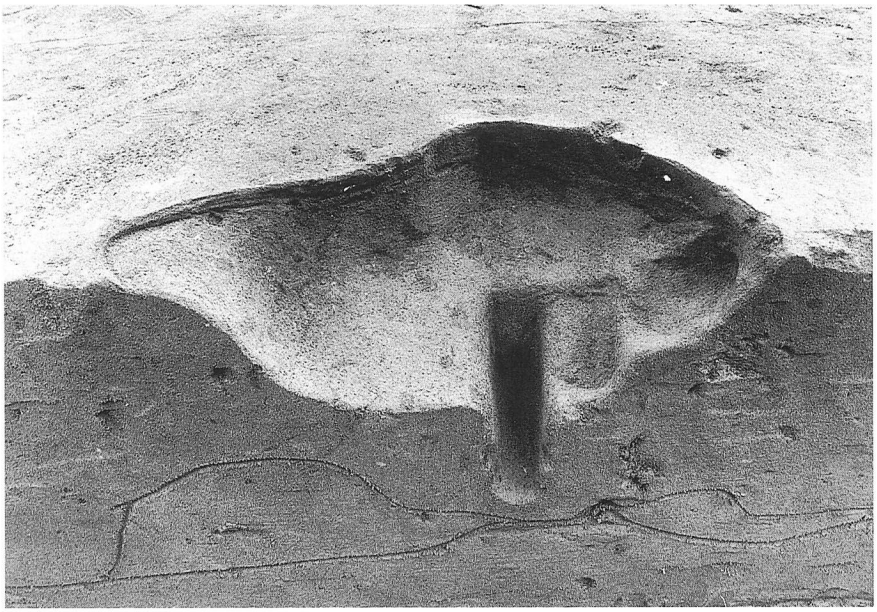
甑形土器出土状態



ＳＫＯ１調査状況

図版 4

高杯出土状況



SKO4 調査状況

SKO2 調査状況